特47
201

凡例

[illegible]を覩る人の、尤議るべき所[illegible]、是編錄の本意なり。明君、賢佐、亂臣、奸賊の勸懲に具ふべき、自ら其中に見ゆれば、必しも評論なしるさず。

吾國の士風、源平の世と戰國の世と異同なきに非ず。凡古の風信を尙び、義を尊び、節操を重んじける事ども、古記に見えたり。戰國の士、多くは利名を貪るにあり。今川氏眞の沒落、北條氏政の滅亡の時、死に殉たる人尠し、[illegible]の士の姓名散逸せん事なげかしく、つとめて殉難忠臣の姓名をしるせるも、又此書の本意なり。

[illegible]の[illegible]藏[illegible]相有る例、誤れる事少からず。一事にて異說多きあり。同異孰か是を知ざるは、其說々をも[illegible]人の姓名及事用の[illegible]ざるも、只記し傳へ、語り傳ふる儘に記せるは、比校すべき典籍のなければ也。[illegible]國の武將[illegible]「くひとめられたる」といふが如きこれなり。皆其傳へたるまゝにしるせり。又いひ傳ふる世の詞も其傳ふるまゝにしるせり。文字を飾飾せざる事は、其世代によりて記錄の實、不實、分明なるが故なり。左傳は、其世の實錄にて、公、穀の二書は後の世にしるせりといふも、其詞によりて分るゝ處なればなり。然れども、火に證れるに至ては改しるせるもあり。世人「甲」を「かぶと」「冑」を「よろひ」とよむが如きは、皆改しるせり。一賞譽すべき事にも非るをしるせるあり。是は唯其世の有さまを想ひ見つべきが爲なり。皆賞譽したりと覺しき事にも心得がたき事あり。天正年中、肥後の有動を秀吉柳川にて殺されし時。立花宗茂有動が臣の供して來れる新田善長が剛の者なりとて、惜みて告しらせられしに、善長、其事を有動にかくして告しらせず。遲をひらくべき道なきを知りたればとて、わが主君の何日禍にかゝるべき事を告ざるを、いかにして其時は褒たりしにや。此は、非義の褒なるべし。されば、かゝる類は此書にしるさず。

十錢文庫

常山紀談緒言

常山は備前湯淺先生の號なり。先生、博覽にして、經史に通ず。嘗て、我國元龜天正より慶長寛永に至る頃の英傑の事蹟勇士の言行の後人の訓誡となるべきものをあつめて、この書を作る。依りて、常山紀談と稱ふ。普く世に行はれ、長く人に愛讀せらる。此頃散人、百華書房主人の求に應じ、其中の要所を抄出して、この文庫中に收む。原書みな字々金玉、之を割愛するに忍びざれども、文庫一冊の紙數限りあり。止を得ずしてこの抄本を作る。なほ以て先生の志をなすに足らんか。其の字句はみな舊に依りてみだりに改めたる事なし。

明治四十三年十二月

迂多散人題す

十錢文庫

常山紀談目錄

○蝮虎平家を語らせて聞かされし事【附】佐野天德寺の事……一
○三河伊田合戰の事……三
○荒木安藝守討死の事……五
○甲斐國韮崎合戰の事……六
○覓三郎功名の事……七
○佐伯惟常高崎城を乘り取る事……八
○那須の臣大關夕安深慮の事……九
○持資京に上りし時の事【附】斬る時の歌の沙汰……九
○木全知短運歌の事……一一
○蝮虎私市城を攻められし事……一二
○蝮虎太田三樂が子を質に取られし事……一二
○大久保忠俊の事……一三
○信長上京の事……一三
○武田信玄の忍びの者を討たれし事……一四
○信玄鹿島傳右衛門を呼ばれし事……一四
○上杉謙信小田原へ攻め入られし事【附】上京の事……一五
○新發田治長の事……一六
○謙信軍中に竹を持たれし事……一七
○謙信松山城後卷の事……一八
○東照宮一向宗の蔵と厚木坂にて五軍ありし事【附】蜂谷半之丞が事……一九
○東照宮針崎合戰の事……二一
○向井與左衛門かへり感狀の事……二一
○東照宮三河國一の宮城ゐ後卷の事……二三
○中島元行が母備中經山城を守る事……二三
○三好松永光源院義輝朝臣を弑す事……二四
○三好實休戰死の事【附】光忠の刀の事……二五
○浦兵部高名の事……二八
○中村新兵衛永原安藝守一騎打の事……二九
○北條綱成地黃八幡の旗を捨つる事……三〇
○柴田勝家水缸を破りて城を守りし事……三〇
○勝家先陣の將となる事……三一
○大澤左衛門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事……三二
○清洲にて東照宮信長公ゐ對面の事……三三
○信長公伊勢の國司を亡し給ひし事……三三
○大久保忠鬪功名の事……三五
○太田下野織墨の事……三五
○北條丹後指物の事……三六
○淺井長政齋藤龍興と軍の事……三六
○丸毛兵庫助軍配の事……三七
○馬場美濃守今川の館を燒く事……三七
○大友義鎮肥前國退口の事……三八
○信長公東照宮に爲朝の鏃を進らせし事……三八
○姉川合戰の事……三九
○姉川合戰榊原二の手功名の事……三九
○三井角右衛門生瀨平右衛門功名穿鑿の事……四〇
○金松彌五左衛門物見の事……四一
○信長公朝倉を擊ち給ひし事……四一
○長野信濃守上野國箕輪城を守る事……四二
○箕形原合戰信玄遠謀の事……四二
○箕形原合戰東照宮ゐ退口の事……四三

○中川重秀和田惟政を撃つ事……四五
○梶川彌三郎槇島先陣の事……四六
○奥平貞能父子歸降の事……四六
○東照宮大井城を退口大久保忠世高名の事……四七
○渡邊守綱を鎗半藏といふ事……四九
○謙信單騎佐野城に入られし事……五〇
○大河内政房節義の事……五〇
○酒井忠次鴟巣城を乘取られし事……五一
○長篠合戰の事……五三
○内藤四郎左衛門返答の事……五三
○多田久藏が事……五三
○佐久間信盛僞りて勝賴に降る事……五四
○二股城攻め内藤櫻井功名の事……五五
○蘆田信蕃二股城を退く事……五六
○信長公秋山伯耆を刑し給ふ事……五七
○松平忠次飯尾原城を守らるゝ事……五七
○山内治太夫進士清三郎功を讓る事……五八
○信長公松永彈正を辱ちしめ給ひし事……五九
○山口六郎四郎奥田三河守高屋の城を落つる事……五九
○東照宮勝賴と大井川にて互對陣の事……六〇
○栗田刑部幸若が鐔所望の事【附】時田が首實檢の事……六一
○岡田竹右衛門見切の事……六二
○朝日千介四郎伊藤を討つ事……六二
○岡崎三郎君の位事……六三
○撫津國花限城落つる事……六五
○高天神落城仁科信盛戰死の事……六八
○勝賴の首穿墨の事……六八
○秀吉勝賴の滅亡を惜まれし事……七〇
○信玄の館の跡を信長公見給ひし事……七〇
○勝賴天目山にて最後の事……七〇
○禪僧廣院勝賴の屍を葬る事……七一
○東照宮依田信蕃を助け給ふ事……七二
○武田信綱誅戮の事……七二
○戸田半右衛門山口小辨佐々清藏功名の事……七三
○小山田信茂誅戮の事……七四
○馬場美濃が女召出さるる事……七五
○辻彌兵衛が事……七五
○明智光秀信長公を弑する事……七五
○秀吉備中にて光秀が書を取られし事……七七
○秀吉西國の米を買はれし事……七七
○光秀居城を築く事【附】辛崎の松の事……七七
○光秀叛狀の事……七八
○秀吉浮田を欺きて上洛の事……七九
○黑田孝隱思慮の事……八〇
○池田家の使者筒井順慶を試みる事……八一
○東照宮和泉國堺より歸國の事……八二
○小寺黑田始末の事……八四
○井口兄弟武勇の事……八八
○吉田六之介首供養の事……九一
○生田木屋之介武功の事……九一
○山崎合戰の時堀秀政寶寺の山を取る事……九二
○森寺政右衛門武名の事……九二

○則武三太夫功名の事……九三
○幸田彦右衛門が母義死の事……九三
○志津ヶ嶽合戰秀吉智謀の事……九四
○堀七郎兵衛見切の事……九四
○佐久間盛政生捕るゝ事【附】久右衛門安次源六郎實政が事……九五
○尼子家の十勇士……九六
○信雄長臣を誅せられし事……九六
○平松金次郎始末の事……九八
○水野勝成高名【附】行狀の事……一〇〇
○初鹿傳右衛門が事……一〇二
○秀吉東照宮の位陣へ戰書を贈られし事……一〇三
○中村一氏紀州の一揆を追ひ拂はれし事……一〇六
○竹中重治の事……一〇八
○戰國の士功を讓る事……一〇八
○羽柴勝雅敵を免す事……一〇九
○利家島越城を攻めらるゝ事……一〇九
○東照宮伊豆にて北條父子に位對面の事……一一〇
○謙信信玄二將を批評の事……一一〇
○仙石權兵衛九州に間者の事……一一二
○島津家久島原台戰の事【附】惡藤某が事……一一三
○立花道雪行狀の事……一一四
○道雪仁愛深かりし事……一一六
○稻葉一徹罪人を免さるゝ事……一一七
○志賀親次山海ヶ崎に兵を伏する事……一一八
○高畑三河功名の事……一一八
○森迫親正討死辭世の事……一一九
○薩摩勢根白の砦を攻むる事……一二〇
○嚴石の城合戰坂小坂先登の事……一二二
○野矢甚右衛門功名の事……一二三
○秋月種長降參の事……一二三
○黑田家岐井谷合戰の事【附】小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房を切る事……一二四
○井伊直政關白を討たんと言はれし事……一三〇
○島井源八郎先登志士を論ずる事……一三〇
○南部越後攻口の事……一三一
○上樣日和と云ふ事……一三一
○蒲生氏郷の陣夜討の事【附】氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事……一三二
○武藏の國八王寺城落る事……一三三
○大音藤藏雨森彦三郎功名の事……一三四
○信雄卿那須に謫はからるゝ事……一三五
○坂部岡江雪免さるゝ事……一三五
○關白鶴ヶ岡參詣の事……一三六
○奥州苅西大崎一揆の事……一三六
○蒲生家の士大將軍兵調練の事……一三七
○氏郷伊達家の剛客を免されし事……一三七
○氏郷佐々木が鎧を細川忠興に贈らるゝ事【附】黑塚の歌の事……一三八
○本多忠勝萬喜が舊臣を呼び出されし事……一三九
○東照宮武田北條の跡位制度の事……一四〇

○東照宮武田の舊臣を召して武物語の事……一四一
○東照宮物具の武物語【附】小野木笠の事……一四二
○秤五定の事【附】一歩金辨當挾箱始まりの事……一四二
○酒井金三郎本を忘れざる事……一四三
○東照宮相摸境を打廻りの事……一四四
○伊藤七藏功名の事……一四四
○井伊直孝用意の事……一四四
○馬場重介武功の事……一四五
○利家白雲の琵琶を種村に與へらるゝ事……一四九
○秦桐若勇威の事……一五〇
○澤村大學朱柄の鎗を持たする事……一五〇
○加藤清正天草の一揆退治の事……一五一
○森本義太夫組討功者の事……一五二
○國富源右衛門組討の事……一五二
○吉田又助川中を積る事……一五三
○太閤名護屋にて大盲の事……一五三
○菅政利、後藤基次虎を斬る事【附】羅山先生南山銘の事……一五四
○泗川の城に狹間を切る時の事……一五五
○加藤嘉明拔駈功名の事……一五六
○井口與市主從功名の事……一五七
○朝鮮より虎と象とを渡す事……一五七
○清正の士卒土穴に住みし事……一五八
○森本庄林黑白鳥毛の鎗箱の事……一五八
○蒲澤某謀信を擊たんとせし事……一五九
○久世三四郎坂部三十郎物見の事……一五九
○野々口彦助物語の事……一六〇
○石谷定清及供に參る事……一六一
○坪内玄蕃心得の事……一六一
○立花清十郎平野與兵衛に對面の事……一六二
○谷太郎左衛門物前心得の事……一六二
○秀吉有岡城へ使者に行かれし事【附】河原林越後、山脇源太夫が事……一六三
○成田助九郎誅せらるゝ事……一六四
○谷大膳武勇討死の事……一六五
○戸川肥後守秀吉公を負ふ事……一六七
○直江兼續が事……一六七
○石田が黨東照宮を謀り奉らんとせし事……一六八
○細川忠興忠告の事……一七一
○東照宮細川家の難を救ひ給ひし事……一七四
○七人の大將石田を討たれんとせし事……一七五

常山紀談（後編）

湯淺天禎輯錄

◎輝虎平家を語らせて聞かされし事

附佐野天德寺の事

輝虎の召されし石坂撿校に平家を語らせて聞かれけるに、鵺の段を聞きて、頻に落涙せられけかかへの者ども怪しみ思ひければ、輝虎の曰く、吾が國の武德も衰へたりと覺ゆるなり。昔烏羽院の御時、禁中に妖怪ありしに八幡太郎鳴弦して、鎭守府將軍源義家と名乘りければ、妖怪忽消えぬと云へり。其後賴政鵺を射たれども、猶死せずして、井野隼人さし殺してとゞめたりと聞ゆ。義家鳴弦せしは、天仁元年の事なり。鵺の出でしは、近衛院仁平三年なれば、僅に四十六年なるに、武德既に劣れる事遙なり。今又賴政におくるゝ事四百五十年、我れ又賴政に劣る事遠かるべければ、覺えず涙の流るゝよとぞ語られける。又相似たる物語あり。附記す。相州北條の幕下佐野城主天德寺勇將なりしに、ある時琵琶法師を平家に語らせて聞けるに、未だ語らぬ先に我れは唯哀れなる事を聞きたくこそあれ、其心得せよと云ひしに、

法師承り候とて、佐々木高綱が宇治川の先陣を語り出でたりしに天德寺雨雫と涙を流して泣きたりけり。さて又今一曲、前の如く哀れなる事を聞きたしといへば、那須與一が扇の的を語る。半に及びて、天德寺また落涙數行に及べり。後日に側に仕へし者どもに、過ぎにし日の平家は、いかゞ聞きつると云ふに、皆面白き事に覺え候。但し一つ心得ぬ事こそ候へ。二曲ともに勇氣功名なる事にて、哀れなる方少しも候はぬに、君には御感涙に咽ばせられ候。今に不審なる事と申し合ひ候ふと云へば、天德寺驚きて、只今迄は各を母賴しく思ひ候ひしが、今の一言にて、力を落したるぞよと、先づ佐々木が事をよく心に浮かべて見られ候へ。右大將舍弟の蒲冠者にも賜はらず。寵臣の梶原にも賜はらぬ生月を、高綱に賜はるにあらずや。其甲斐もなく、此馬にて宇治川の先陣せずして、人に先を越されなば、必ず討死して再び歸るまじき暇乞して出でける。其志哀ならぬ事かはとて屢々涙を拭ひつゝ、暫しありて云ひけるは、又那須與一も、人多き中より撰ばれて、只一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘り入れて、的に向ふに至るまで、源平兩家鳴を靜めて是れを見物す。若し射損じなば、味方の名折たるべし。馬上にて腹搔き切つて、海に入らんと思ひ定めたる志を察して見られよ。弓箭取る道程哀れなるものはあらじ。我れは毎も戰場に臨みては、高綱宗高が心にて、槍を取り候ふ故、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやり、落涙に堪へざりし。然るに各は哀れに無かりしとや。思ふに各の武邊は只一旦の勇氣に任せて、眞實より出づるにては無きやと思はれ候。夫れにては賴母しからずと歎きけるとぞ。

◉三河伊田合戰の事

善德公「御諱淸康安祥二郎三郎殿と世に稱し申す」士卒を憐れみ、勇材おはしませしかば、人々其德に靡き從ひ奉れり。尾張國に向はせ給ひ、森山に陣せさせ給ひしに、不慮の事出で來て、安部彌七郎弑し奉りける、植村出羽守、未だ新太郎「一說新六郎」と申せしが、十六歲にて御側に有り合せ、彌七郎をば立ち處に誅してけり。御家人馳せ集りて唯呆れ居たり。植村人々に向て御敵をば既に切つて棄て候、思ひ置く事もなし。腹切つて御供仕るべしといふ。人々主君の仇敵たらん者をたちどころに討ちし其功云ふに及ばず、これに候ふ者ども御側にだに候はゞ、誰れか御身に劣るべき。御身一人幸に御側にありし事、これ神明の冥助とやいふべき。されば腹切つて冥途の御供申さん事、また誰れかは御身に劣るべき。されば各其所存の如くに振舞ひ然るべし。我等は必死近きにあり、今日徒に腹切らんとも存ぜずと答ふ。植村聞きて、其必死は如何と問ふ。其時抑我等必死は、僅か十日過すべからず。殿斯くならせ給ひぬ、と仇敵の方に聞えなば、彈正忠信秀軍勢を率ゐて岡崎に攻め來たらん。我れ等爰にて腹切らば、誰れか若君の御爲に、矢の一筋もはかゞしく射出すべき。されば我々が討死は、此時にありと覺ゆ。同じく死せん命、遲速は十日を隔つべし。御身が切腹を、

強ひて留めんとにも非ずと云へば、植村聞きて實に理かな。さらば人々と倶に、同じく討死をせんとて、岡崎に引返す。案に違はず織田信秀八千の兵を引率して、三河の國に討ち入り、大樹寺に陣取りたり。此時内膳の正信安も背き參らせ、上野の城に在つて兵をも出さず。昨日まで屬せし國人ども多く心變りしてけり。引き返したる御家人等、僅に八百人、我が君に御暇乞して、一同にどつと泣き叫びてこそ打ち出でけれ。二手に分ちて、伊田の彼方に打つて出づ。此人々の義心を、神明感じ給ひけん。此所に見に給ひし八幡宮の鳥居の、仇敵の方に向ひて、六尺餘り自ら動きけるこそ、不思議と云ふも餘りあれ。人々大に力を得て、寄せ來る仇敵を待つ程に、この所は、上は霜枯の野路遙に、下は賤か田の面に通ふ道一筋あり。織田家の軍も、同じく二手に成りて、上道下道此方に向ひて寄せ來たる。八幡の寶殿の方よりして、白羽の矢降り來り、仇敵の上に落ちかゝると、見物の人の目には見えてけり。上に向ひし味方、野は廣し、眞中にとりこめられ、一人も殘らず討死す、植村下道より向ひて眞先をかく。味方僅に四百人、四千の仇敵を打ち破り、又上道に押し向ふ。野路の仇敵も散々に亂れ立ち、信秀からき命生きて尾張一國に引き返す　これ伊田の合戰とて、十倍の敵に勝ちし事、例少なし、況して大將ましまさぬ軍して、幼き君を立てしこと、古今に比類あるべからずと、義臣の節操を語り傳へて美談とせり。

◉荒木安藝守討死の事

大永年中、細川武藏守高國「入道道永と稱す」三好左衛門督と相戰ふ。三好桂川を渡りて、高國の陣へ押し寄する。波多野備後高國に怨ありて、丹波の兵を引具し、高國に叛き三好に與しければ、高國の軍敗れたり。高國の將荒木安藝守、百ばかりの兵を引き分ち、人々此有樣を見よ。月花酒宴の時の詞には似ざりしよ。恥を知る弓取りなき世なりや。我れ只今道永の爲に、命を棄てゝ恩を報ずべし。さらずは道永遁れ給はじ。此戰場を引き退きたりとも、人並なれば强ち獨のみ、誹らるべきに非ず候へども。義を義とせざるは、弓箭とる身に非ず各又眞の士となりて、われと同じく義をふまんや。いなと思はんには强ふべからず、如何にと云へば、皆こは口惜しき事をも承り候。日頃の所在を知しめさづと覺へ候。いかでか斯かる時、汚き振舞をすべきとて、少しも落ちるべき色なし。荒木、さぞあらん、定に主從の契、この世のみにはあらざりけりと打ち笑ひて、京軍の崩るゝを餘所に見て、ひしと折しき、待ちかけたり。阿波丹波の兵競ひかゝるを、間近く引きうけ、我を誰れとか思ふ管領の下に、荒木安藝守といふ者ぞと呼はり、一同に立ちあがり、先驅けたる敵、十人ばかり突き伏すれば、退る處を追つ立つる事五六十間ばかりを限とし、離れ〳〵になるべからず。遠く追詰めて疲れなしぞと、又其處に折しきかゝる敵を、待ちうけて突き退け、幾度となく戰ひたるに、

敵討るゝ者數を知らず。荒木主從一人も殘らず討死しける間に高國僅に近江に遁れ得たり。荒木平生土卒を愛するに悃情を盡せり。古の食を分ち衣を解き、樂を同うし苦を共にするの風あり。少しの功ある人を棄てず。ある時荒木が親しき由緣ある人と、荒木が士の輕き者と、俱に疫痢を煩ひけるに、療養力の限りに心を付けて、由緣ある人よりも勝りければ、これを恨みけり。荒木、緣者は我れ問はずとも心を附くる人あり。我が何某は賤し。賤しき者は、人おろそかにせん。我れ心を盡さずば、療養怠りあらん。緣者をおろそかにするには非ざれども、先づ重き處に心を盡せるなり。無事の時は緣者親しきといへども、事ある時は士卒の切なる故なり。親しき一族由緣有りとても、陣々別れたれば、互に死生も知られず。士卒は戰場に死生を共にするものなれば、一人とても本意を失はん事我が大なる患なりと答へけるを、士卒聞て、人々恩を思ふ事、骨髓に徹せりとなん。

◉甲斐國韮崎合戰の事

武田晴信父を逐ふの後、諏訪頼茂、小笠原長時、多兵にて甲斐に攻め入り、韮崎にて一日の中に合戰四度に及べり。晴信韮崎に向ふ時、諏訪小笠原のもとに由緣ある者、原加賀守を始めとして、數多甲府に殘されければ、原人々に向ひ、今日の合戰に、各たち功名を遂ぐべきに、留め置かれしは、二心を疑ひての事なり。今日敵に向はずば、長く弓箭取る躬の耻とならん。

いかにと云ふに、皆二心なく疑を蒙らんより、敵にあひて討死せん事、勇士の志に候ふとて、我れ先きにと韮崎に馳せ行きけり。此時晴信軍する事三度、戰ひ疲れたる所に、頼茂長時一手になりて、進み來れば、既に危く見ゆしかども、原が來るに力を得て、勇み進む晴信、原をよびて其志を感じ、日向今井等を後に控へさせ、競ひかゝる敵に當りて打ち破られけり。是れ晴信士を激勵の策にて、わざと原等を甲府に殘されしなるべし。

◉寛三郎功名の事

織田備後守信秀、松平三左衛門忠倫と密に謀りて、岡崎の城を攻め奪らむとす。岡崎に泄れ聞ゆしかば、應政公甚だ憤らせ給ひて、寛平三郎重忠を召し、上和田に往きて、僞りて降參し、三左衛門を刺し殺し來れ。偏に汝を頼むよと仰せありしかば、寛承り候ふとて上和田に至り、降參する由たばかりければ、三左衛門岡崎の士、心を通ずる者あれども、寛兄弟を味方にはやと思ふ折柄なれば、に大悅びて懇に優待にけり。かくて夜深けて後、案内はよく見屆けつ、忍び寄りて、賜りたる脇差にて、三左衛門が脇腹を二刀刺して遁れ出る。平三郎が弟助太夫正重も、兄が後を慕びて上和田に至り、隍の中に隱れ居たりしが、待ちうけて、打ち連れて岡崎に歸る。上和田の者ども追ひかくれども及ばず。應政公感狀を賜はり、羽栗にて百貫賜りぬ。天文十六年十月の事なり。應政公は東照宮の御父なり。

一説、脇差を賜はりける時、これを以て刺し殺すべし。突き貫きたる刄をぬけば必ず聲を立つべし。然らば起き合せ、追つかけて汝遁れ得じ突き棄てゝ遄歸れと仰せられしかども賜りたる脇差をすてんこと、本意に非ずと思ひ、拔いて出でければ、果して三左衛門聲を揚げ、人を呼びける故、各一起き合せて追つかくれども、疾く逃れ得て歸るといへり。又一説に、平三郎は忠倫が平安城長吉の刀を取り得て歸り、忠倫を刺し殺せし標と申せしかば、即ち其刀を平三郎に賜りけるとも云へり。

◉佐伯惟常高崎城を乘り取る事

天文年中大友義鑑の臣、朽網下野親滿謀反して、高崎の城の二の丸を乘り取りて立て籠りしに、体伯惟常は大友家の旗下なるが、杵築より馳せ來りぬ。佐伯平生鷹狩を好む。專ら狩の爲には非ずして、軍だちの爲なり。狩に出る時、ある日途中より使を走らせて士を呼ぶ。士に將たる者は、騎馬の軍兵を引き連れて即時に來る。歩士又は弓の物主たれば、組の卒を引き連れてかけ集る、これゆゑ不意の時といへども騷ぐ事なし。半時ばかりの間あれば、數日前より下知せしよりも、陳列整ひて靜かなり。使に走らかす者は、壯なる者を三十人選びて、馬の前に打ち連れたり。常に駈け走りに馴れて、息長く足健にして、馬にも劣らぬ程なり。此時佐伯が士、杉谷次郎太郎、同次郎三郎とて兄弟あり。相共に一番乘を志し、城の堞何れの方か、上るによるしからんと、目を配りけるに、堞の隅あり。爰に目を附け、素槍の柄を、四五所縄にて足溜りを結ひ、一同に攻めかゝる時、杉谷兄弟、兼て心を付け置きし所に、始めより近附き居て、走り附くと槍を立て掛け、終に登り越えて一番に入りたり。

◉那須の臣大關夕安深慮の事

野州宇津宮の軍、那須に寄せ來りけるを擊ち破り、既に大將をも討ち取るべかりしを、那須の長臣大關夕安兵を纏めて逃ぐるを追はず、人皆今度宇都宮をも破るべきにといふを、夕安聞きて。

雲は皆拂ひ果てたる秋風を松に殘して月を見るかな

といへる古歌あり。今味方にさせる根本の固もなくて、宇津宮攻め破らば、小田原より那須を敵とせん。然らば如何にして那須を守り固むべき、宇津宮を殘して小田原をあひしらはせ、其隙に那須の根を深く蔕を固くして、小田原を敵にもしつべしといふ。皆人これを感じけり。

◉持資京に上りし時の事

附斯る時の歌の沙汰

持資京に上りし時、慈照院殿「義政」饗應せんとなり。慈照院殿に一つの猿あり。見知らぬ人をば必ず搖き傷ふといふ事を持資聞きて猿使に賂して猿を借り、旅亭の庭につなぎ、出仕の裝束して、側を過ぐるに、猿飛び懸かるを鞭を以て思ふさまに叩き伏せたれば、後には猿首をたれて恐れ居たり。持資猿使の人に謝禮して猿を返したり。かくて饗應の日、豫て慈照院殿、彼の猿を通るべき所に繫ぎ置きて、持資が狼狽するを見んと待たれたるに持資を彼の猿見るとひとしく地に平伏す。持資衣紋引き繕ひ、打過ぎたりければ、唯人に非ずと、大に驚かれたるとなり。彼の猿を繫ぎたる戸を、猿戸と云ふ。それより猿戸と云ふ名は起れるとなり。

道灌は讒言によりて殺されたり。文明十八年七月廿六日なり。辭世の歌とて、世に云ひ傳ふる、かゝる時さこそ命の惜しからめ豫て無き身と思ひ知らずば。松田が家の物語にも、斯く記したり。道灌の和歌の集に見えしは戰士を悼みし詞にて、康正元年の冬、藤澤の役に至り、敵も味方も入り交り、三日を重ねて挑み爭ふ事になりぬ。されども、館の武威强うして、北條憲定の主、終に自腹して、餘兵已が志空しうなり、或は仇にあたりて互に死するも侍りし時、藤澤の傍の松原の叢にて、戰ふ男ありしに、味方中村治部少輔藤原重顯とて、京家の人の世にしづみて館に扶持せられて侍りしになん。敵の男は栗毛なる駒に乘りて、二つ引き輪登り龍の紋付けたる指物なりけり。遠目ながら鎧いかめしく見えける。暫し戰ふて鎗を合せしに、目の前に敵の男突き留められ、やがて中村が手づから首を取りて、我が陣に來りて、かう〳〵なんと語りけるに、未だ壯年にも足らぬ男の色白くして丈高かるべき心持して、鬚の邊りたゞならず薫きしめつゝ哀もいや增し、仇ながら憎からぬ面影なり。中村重顯此心ばえの優しき、歌一つ物して手向にとすゝめければ、其首に向ひて、斯かる時云々と見えたれば、松田物語幷に世に傳ふる所は誤なり。

◉木全知矩連歌の事

安藝佐伯郡に、木全知矩といふ者あり。後に宗哺といふ。毛利元就に從はざりければ、圍み攻めらるゝに、兵粮既に乏しくなりて、降參を勸めらるゝに、父祖よりうけ傳へたる城を、容易く人に授くべきやとて、彌服從せず。宗哺は連歌に心を寄すると、元就聞き傳へて、箭文を城中に射入れさせられけり。

秋風にかたき木またの落葉かな　「一說、秋風にまだき木またの落葉かな」

やがて射返しけるに、

寄せ來て沈む浦浪の月

元就大に感じて、圍みを解きて引き返し、程經て和を求められければ、宗哺我れより降參せ

ばこそ恥辱ならめ。此上はとて城を出てけるを、元就懇に持て做し賓客のやうにせられけり。

◎輝虎私市城を攻められし事

輝虎武藏の私市の城を圍まれし時、此城は後に大なる沼有て、堅固の地なり。本丸を外より見ゆるやうに築きたりけるを、打ち巡り見られしに、本丸より二の廓に移る廊下の橋、簀子にて作りたるに、地白の帷子着たる人の影、水にうつらひ見えたり。地白の帷子と云ふは、地を白く紋を黑く染めたる物にて、其比女の多く着たる物とぞ、輝虎是れを見る事三度に及べり。かゝれば本丸には、人質の女童を籠め置きつると察し、やがて柿崎和泉に下知して、大手を攻めさせられけり。城中あはや唯今攻めらるゝと云ふ程に、我れ先にと防ぎける、其暇に近き邊の民屋を壞ち、筏に組みて、後の沼に打ち入れ、鬨の聲を揚げ喚き叫ぶ。本丸の女童大に驚き騷いで、二の廓をさして逃げ迷ふ。大手に有て防ぎける兵ども、さては内通の者ありて、本丸を打ち破られたると思ひ、或は自害し、或は降人となる。輝虎の謀により て力を勞せずして、城忽ち落ちたりけり。

◎輝虎太田三樂が子を質に取られし事

輝虎と北條と、武藏の忍にて陣を合はす。此時太田美濃守資房入道三樂密に謀を北條に通ず。

輝虎かくと聞きて、馬副の者も具せず、唯一騎三樂が陣に行きて、三樂が三男安房守十二歳なりしをひしと捕へて、よくも長成ちつるよ。いざ我が子にせんとて、打ち連れて歸られけにる、三樂が軍兵ども、其猛威に恐れて、手指すことも無かりけり。是れより三樂も、誠に心服したりきとかや。

◎大久保忠俊の事

大久保藤五郎は越前の人なりしが、武者修行して三河に來り、吾が姓を讓るべきは、宇津新八郎なりとて、大久保の姓を讓りしが、其標し功名せんとて、安祥の城攻めに先驅けして、終に討死しけり。新八郎忠俊後に五郎右衛門といふ。今川義元討れて、東照宮大高をひかせ給ふ時、夜半に大雨にて士卒亂れけるに、忠俊御側に附き添ひ奉り、度々乘り返し詞をかけ、人衆をまとめて引き退きけるとなり。

◎信長上京の事

信長桶狹間にて、義元を討ち取りて後、潛に士七八人召し具し、京に上り、帝都の事ども窺ひ見、それより三好が高屋の城に往きて、長慶に望まれけるは、信長尾張にて領し候ふ地を參らせ候ふべし。其地に當る程畿内にて賜はりなば、三好家の先陣たるべし、と云はれ

しかば、三好聞き受くべきを、松永彈正諫めて、其事止みにけり。此時齋藤義龍、信長を殺さん爲に、士十二人堺の津に出したり、と信長聞きて、堺の津に到り、義龍が士の旅宿に行き、何義龍が討手とや、憎き奴原なり。汝等一々首を刎ぬべしとて、刀の柄に手を掛け、はたと睨まれたる勢に、恐れ狼狽てゝ平伏しければ、信長散々ににゝ罵りて歸られけり。

◉武田信玄の忍びの者を討たれし事

甲斐の忍びの者數十人、信玄に叛く事有りて、山小屋に立て籠る。信玄謀にて容易く討ち取らばやと思ひ、殘り居ける忍びの者に、城中に忍び入るに、如何なるが入り難きや、と問はるゝに、内の守り嚴しく、夜廻りの聲繁く、其體顯なるは、怠りも亦料り易く候ふと云ふ。信玄、今山小屋に、忍び入らんはいかに、と問はるゝに、彼の者ども既に能く其理を知り、靜まり返りて、音もせず候へば、其便を得ずと答ふ。信玄それより山小屋に向つて陣し、守り甚だ嚴しく、夜廻り透間もなく呼はらせたり。日數を經て、やゝ怠り出來ぬる時、山小屋より夜討に出でけるを、素より謀りたる事なれば、伏兵を置きて討ち取られけり。

◉信玄鹿島傳右衛門を呼ばれし事

鹿島傳右衛門と云ふ者は、伊豆の人なり。若き比、武名ありけるが、後に髮を雜ぎて、久閑

と稱し、伊東に引き籠りて居たりけるを、信玄聞きて、三千貫の地を與へて招けり。久閑我れ年老いたり。何の爲に奉公すべきとて、出でざりけるを、尋ね問ふべき事ありとて、强ひて呼び出し、春より秋まで、夜々軍物語せさせて聞かれ、自から筆とりて、是れを書き記されけり。信玄四方に大國の敵ありて、威名を震はれしも、斯く心を用ひられし故にや。

◉上杉謙信小田原へ攻め入られし事

附上京の事

永祿三年、謙信八千の師を、相州小田原に出さる。關東の諸將皆々靡き從ひて、十五萬に及べり旗本は、高麗寺山の麓に陣し、先陣太田三樂は、小磯に陣す、北條の兵戰はずして、城に引き入れければ、蓮池まで攻め入り、それより鎌倉に赴き、鶴岡の八幡宮に詣でらる。上杉憲政の長臣等も皆群參す。成田長安警固の者と爭論の事あり。誅罰に及ぶべきといへども、これを宥めらる。成田謙信の怒を恐れ、病して出ず。「これ甲陽軍鑑に、謙信成田を討つと記せしは非なり。」同年六月謙信上京せらる。六月二十八日京都に至り、七月七日光源院殿「義輝」に謁し、吉光の太刀黃金三十枚を獻じけり。光源院殿より管領の任、又諱の字を賜はり、兄弟の義に準ぜらるゝ命を承り越後に歸られけり謙信相州に攻め入る時、京都より近衞關

白前久公を進められ、管領の職を掌る事、此時より始まるとも云へり。又鶴岡に參詣し、管領の職に任ず。近衛關白前久公下向ありて、光源院殿の公方より、大和兵部少輔使たりとも云へり、孰れか是なるを知らず又謙信上京の事、三千許りの人數にて、越後を出られしと云へり光源院殿に謁して後、京、堺、住吉所々遊覽して、國に歸るに及びて、光源院殿に三好松永謀叛の相現はれ見えて候、御書を賜はり候ふならば、馳せ上り誅罰すべき由、密に申されしを、三好松永も察しけるや、深く恐れけり。程なく永祿七年三好長慶河内の若江にて病死しけるを、松永かくして翌年の春に至りて、公方を聞し召し、越後へ御書を賜はりける所に。松永此れをや泄れ聞きけん、急ぎ光源院殿を殺しけると云へり。

◉新發田治長の事

謙信小田原の蓮池まで攻め入り、明日は鎌倉に赴くべしとて、軍評定ありし時、新發田因幡の守治長、其比十五歳なりしが進み出で、斯かる手配りならば、一定味方敗北すべしと申す。謙信怒りて、舌の軟かなるまゝに、物な云ひそと云はれしかば、治長居直り、謹んで、今日より君臣の義を、絶たせたまはり候ひなば、小田原に馳せ參り、北條家の先陣して、君を追ひ討ち參らすべし。酒匂川の此方にては、容易く討ち取り奉らん物をと申す。謙信其時色を軟げ、天晴剛の者よ、神妙にも申したる哉。明日の後殿をせよと命ぜられける。治長軍立

云々すべきとて、やがて事なく小田原を引き取りたり。治長後景勝の世に及て、二心ありければ、景勝これを討たるゝに、新發田五十野兩城を守りて、三年を經て城落ちければ、治長染月毛といふ馬に乘り、三尺五寸ありける光重の刀を抽き持ちて、大軍の中に驅け入り討死しけり。此馬は極めて色白き尾髪なりしに、茜の汁を刷毛にて染めたれば、年月を累ねて後、眞紅の糸を亂し懸けたるに似たりしかとかや。井筒女之助、此馬を得て乘りしと云へり。又景勝治長を攻めらるゝ時、治長が士に、波多野忠左衞門といふ剛力の者あり、景勝の寄せらるゝ道二筋の中に、近き方を三淵というて、一騎打の嶮岨ありけるに、待て景勝の打ち通らん時、むづと組みて刺し殺さんと思ひ、三淵の岩穴に隱れ居たりける。景勝既に討ち向ふ時、皆口々に、近き方より寄せ給へと申す。景勝聞かず。兵法に迂を以て直とすといふ事あり。危き道に不意の患ありといひて、三淵にかゝらず。道を廻りて進まれしかば、波多野が仕度空しくなりけり。

◉謙信軍中に青竹を持たれし事

謙信は、長さのみ高からず。左の脚に氣腫ありて、歩む時足を曳く如く見得しとなり。物の具する事は尠く、黑き木綿の胴服を着、鐵にて造りたる小さき車笠を被り、麾とる事も尠く、青竹を三尺ばかりにして、杖の如く提げ持ちて、士卒を下知せられけり。梁の韋叡が竹如意

の遺風なりとぞ。

北魏の兵鐘離城を攻めし時、梁より韓叡を以て後援させられけり。北魏の將楊大眼、勇將にて數萬騎を率ゐて戰ひしに、叡は素木にて造りし輿に乘り、白角の如意を執りて、軍兵を下知し、切り勝ちたる事史に見えたり。

◎謙信松山城後卷の事

永祿五年三月、北條氏康父子、武田信玄父子、數萬の兵を以て、武州松山の城を圍まるゝと聞き、謙信八千の兵をもて、後卷せられしが、十五日厩橋に着陣あれば、城落ちけると聞えければ、されば是れより、山の根の城へ押し寄せ打ち破るべし。敵後詰めするならば、北條武田父子、四將の大軍に打ち合せて、軍せん事尤も望む所なれと、云ふより早く刀根川を打ち渡り、架けたる船橋を切り流させ、山の根の城に押し寄せ、忽ち攻め落し、小田切三郎を始めとして、皆撫で切りにしてけり。かくて使を、四將の陣に遣りて、松山の城に向はれ候ふ由を承り、出向ひ候ふに、城早く攻め取られ、軍仕る事なくて、弓箭の禮義に背きて候、唯今山の根の城を攻め候ふほどに、後卷や仕り候へと云ひ送られしかば、氏康懸かりて軍せんとす。信玄の曰く、今勝ちたりとも、謙信には四人して勝ちたりと、人に誹られん事口惜しきとて、強ひて留めてさて止みけり、信玄實は然らず。日比謙信の勇氣倍々にても戰難き

に、松山の城落ちて、怒を含みたれば、其の鋒に對ひがたく、虎を恐るゝが如くなりし故とぞ。

又一說に、此時信玄兵を進め、太鼓を鳴らし、軍威嚴然たり。越後の軍兵も物の具し、早や打ち向はんとせしを、謙信いやゝ信玄かゝり來るに非ず、引き取らん爲なり。馬の鞍をおろし、甲冑を脫いで、休息すべしと云はれしが、果して信玄引き返されたりと云へり。

◎東照宮一向宗の黨と厚木坂にて御軍ありし事

附蜂谷半之丞が事

永祿六年十一月十五日、一向宗の黨と、厚木坂にて軍ありし時、一揆より蜂谷半之丞渡邊源藏、眞先きに進み、味方には上村庄右衞門、黑田半平槍を合せ、邊渡黑田を突き倒したるに、味方競ひ懸かりて追つ立つれば、蜂谷も渡邊も引き退て、細畷に懸かるを、水野藤十郎蜂谷何如に遁すまじと詞をかくれば、蜂谷踏み止まり、莞爾と笑ひて、藤十郎如何でか我れ等に敵すべき、いざ參らんとて、槍を地に突き立てゝ、手に唾きを吐きかけ、さらばと云ふ。水野も踏み留めて近付き得ず。蜂谷さればこそとて、又靜かに引き退く。蜂谷が鎗は三間柄の中を少し太くして、長吉が鍛ひたる及なるが、勝れて物を貫きけるといへり。東照宮御馬を

乘り出され、蜂谷め返せと、御詞を懸けらるれば、跡をも見ずして逃ぐる。松平金助餘すまじと追ひつむれば、蜂谷踏み留り、殿なればこそ逃げたれ、御身にはひくまじい、と云ふて取つて返し、金助を五六度も突き退けたりしが、蜂谷鎗を投げ突きにして、金助を突き倒す。東照宮蜂谷奴とて、又御馬を乘りつけさせ給へば、蜂谷引き返し、逃げ退きけるとぞ。蜂谷其後は先立ちて、一向宗の黨を離れて降參し、それより人々願ひ申て、終に一向宗の黨の者ども、罪を御赦し有てけり。其後二連木の合戰に、本多平八郎、牧宗次郎、槍を合せけるに、蜂谷少しく遲れたりしが、蜂谷早や疾く槍は合せたるに、如何にと云ふ者ありしを、半之丞聞きて、他人槍をしたらんに、我れは切合ふまでよ、と云ひ捨てゝ、刀を提げて敵の中へ飛び込んで、二人薙ぎ伏せたるに、河井正德といふ者、鐵砲を構へたる所に走りかゝる。正德隱れなき手練にて打ちたるに、痛手なりしに起きあがりて、其處をば引き取りたれども、蜂谷遂に死しけるとぞ。又この正德、ある時忙しき場にて、後殿しける時、後より其手負ひ打ち取れと呼ばる。これは正德生來跛なりし故、手負ひたると思ひて、斯く云ひたるなり。其時踏み留りて、弓箭神に誓ひて、手負にてはなし。生得の跛ぞと云ひけるより、今川家に賞めて、正德と云ひけるとなり。又蜂谷が痛手負ひたると、其老母の聞きて、いかに首尾のありつるぞと問ふ。其樣子これ〳〵なりと答ふれば、嬉しや士の戰場に出で、矢に當るは常の事なり。若し手負樣のあしかりせば、死したりとも、冥途に面目なかるべし、と云ひけるとぞ。戰國の時、婦人の身も弓箭とる家に生まれたるは、志す所大に異なるもの、想ひみつべき事なり。

◉東照宮針崎合戰の事

永祿七年正月十六日、三河一向宗の黨と針崎にて終日の競合あり。中根喜藏と名のりて、一番槍を合はす。一揆の相手は、渡邊半之丞なりしが、鎗を棄て刀を拔いて飛び込んだり。中根も刀を拔き、互に手負ひ相引にしける處に、鵜殿十郎三郎、渡邊を目がけ追ひ懸けたるを、渡邊が父源五左衛門援け來て、鵜殿を突き伏せたるを、東照宮御覽じて、御手づから鎗を提げ給ひ、槍ぐみ給ひて突き伏せ給ふ。微傷なりしかば、引き退くを見て、石川十郎左衛門、渡邊源五左衛門競ひ懸かりて、東照宮に向ひ奉る內藤甚市弓取り直し、源五左衛門が股を射貫きければ、半之丞父を搔き負ひて引き退き、それより物別れせり、內藤は渡邊が甥なりけれども、御急難の時に當りける故、射倒したるとなり。

◉向井與左衛門かへり感狀の事

謙信信玄と、和平を結ばんとせられし時、長遠寺の僧を使にせらる。此僧は遊說の人なり。謙信彼の僧に、甲斐の士に、向井與左衛門といふ者やあると問はるゝに、これありと申す。

又創の痕やあると問はるゝに、面に刀の痕ありと申す。謙信の曰く、川中島の戰に名のりかけて、我れを後より突き通す處を、ふり顧りて一刀斬りたりしぞかし。よも助からじと思ひつるに、長らへたるよなとて萠黄の胴肩衣に、槍の跡あるを取り出し、書簡を添へて、向井に送られけり。此の世にかへり感狀といふ。其書中に川中島の事を載せられたりと云へり。

◉中島元行が母備中經山城を守る事

尼子伊豫守晴久、尼子刑部、大賀駿河に兵一萬を添へて、備中經山の城を攻めさせる。此城は中島加賀守が子、大炊助元行が守る處なり。元行僅に二百ばかりの兵なれども、些とも恐れず、頓宮次郎左衛門、鷲見九郎二郎に、百姓ばら二百人添へて、寺屋敷といふ地に伏せ置き、阿部左衛門二郎、鷲見五兵衛は、鬼ケ城といふ處に隱し置きけり。敵侮りて押し寄する時、門を開きて打つて出で、相圖の貝を吹けば、鬼ケ城の伏兵後より廻り、又頓宮等、百姓に帝旗を立てさせ、竹槍を持たせ、鬨の聲をあぐる。尼子が軍兵共前後に敵有りとて、助け合はんとすれども、道細く谷深くなだれ落ちて亂れけり。されども攻具を設取り圍みしに、行元が母、物の具の上に羽折を着、刀を横たへ、女房二十人ばかり相具し、元行本丸にある時は、母出丸を巡り、元行出丸を巡ば、母本丸を守りて、士卒の怠りを戒む。或夜風雨甚だしかりければ、元行百人ばかりにて夜討ちに出で、半を道に伏せ置きたり。かくて亂れ入り、

鬨の聲をあげ火をかけて、靜かに引きて返る處に、敵追ひ來れば寄らぬ徑の傍より、伏兵どつと起りて、敵三百餘討ち取つたり。元行に防がれて、尼子の軍引き返して、復攻むる事なかりけり。

◉東照宮三河國一の宮城御後卷の事

東照宮三河の一の宮の城に、本多百助信俊を守りに置かせ給ふ。永祿七年五月、今川氏眞二萬餘の兵を以て圍まれけり。其中八千を引き分ちて、武田信虎を大將として、後卷の防ぎにせられぬ。東照宮斯くと聞し召し、早や打ち立て一騎がけに、馳せ向ひ給はんと見えしかば、敵は味方に比ぶれば、十倍もあらん。殊に信虎は聞ゆる勇將に候ふと、老臣ども諫め奉れども、其理は然るべからん。されども人は貴賤にも依らじ、信義の二つに依りてこそ身を立つる習ひなれ。敵の城攻め落し、其まゝ壞ち捨てなば、さもあらんを既に味方を入れ置きて、今さら敵大軍なればとて、驚くべきや。主の大事は從者が救け、從者の危難は主の救くるは、弓箭とる道なり。今は後詰めに打ち負け、屍を戰場に曝すとも、運の盡きぬる所なり、と仰せければ、是を聞く人々、あはれ頼もしき大將かな。此殿の御爲には命を捨てん事、露塵ばかりも惜しからじと勇み進む。其勢に乘りて、二千ばかりの兵にて、後詰めに打ち向はせ給ひ、信虎の八千にて控へたるを餘所に見て、眞直に城際に押し著け給ふ。城中競ひ悅ぶ

限りなし。氏眞さらば四方を取り圍んで、一人も餘さず討ち取らんと評定する。其の間に東照宮は、百助を召し具し給ひ、城を出て引き返し給ふ。百助今日の戰ひは、身にかけて勵むべく候ふとて、手の者四百餘を以て、信虎の軍に駈け合せ、打ち破りて利を得たり。酒井左衛門尉忠次、石川伯耆守數正、牧野右馬允康成は後殿となる。追ひ駈くる程ならば忽ち切り崩すべき色現はれて見えければ、氏眞も進み得ず。東照宮事なく歸陣せさせ給へり。此れ二十二歳の御時なり。

◉三好松永光源院義輝朝臣を弑す事

永祿八年三好義繼松永久秀、大和河内より京に打ち入り、五月十九日辰の刻、光源院殿の館を圍み亂れ入りければ、防ぐ者ども或は討たれ或は自害す。沼田上野介と福阿彌といふ者、敵の相標、竹の葉を腰に挿して、外より紛り入り、光源院殿の御前に參り、我れ等二人を始めとして、防ぎ箭仕り、思ふほど戰ひ候はん。其間に日比愛せさせ給ふ早足の御馬に召され、東川原に駈け出させ給はゞ、御運を開かせ給ふべきと、涙を流し申しければ、尤も忠義の志、神妙にも申しつるよ。されども、汝等討死したる跡に、殘り留まるべきやとて、散々に防ぎ戰ひて、終に自害ありける。其際に

五月雨は露か涙かほとゝぎす我が名をあげよ雲の上まで

自ら筆を把りて、書き殘し給ひけるとぞ。光源院殿の弟に、鹿苑寺の周暠といふ者ありしが、平田和泉守といふ者迎ひに遣し、北山より出たる道にて討ち取りしに、供せし十三四の童、忽ちに彼の平田を討ち取りければ、世の人賞めあへり。

是れ釋の義俊光源院追善和歌の序に見えて、扶桑拾葉に見えたり。されども童の名見えず、後に信長記を見るに此人の姓名を記せり。小川の住人美濃屋小四郎とて、容貌世に勝れしが供したりしに、此變に遭ひて、三條吉則の刀を拔きて、和泉が首を打ち落し、手許に進む者五六人切り伏せて腹切つて死せし由見ゆ。

◉三好實休戰死の事

附光忠の刀の事

三好修理太夫長慶、細川讃岐守持隆の臣なり。三好は其先甲斐の源氏小笠原の族にて、信州に住せしが、三好長房の阿波の守護として、世々阿波にあり、京都に攻め上り、細川晴元に代りて、五畿内の事を執る、第二の弟を豐後守之長「後實休と稱す」其弟を安宅攝津守冬康其弟を十河一存といふ。天文二十一年實休持隆を殺し、其後室を己れが妾とし、惡逆を恣にす。永祿五年、佐々木義弼京に攻め上りしかば、萬松院殿は八幡にありて防ぎ給ふ。畠山

尾張守高政佐々木に與し、紀州より泉州に打ち出づるにより、實休阿波より渡海し、岸和田の東久米田に陣す。久米田寺に橘諸兄公の墓あり。實休墓を掘り、石の槨を取出す。聞く人眉を顰めずと云ふ事なし。三月五日高政兵を分ち、先陣を額が原に押し出す。實休山上より見下し、自ら眞先に進んで、高政が先陣を打ち破る。檜木山に伏せ置きたる高政の兵に、根來法師相加はり、不意に切つてかゝり、三木内匠一番槍を合せ、實休が先陣敗北しけり。實休は將机に腰懸けて引くな者共と下知し、散々に戰ひ、殘り少く討たれしが、實休をば根來左京打ち取りたり。高政大に利を得、河内に押入る。此時長慶が籠りし飯盛の城を圍み攻む。冬康兄の弔軍を志し、且つ長慶を救はん爲に、岸和田を打ち出で、高政と藤井寺の南、葉引野にて軍あり。冬康勝利を得たり。實休討死の刀は、光忠が作なり。信長光忠が刀を好み、二十五腰まで集められしが、堺にて第一の好事、木津屋といへる商家に、かの光忠の刀を殘らす見せて、此中に實休光忠やあると問はるゝに、一腰取り出して、是れならんと云ふ信長何とて見知りたるやと問はるゝに、切先の少し缺けて候ふは、實休討死の時、根來左京を刎られしに、腦あてに當りて欠けたると、承り候ふと申しければ、信長能く知りたりと云はれしとぞ。

實休討死の時、長慶は飯盛にて連歌せしに、告げ來る○すゝきにまじる蘆の一むらと云ふ句、人々附け煩ひたりしに、其書を披きて、とかくを云はずさし置き○古沼の淺き方

より野となりて、と附け終りてさて實休討死なりと告げ來れり。今日の連歌、是れにて止むべしとてさて兵を出されしとなり。

信長都に攻め上るに及びて、松永は降參し、三好長慶が養嗣義繼は、河内にて自害し、三好の家滅亡せり。

一說、實休は泉州岸和田に、安宅摂津守冬康に守らしめたり。畠山高政は紀伊國廣浦と云へる所に、流落の體なりしが、熊野根來寺の法師をかり催し、岸和田へ押し寄する、實休後卷せんとて渡海し、堺の津にて勢揃ひせり。高政岸和田を攻めんとする兵を、城の上なる山に引き取り、城を見下したり。四國の兵は篠原右京進長房、一宮長門守成助等、岸和田の大手に陣し、實休旗本は久米田にありしに高政が陣を見て、高政東をさして引退くと覺ゆ。遙々爰に來て討ち漏らさん事、口惜しき事なり。山上へ押し懸けて、一騎も餘すまじと下知するを、攝州高槻の城主入江左近太夫、鹽田采女正二人、京より の使として來り居しが、敵は小勢なりと見て、左宣ひ候へど、今已の時なり。高政軍配よし、味方の爲には大凶なり。唯今かゝらば、十に十敗北すべし。暫く時を移し、東の谷より二手にて應接ひ午の時に及びて軍を進むるか、又敵を南山へおびき出すか、此二つの間に過ぎじと云へば、實休心安かれ、時を過さば敵に利あるべし。切つて懸かりなば、彼れなる山を尾傳ひに、東北へ下るべし。左なくば南へ下り、右の尾さきへ引き取

るべし。入江塩田二手に兵少ければ、篠原をさし添へなん。打ち連れて、伏兵になられよ。高政夢にも知らずして、東北の道に出なんを、待ちかけて打たば安かりなん。高政若し物見を出して見付くる程ならば南の山に登り、横合に突き懸かられよ。高政は籠中の鳥なりとて、二人の詞を用ひず。入江等東北の山際に進んで待ち居たり。實休は篠原が兵を以て、高政を誘かせけるに、長房勇みかゝりて進み行く。山の上より根來法師、成田玄齋、雑賀孫市に、實休旗本催に見ゆ、左へ廻りて切つてかゝり、勝敗を一時に決すべし。阿讃淡の三國の兵を引き請けて、一手立なくはあらず、若し實休を討ち漏らさば、ともに戰死すべしと云へば、孫市子細にや及ぶとて、山を下り立ち、眞一文字に實休旗本に押し懸かり、忽ち實休を槍玉に揚げて討ち取りたり。鹽田等は敵を待てども見えざれば如何にと思ひ、物見を出す所に、實休討死を告げ來る。さらば高政が陣に切つて入り、討死せよとて駈け向ひけるに、勝に乘りたる敵をかさに受け、鹽田も討死しければ、殘る兵ども堺をさして敗北しけり。これ永祿五年壬戌三月五日、久米田合戰にて、實休三十六歳なりといへり。

◉浦兵部高名の事

毛利元就、豐前門司の城の圍みを解きて引き返されし時、大友宗麟の士大將瀧田民部、只一騎波打際に馳來る。小早川隆景の士浦兵部宗勝船をさし戻し、陸に上り瀧田を討ち取りて歸る。遠く是れを見る人、誰れならんと云ふに、元就只一人陸に上りたらば、必ず兵部なるべしと云はれしに、果して違はざりけり、井上伯耆と浦と、二人勇名世に高し。二人とも裂れ、たる物の具を著たり、又定まりたる得道具もなく、瀧田を討ちし時も、人の槍を取りて返せしとぞ。

◉中村新兵衛永原安藝守一騎打の事

佐々木と三好と軍す。佐々木は糺に陣し、三好は赤山にあり。三好使を以中村新兵衛と云ふ剛の者あり、我れと思はん人あらば出されよ。人交ぜもせで、戰はせんと云ひしかば、佐々木が内にて、江州に隱れなき永原安藝守といふ者を選り出す。修覺寺村石地藏の前に出遇ひて、永原は直槍、中村は十文字の鎗にて、散々に戰ひけるが、永原を突き伏せ首を取る。中村は近江國の人なり。一日に槍を合する事十七度。首四十一級を得たる事ありければ、世に槍中村と稱しけり。

永原を討ち取りし時、室町將軍靈陽院殿義昭、江州矢島にて是れを聞し召し、感狀に朱塗の物の具、朱柄の槍を添へて賜はりけると云へり。一説に攝州を半分領しける松山新介が士にて、唐冠金纓の冑を著たりといふ。

◉北條綱成地黄八幡の旗を捨つる事

相摸の深澤の軍に、北條家の先陣の大將、北條左衛門太夫綱成敗北して、捨てたる旗を拾ひ取て識りけるを、信玄聞きて、逃げ走りて汚なく棄てたるにあらじ、必ず地利を計りて、戰を、心懸けたるならん。旗を棄てしは旗さしの罪なり、いかでか嘲り笑ふべきとて、眞田一德齋が末子の源次郎に、左衛門太夫が武勇にあやかれとて、かの旗を與へられけり。練絹三幅朽葉地黄にて、八幡といふ二字を染めたる物にて、世に地黄八幡と稱へしなり。左衛門太夫斯くと傳へ聞きて、信玄の詞にて、恥辱を雪ぎたりと悦びけり。是れ信玄遠き慮ありて、斯くは云はれしなり。左衛門太夫は、其比勝れたる勇將なれば嘲り笑はるゝと聞きて、必死の軍するならば、其鋒支へ難しと察せられて、其憤りを散せん爲とぞ。

◉柴田勝家水缸を破りて城を守りし事

永祿十二年佐々木承禎柴田勝家が守る所の長光寺の城を圍て攻むる。遂に惣構を打破る。勝家本丸にありて、爰を專途と防ぎ戰ふ。鄕民佐々木が陣に行きて、此城は水の手遠く、遙なる所より水を取り候。それを取り切る程ならば、城は保つべからず、と告げ知らせければ、承禎悦びて水の手を取り切つたり。城中是れに困しめども、弱れる色を現はさず。承禎これ

を見ん爲に、和平せんとて、平井甚介を使にして、城中に入らしめたり。平井勝家に對面して手水を請ふ。缸に水滿ちたるを、小性兩人して舁き出でたるに、平井手を洗ひければ、小性殘れる水を庭に捨てたり。平井歸りて斯くと云へば、事の違ひたる故に怪しみ合へり。かくて城中既に水竭きければ、勝家明日は討つて出で切り死にせんとて、諸士を集め最期の酒宴す。殘れる水を問へば、二斛ばかり入るべき缸を舁き出す。さらば此間の渴をやめよとて、人々汲み飲みてければ、勝家眉尖刀の石突にて、缸を碎きたり。夜明け方に門を開き打つて出る。佐々木思ひも依らざれば。大に敗北しければ、勝家首八百餘級を得て岐阜に獻ず。勝家は猶長光寺にあり。信長感狀を與へ、賞せらるゝ事大方ならず。是れより勝家を、缸破柴田と世に稱しけり。

◉勝家先陣の將となる事

信長勝家を以て、先陣の大將とす。勝家固く辭すれども、再三强ひて、後仰を承りぬとて退出する時、安土の城下にて、信長旗本の士に遭ひたりしに行當れり。勝家無禮を責めて遂に切つて捨てたりければ、信長怒られけり。其時勝家謹んで申しけるは、さればこそ、先陣を辭し申すべきや。先陣の大將たる者、威嚴なき時は、下知行はれざるものなり。如何にと云へば、信長詞なかりけり。

◉大澤左衛門が手の者ども東照宮を窺ひ奉りし事

永祿十二年四月、東照宮濱松に歸らせ給ふ時、

これは今川氏眞を、武田信玄攻め落し、氏眞ときの山家に引き籠りけるを、東照宮父義元のよしみ故に、遠江をば德川家より治むべし。信玄に取られたるよりは優るべきなり。さらば小田原と相計りて、兩旗にて信玄と軍すべき、と氏眞に仰せられしかば、忝き由申して、掛川の城を德川家に渡し、氏政信玄薩埵山にて對陣し、足輕競り合ひあり。東照宮の先陣駿河へ攻め入り、山縣三郎兵衛を追落しければ、信玄前後に取り挾まれて、勝利あるまじきを計りて、甲州へ兵を返されけるゆゑ、東照宮も御歸陣なり。

堀川の城を打ち過ぎさせ給ふ時、大澤左衛門尉

これより前永祿十一年、東照宮遠江を過半治め給ひし時、降參しけるものなり。が手の者ども、去年より零落れたる面々相計り、尾藤主膳村山修理、兩人を大將にして、堀川に密に一揆を構へ、通らせ給ふを待ちかけて、討奉らんと仕度しけるに、それを知し召さずして、七騎にてち打過ぎさせ給ひぬ。一揆ども餘りに騎馬の少かりければ、斯くとも知らず、其後より石川伯耆守數正通りけるを見て、さては先に通らせられしにや、容易く討つべき物をと悔みけるとぞ、創業の人君天の佑けおはしけると覺えたり。其後堀川の一揆を攻めらるゝに此城潮のさしたる時は、船の出入自由なるに、折しも引潮にて、唯一方口の城なりしかば、落つべき方なくて、皆討ち取られけり。

◉清洲にて東照宮信長公御對面の事

永祿十二年、尾張の清洲にて、東照宮信長に始めて御對面の時、他の刀持ちたる士、式臺にとめらる。植村庄左衛門家正御刀を持ちて通らんとす。これをも押し留むれば、德川家の士に、誰が下知にて止むるや、と云ひ捨てゝ押し通り、御前の白洲に通りたるを、信長見て何者ぞと問はるゝに、東照宮我が士に候ふとて答へ給ふ。信長植村は聞ゆる勇士なり。今日の會は大事にあらず、心安かるべし、天晴よき士、數多候ふぞと感ぜられける。莊左衛門後出羽守といふ。

◉信長公伊勢の國司を亡し給ひし事

永祿十二年、信長伊勢の國司北畠中納言具教を、大河内の城に攻むる。數月經て、城强くして些ともひるまず。信長織田掃部介を使にして、信雄を以て具教の子具房の養子として、和平すべしと云はせられしかば、人質を取るに同じとて、和平事なりぬ。信長岐阜に歸り、二男茶筅丸十二歳なりしが、士數多附けて伊勢に行く。大河内に至りて國司に對面し船江にあ

り。具教は世を具房に譲りて、三瀬といふ所に閑居せられしが、尚信長に背く志ありければ、信長國司の家の者共をかたらひ、天正四年十一月二十五日、三瀬にて弑しけり具房は信雄の養父なれば、河内「大河内か」に押し籠めて置かれけるが、天正十六年に死去す。其元祖、親房卿より具房に至て、十世に及ぶとなん。具教の弟南都東門院の住僧なりけるが、具教弑せられけるを聞き、南都を出て伊賀に赴き、還俗して北畠具親と稱し、三瀬河股多藝小梨の諸士を語らひ、仇を報ぜんとすれども、利なくして中國に流落し、毛利家を頼み、備後の鞆に居たりけり。具親兵を起す時、天正六年信雄の兵、波瀬峰の城を攻め落す。六呂木、山副、波多瀬三郎、此三人を生捕りたりければ、死罪にすべきと議せらしに、三郎が容貌世にすぐれしかば、信雄助くべしと云はれしを、三郎聞きて三人同じく生捕られ、罪又相同じ。二人死して、一人助かる事面目なし。共に誅せられ候といふ。二人は年老いぬ。惜しむべき身にあらず。三郎は仰せに從ひ候へと、勸むれども聞き入れず。遂に三人共に磔にかけらるゝ時に、三人君の御爲に命をすつる事、士の思ひ出面目これに過ぐる事無しとて、謠をうたひ、物語りして誅せられけり。三郎此時十五歳、惜しまぬ人なかりしと云へり。玉井新次郎といふ者、具親に心を合せ、信雄に背きしが、父兵部少輔と母ともに、神戸に隠れ居たりしを搜し出して、櫛田河原にて磔にせらる。兵部少輔子の新次郎を呼びて、汝今度君の御仇を報い、北畠の家を興さんと志しける事士の本意、吾が生前の悦びなりとて、水を乞ひて

父子三人盃を汲み交はして、其後殺されしをぞ。織田家の刑罰、仁者の道にあらず。其暴逆終を合せざること道理なり。

◎大久保忠隣功名の事

永祿十二年今川氏眞、遠州掛川の城沒落の時、天王山にての合戰に、大久保治右衞門忠佐敵を突き伏せ、甥の新十郎忠隣に其首取りて、汝が功名にせよと呼はりければ、忠隣七歳なるが、人の呉れたる首何にかすべきとて、敵の中に駈け入りて首をとる。味方原にて諸軍散亂して、東照宮に附き奉る人少かりしに、御側を離れず。後は歩立にて御供しけるを、小栗忠藏敵の馬を取り來て、それに乘れと仰せ有つて、其馬に乘て御供申しけり。後に相摸守と申せしは此人なり。

◎太田下野識鑒の事

太田三樂が内に、太田下野といふ士、能く人を識る。其詞違はざりしかば、三樂如何なる故ぞと問ふ。下野別の子細も候はず。例へば連歌する者の、古歌を覺え候ふは、我が連歌の益にせんとなり。士の功名を志す者も又然なり。其人々の嗜み好む所によりて察し候へば、十に八九は違ひ候はぬものなりとぞ答へける。

◎北條丹後指物の事

北條丹後一尺四方の白練に、黑き蟻を繪に書きて、指物にしけるを、謙信見て、汝が指物、餘りに小きは、如何なる子細ぞと問はるゝに、丹後誠に味方よりは、見え難く候ふべし。されども、進むに先駈けし、退くに何時も後殿せんに、他人の大なる指物も此小四半と、敵の見る所は同じからん、と存ずるなりと申せば、信謙道理なりと云はれしとぞ。

◎淺井長政齋藤龍興と軍の事

淺井備前守長政玉淵川をかぎりて、齋藤龍興と軍す。ある時長政、五百ばかりの兵をすぐり、關原野上の宿に火をかけ、樽井の前なる小川に、柵の木結びて待ちかけたり。龍興一萬ばかりにて出るゝ長政聞きて、百人許を菩提の徑より、敵の後へ廻らせ、自ら四百ばかりを以て、敵の怠るを夜討にしたりけり。徑よりの兵も馳せ來り、思ひも寄らぬ所より、鬨の聲をあげしかば、龍興内通の者あるよと思ひ、狼狽てゝ岐阜に引き返す。長政大垣の邊、所々に火をかけさせければ、龍興敵勝に乘つて大垣を攻むならん、いざ援けよとて、岐阜を出でしかば、長政やがて引き返す時、足輕の物に馴れたるを三十人、樽井の土民の家に隱したり、龍興樽井に入て、士卒も疲れしかば、兵粮つかうで怠りたりける時、隱したる足輕ども所々に火をかけて燒き立つる。長政思ひも寄らぬ所へ押し寄せて散々に打ち破り、やがて南宮山に登りて敵を待つ。龍興二度まで敗北し、口惜しく思ひて、四面を取り卷きて、餘さず討たんと押し寄せたり。長政見て、敵は大軍なり。十死一生の戰とは是れなるべし。我が下知なき内は、箭の一筋も射べからずと云ひて、攻めかゝるを待て、山の上より一文字に切つてかゝれば、龍興大に敗軍し、是れより長政を恐れて、復軍する事無かりけり。

◎丸毛兵庫助軍配の事

丸毛兵庫助長住、其子三郎兵衛長隆、龍興に奉公して、美濃の多藝郡大塚の城にあり。安藤伊賀守氏家、常陸介龍興に叛きて大塚に押し寄る。兵庫父子三百ばかり、大塚より一里餘り出てゝ陣し、城近き百姓老若男女を云はず驅催し、手々に竹竿を持たせ、大軍の體に持て做し、終に氏家を擊ち破りしかば安藤等も又龍興に降參し、丸毛父子に祿を增し感狀を與へられけり。

◎馬場美濃守今川の館を燒く事

信玄駿河に攻め入る時、朝比奈兵衛を始めとして、軍する者なく、今川氏眞落ちられしかば、信玄疾く今川の館に馳せ行きて、名物の寶物ども奪取り來れと下知せらる。馬場美濃守氏房

聞きもあへず、唯一騎鞭に鐙を合せて、館に駈け入り、火をかけて燒拂ひけり。是れ寶物ども奪ひ取りて、貪慾の師なりと嘲けられん事を、慮りたるなるべし。

◉大友義鎮肥前國退口の事

元龜元年の春、大友左衞門督義鎮、肥前の龍造寺山城守隆信を討つ。隆信和を乞ひしかば、大友兵を加へず。肥前と筑後の堺に、千栗といへる大川あり。吉岡下總入道宗觀といふ者、龍造寺は大敵なり、勝負もわかれず、故なく和を乞ひしは、謀あるべし、千栗を渡らん事、容易からじと云へば、義鎮も尤なりとて、豐後の留守に置きたる佐伯紀伊守惟教、其子彈正少弼惟眞、田原近江入道紹恩を呼び寄せ、六千の兵を二陣として、千栗の渡に備へて、川をわたる。隆信は謀りて、敵の引き退かん所を、不意に擊たんと謀りしに、大友の設ある事を聞きて追はりざしとなり。

◉信長公東照宮に爲朝の鏃を進らせし事

元龜元年六月、信長朝倉を擊つて龍ヶ鼻に陣す。東照宮援兵のため、二十四日江北に御着陣、評定の時、信長槍を持ち出でゝ、此槍は鎮西八郎の鏃なり。德川殿は源氏なれば進らせ候。明日の軍に勝利候へと云はれけり。今の虎の皮投鞘の御槍是なり。

◉姉川合戰の事

姉川の軍に、信長は龍ヶ鼻山を左にして、淺井長政に向はる。東照宮は龍ヶ鼻を右にして、朝倉が二萬餘りに向はせ給ふ時、小笠原與八郎氏助二千ばかり先陣に進んで川を渉る。氏助が兵伏木久内、中山是非之助、吉原又兵衞、林平六、伊達與兵衞、奈左近右衞門、渡邊金太夫照、七人鎗を合する中にも、渡邊は朱の傘に、金の短冊十八附けたる指し物を挿し、堤の上を進む。信長見て其夜召し出して、天下の槍なりといふ。感狀に眞宗の刀を添へて與へらる。殘る六人の者共憤りて、各猶進んで槍を合せしかども、畠の中なりし故、見とめられず候ふと申しければ六人共信長感狀を與へらる。

◉姉川合戰榊原一の手功名の事

姉川にて、酒井左衞門尉忠次先陣たり。二陣は榊原康政なり。酒井を始め小笠原與八郎、菅沼新八郎、奥平等、川を渉りてかゝりけるに、岸高く上りかねたる處に、榊原眞一文字に進んで、上り難き岸を、無二無三に押し揚げよとゑいとう〳〵と云ひて押し上う、酒井が先に進まんとするを見て、酒井が兵遲れては無念なりと、競ひかゝりて利を得たり。東照宮榊原が二の手の仕方以來の手本なり。二の手は斯くの如く仕度くこそと仰せありけり。

◎三井角右衛門生瀬平右衛門功名穿鑿の事

姉川の戰に、坂井右近が子久藏、十六歳にて討死す。久藏は十二の時、信長始めて京に入りし比、近江北郡にて、鎗を合せたる剛の者なり。三井角右衛門、生瀬平右衛門、二人とも久藏が首を得たりといふ。二人後關白秀次に仕へければ、此事沙汰ありて、三井が僞りなりとて、鷹部屋に押し籠め置きて、罪に行はれんとす。三井命を惜むにあらず。人の功名を盜みたる惡名の、子孫の恥とならん事口惜しければ、今一度詮議して賜り候へ。證據は淺見藤右衛門に問はれなば、實否正しかるべしと訴へたり。淺見を安土より呼ばれけり。淺見は生瀬と久しき友なり。三井とは日比中好からず、不通なれば疑ひもなく、三井が僞りに定まるべし。三井惑亂して、淺見を證人にしたりと誹り笑ふ人多し。さて聚樂の廣間に、奉行列坐して、雀部淡路守を以て尋ね問はる。淺見承り、生瀬は年比の知音なり。三井とは不通にて候、是非世の人の評せん事も迷惑なり他人に仰せ付けられよと、懇に辭し申す。中好からぬ三井が、虛妄を云ふに心よからぬは理なれども、證人に引きたる上は、疾く申せと勸めらるれども猶辭し申す。秀次聞きて重て辭すべからずとなりければ、其時淺見、今は已む事を得ず候。武義の論少しも詐僞候ふまじ。坂井が首は、三井が取りたるに紛れなく、又其働きも比類少く候。生瀬は何と存じ過ちたるにやと云ひければ、一坐駭きて、とかく云ふ人なく、

これによりて、三井を赦して賞せらる。生瀬は秀次に寵せらるゝの故に罪に及ばず。右近は信長の大將なり。三井生瀬は朝倉淺井兩家の士なり。淺見は後京極高次に仕へて、大津の城にて武名を現はしけり。

◎金松彌五左衛門物見の事

信長淺井長政を擊つ時、長政が木造の陣、俄に騷ぐ體の見えしかば、猪子兵助を物見に遣られけるが、又金松彌五左衛門をも出されけり。猪子馬に白泡かませて馳せ歸り、敵は引き退き候ふと云ひもはてぬに、金松乘り歸り、敵押し寄せ候ふと云ひ捨てゝ、又先陣に行つて槍を合せたり。信長後に二人を呼びて汝等見し所は、如何にと問はるゝに、猪子敵は荷附けたる馬を、遙に遠く引き退け候ふ程に、引き退くと見て候ふと申す。金松承り見る處は、猪子に同じく候されども軍を志し候ふ長政、故なくして、空しく退くべきや、押し寄せて戰はんためと存じ候ひき、と申せしかば、信長大に賞しけり。

◎信長公朝倉を擊ち給ひし事

信長越前に攻め入る時、朝倉義景二萬ばかりの兵にて、刀根山といふ大山に陣取り、麓に信長の先陣控へ居たり。ある日、信長井樓に上り、敵を見渡し、敵は今夜必ず引き退くべし、

先陣の者共な怠りそと、使を度々遣りて下知せらる。是れを聞きて、殿は如何て斯くは仰せ候ふやらん、敵大軍にて、山に據り地の利を得て、且主戰なれば、何條引き退くべきと怪しみけり。夜に入りても、信長は猶井樓にありて、敵陣を睨んで、目も離たずしてありしが、丑の刻ばかりに、すはや敵は退くぞと云ふ程こそあれ、螺吹き立てさせ、馬に乘り、先陣の大ぬる山の奴原が、油斷したるに、旗本の者ども、功名せよとて、眞一文字に進まれしが、果して、先陣はおくれて、信長の旗本にて勝利を得られけり。信長常に怠る者を大ぬる山と て笑はれしとぞ。

◉長野信濃守上野國箕輪城を守る事

上杉の舊臣、上野の長野信濃守業正は、在五中將業平の後胤なりといへり。世々上野箕輪に在り。此城は、大名明神の山を尾崎をとりて、城の廓とす。廓の形箕の手に似たりとて、箕輪といふ。上杉家衰へけれども、獨立して武威を震ひ、信玄に屬せず。信玄これを攻むること五年、終に一度もおくれを取らず。病の後、二年を經て落城すといへり。

◉箕形原合戰信玄遠謀の事

箕形原の戰終りて、皆濱松の城を攻めんと云ひけるに、信玄勝つて兜の緒を締むといふこと

ありとて、軍を返されけり。此時信長に、白須賀に毛利河内守、山中に瀧川伊豫守、吉田に稻葉伊豫守其兵三萬餘りにて置かれたり。若し信玄勝に乘りて引き取らずば、信長二萬二千を率ゐて押し寄せ、毛利瀧川等も思ひも寄らぬ所に、打つて掛かる程ならば、必ず濱松より も切つて出で、中に取りこめて軍せんと、吉田より岐阜まで、一里に一人の忍の者を置いて待たれけるに、信玄引き返されしによりて、信長の謀空しくなりぬ。

◉箕形原合戰東照宮御退口の事

箕形原の軍に、甲斐の兵激しく追ひ掛けたりしかば、東照宮幾度となく御馬を返し給ふ。大久保五郎左衛門忠次手負ひて、歩立ちになりしが、沼菅藤藏定吉に詞を掛れば、忠次を馬の前輪にのらせて退きたりけり。後に菅沼に長光の刀を賜りて、賞せさせ給ふ。菅沼又引き返して、追ひ來る敵を防ぎけり。天野康景、長坂源次郎、坂部又十郎等も、踏み留りて防ぎ戰ふ。大久保相摸守忠隣「此時新十郎」馬を射られ、歩立ちに成りて危かりしを御覽じて、小栗忠藏久次「後に忠左衛門と稱す」に、新十郎若武者なり、あれ助けよ、と仰せられしかば、久次己が馬に、忠隣を抱き乘せて引き退く。敵透間なく追詰め奉りける武者ありけるを、野中三五郎重次、返し合せて討ち取りければ、後に信國の刀を賜りぬ　畔柳助九郎御馬の傍を離れず、後に金の扇を賜はりて。賞させけり。猶敵手繁く追詰め奉りけるに、水野太郎作踏

み留まりて、防ぎ戦ふを御覽じて、又御馬を引き返さる、成瀨吉右衛門正一は、兄が最後に、汝は此邊の案内能く知れり。御供して恙なく引き取らせ奉るべき由云ひたりしがば、御側に附き奉りしが、引き返して敵を追ひ退け、終に濱松の城に入らせ給ふ。鳥居彦右衛門元忠に御下知ありて、玄默口の御門を開きて、引き取る兵を入らせらる。たとへ敵慕ひ來るとも、我が籠る城に容易く討ち入るべきや。門を閉ぢずして篝火を所々に焚くべしと仰せらる。此日は天曇り雪散りて、寒氣殊に甚だし。御供して馬より下り立ち、城中に入る人々は、松平八郎三郎康定、松平彌九郎景忠、平岩七之助親吉、大久保忠隣、菅沼定吉、都築惣左衛門秀綱等なり、都築が妻粥を持たせ來りて、御供の人々に配り與ふ。後に衣服を賜りて賞美あり。今日敵の跡を踏んで戰はゞ勝つべきに、味方早り過ぎて、心ならず敗軍しぬ。口惜き事なりと仰せあり。湯漬飯を、侍女久野奉りければ、三度替給ひ、我れ疲たりとて、御枕をかたぶけられ、鼾かさて御睡あり。山縣城近く攻め寄せ。門の扉をたつるに、暇なしと覺えたり、如何に攻め入らばやと云ふを、馬場美濃守聞きて、討ち負けて引き取りたれば、門を閉ぢ橋をも引くべきに、左はなくて、篝火白日の如し。もし謀あるべきか、輕々しく攻むべからず。德川殿は海道一の弓取なり。よく見屆けてこそとて、猶豫しける處に、城中より鳥居彦右衛門、渡邊半藏、同半十郎、櫻井莊之助、勝屋甚五兵衛を始めとして、屈竟の剛の者ども百餘人突いて出でしかば、甲斐の兵、虎口を引き退きて攻めざりけり。

◉中川重秀和田惟政を擊つ事

天正元年、將軍義昭織田信長と不和の事出で來て、和田伊賀守惟政將軍の味方して、攝津の國に陣す。信長和田を始めとして、誰某が首取りたらん者には云々賞すべしと、書き記して札を立てられたり。中川瀨兵衛重秀、此時は荒木村重に屬したりけるが、此札を打ち見、筆取りて、和田が名に點をかけ、自ら姓名を記し、家に歸り、妻に向ひ事の由を語りて、萬一生きて歸りなば、又こそ見參すべけれと云ひしに、妻聊か患ふる色なく、さらば軍の門出祝ひ給へとて、あつもの勸め、酒取り出したり。其夜子の刻ばかりに、伊賀守が首取つて來りけり村重大に驚き、如何で斯く容易う、和田をば討ち得たるとぞ云ふ、重秀、さん候、明日必ず戰ひを決すべし、されば討たるゝ者少かるべからず、同じく死なん命を、此夜の中に捨てなんには、和田が首取り得つべし、敵も明日の合戰を大事に思ひ、淀河ハ深淺を踏み見んに、惟政さる大將なり。物見を頼むべからず、自ら來らんは必定なり、天晴討ち取らんずものを、もし又討死せば多くの敵の中に入りて、大將の首取らんとて、討死したりと人いはんは、武名は朽ちじと思ひ定め、水を渡り、彼方の岸の柳陰に、伏し隱れて待つ。案の如く、和田二陣に控へて、出で來るを紛れ入り、終に擊ち取りて、水中に飛び入り、遁れ得て歸りぬと申しければ、人々感じ合へる事大方ならず。

◎梶川彌三郎槇島先陣の事

天正元年、信長靈陽院殿を、宇治の槇島の城に攻むる時、折しも雨降りて、川水岸を浸せり信長馬を水涯に駐めて、昔の梶原佐々木も、鬼神にてはよもあらじ、と云はるゝ處に、武者一騎、川へ打ち入りたるを見て、梶川彌三郎高盛なるべし、梶川討たすな、渉せと下知してそれより我れ先にと打ち入りて渉しけり。此戰の前に、信長黑の馬を、梶川に與へらる。其時信長、梶川が志、重ねての軍に眞先駈けんずる者なり、と嘲笑ひて云はれしが、果して其詞に違はざりけり。

◎奥平貞能父子歸降の事

天正元年、三河作手筑手の城主、奥平監物貞勝入道道文、其子美作守貞義、孫九八郎信昌皆勇氣逞ましき人にてありしに、近頃道文は、武田家に心を寄せ、勝頼の士大將甘利を、作手の本丸に置き、奥平父子は外廓にあり。信昌信玄の死したる事を、隱せるを悟り居し處に、東照宮より本多豐後守廣孝を以て、歸降の事を勸め給ふ。信昌父と大父とに勸めて、密約をなす。武田家奥平に人質を出せよ、と下知せらる。貞能如何にもすべき謀なくて、庶子千丸十三歳になりけるを、黑屋甚九郎を添へて出しけり。東照宮を不意に襲ひ打つをべき謀を、

家臣を以て告げ奉る。武田にも是れ怪しみ、土屋右衛門直村黑瀨にありけるが、使を以て貞能を呼び寄せ、勝頼の撿使城所道壽も出向ひ、二心ある由聞ゆる處に、疾くも來られけるよ、神妙にこそと詞をかくる。貞能かゝる時には、父子の間も疑ひ思ふ事世の習ひなり。然れども愛子にて候ふ千丸を、人質に出し候へば、何の子細のあるべきやと、驚く色なければ、いざ碁を打たんと云ふ。貞能心靜かに碁を打ち終り、暇乞ひして門外に出るを。道壽又呼び戻し、湯漬飯を出す。貞能これを食する隙に、道壽士を門外に出し、待ち居たる貞能が士に向ひて、主人叛逆露はれ、唯今討たれし由を云はせけれども、奥平六兵衛打ち笑ひて、更に驚く色なし。これは、貞能素より武田方にて、如何なる事をいふとも、吾が首を見ざる中は、驚く事なかれと、固く云ひ含めし故なりけり。斯く謀りすまして、貞能馳せ歸り、其夜一族打ち具して退散し、岩崎に赴きければ、松平主殿助伊忠、本多豐後守廣孝等、東照宮の仰せを奉り、出で迎ひて瀧山に引き取りけり。

◎東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事

天正二年四月、東照宮天野宮内左衛門景貫が、大井の城を攻めさせ給ふ時、霜雨にて兵粮運送の便よからず、三倉の砦に引きとらせ給ふ處を、天野討つて出でつけしたふ。高山光明の城々よりも出會ひ、田重大窪の郷民も相加はり、此處彼處より鐵砲を打ちかけ、聲をあげて

攻め懸かる。後殿の人々、數多討たれしを知し召さず。東照宮三倉にて聞し召し、引き返させ給へば、早や敵引き取りたり。玉井善太郎後殿しけるが、股を鐵砲にて打たせ、御後を慕ひて、三倉に參りければ、手負ひたるか、後に鐵砲の音せしを、怪しく思ひしに、軍ありけるよ、此馬に乘れと仰せられ、御馬より下りさせ給ひけり。人々君の士を勞らせ給ふに感せざる者なし。大久保七郎右衞門忠世が同心杉浦久藏、「一說惣左衞門久勝に作る」深手負たりしに、七郎右衞門馬より飛び下り、是れに乘りて引き退けといふ。久藏うつけたる馬を下り所かな。我が如き者に、如何ばかり討たれたり共、何事かあらん。大將たる人の馬離れする物かな八幡も照覽あれ乘るまじいと云へば。七郎右衞門禮儀も所によるぞ。疾く〳〵と云へば、久藏我れ此馬に乘りて生き、大將を捨て殺しては如何せんとて乘らざれば、七郎右衞門いなゝらば、馬を棄つるよと云ひ捨てゝ、引かんとする處に、小玉甚内「一說石上兎角」馳せ來り、七郎右衞門は早退きたるぞと云ひて、久藏を引き立て馬に打ち乘せ、やがて七郎右衞門に走り附きたり。七郎右衞門には兵藤彌惣と犬わかといふ小者と、三人打ち連れて、細道の崖を引き退きし處に跡より退き來る者、七郎衞門を突き落す。二人も續いて飛びける所に犬わか揚羽の蝶の指物を持ちたるを投げ棄てたるを、敵見て、これを取らんとする所を、彌惣走りかゝり、拐り取らんとすれば、敵彌惣を一刀切りたりけるに、七郎衞門とつて返して、敵三人討ち取つたり。東照宮剛將の下に弱兵なしと忠世を御賞美ありけり。

◉渡邊守綱を槍半藏といふ事

東照宮と武田の兵と、大天龍にての戰に、近藤傳次郎手負ひて、渡邊半藏守綱を見懸け、手負ひたるぞ、連れて退けよと云ふ。心得たりとて、手に提げたる首を投げ捨てゝ、傳次郎を肩に掛け、三里餘り引き退きて援けゝれば、東照宮聞し召し、味方一騎討たるれば、敵千騎の强みといふ事あり。味方を援けたるは、七度の槍を合せたるよりも緩れり。今より後、槍半藏と云ふべしと仰せあり。後に半藏、人に語りて曰く、傳次郎を我れなればこそ援けたれ。何として退け逐すべき。かゝる時は、大方援くる體に持て做し、刺し殺して棄てらるべし。味方なればとて、賴みにはならぬものよと云ひしなり。

又一說、永祿五年九月、參河の八幡にて、今川氏眞と三河の軍、戰ありて利あらず、二手に分かれて引き退く。敵急に追つ懸くる。半藏守綱石川新九郎返し合せ、三度槍を合す。後には半藏一人、十度に及びて小返しして又三度槍を合す。矢田作十郎足を痛み引き兼ねたるを、半藏肩に引き懸けて退きけり。これより槍半藏と人に云はれしと云へり。半藏弟を半十郎政綱といふ。後新五左衞門といふ。味方原の軍に、草鞋の緒の解けたるを、下に居て結びけるを、半藏急げども、心靜かに結びて引き取れり。兄の半藏、聞ゆる剛の者なるが、半十郎が如き强情者は、遂に見ずと、常に語りけるとぞ。

◉謙信單騎佐野城に入られし事

天正二年、北條氏政三萬の兵をもて、佐野政綱を圍まるゝと聞きて、謙信八千ばかりの兵を率ゐ、後詰めせられけり。城危しと聞えければ、謙信後卷は我れに劣らぬ士大將數多あれば心安し。佐野の城こそ覺束なけれ。先づ我れは城に駈け入りて、力を添へなんとて、物の具も着ず、黑き木綿の胴服を打ち破り、十文字の槍を横たへ、僅に十三騎引き具し、氏政の陣の前を、馬を靜に歩ませ、佐野の城に入りたるを、氏政の軍兵見て、夜叉羅刹とは是れなるべしとて、恐れて近附く者もなし。氏政圍を聲いて引き退くを、謙信やがて門を開かせ給へども、氏政一軍もせで引き退きける。

◉大河内政房節義の事

天正二年、勝頼高天神の城を圍まんと師を出す。小笠原與八郎長忠、軍の目付大河内源三郎政房と相議して防ぎけり。東照宮後詰を信長に乞はせ給ふ。勝頼城の巽の嶺に陣し、大文字の旗を、中村の内公文といふ所に立つる。後まで其地を大旗と稱す。兵粮竭き士卒疲るれば、後卷を待ち兼ね、姉川の戰功を捨てさせ給ふと怒りて、七月二日城を出て降參す。軍の目付大河内政房は、應政公の妾、華陽院の甥なり。勝頼に降らざりしかば、小笠原生捕りて、石

の牢に入れ置きたり。勝頼降らば、本領に倍して、宛て行ふべしと說かせけれど、志を變ぜず。勝頼怒つて牢の口を鎖す。政房今年より高天神落城に及ぶまで、八年の間獄中にあり、甲斐の士横田甚五郎、高天神に來て在番せしが大河内が節義を深く感し、殊に懇に勞りたり。かくて東照宮、高天神を攻めさせ給ひて、天正九年三月二十二日の夜城の守將岡部丹後眞幸、横田甚五郎尹松、相木市兵衛昌朝已下切つて出で、岡部は討死し、横田相木は切り拔出て、甲府に落ち行きけり。城落ちければ、石川伯耆守數正城に入りて、政房を搜し出す。獄中に年久しくありて、足痿えければ、莚に乘せて、東照宮の御前に出す。參年石の牢に有りし艱厄云ふべからずとて、御涙を流され、御手づから、刀脇差黃金を與へらるゝに、政房生捕られし事を、口惜しく思へる色現はれしかば、人々敵の俘虜となる事は、小笠原が不義にして、武田に降參せし故なれば、何方に遁れ出づべきや。志は比類あるまじき事なれば、生捕りとなりぬる事、なか〳〵譽となりたりと、口々に云ひけるが、猶も其心に憤りけん。剃髮して肖空と稱せしが、仰せによりて、尾張の津島の湯に浴し、足の痿も癒えければ、遠州稗原の地を賜りしが、長久手の戰に討死しけるとぞ。

◉酒井忠次鵶巢城を乘取られし事

勝頼長篠の城を、圍み攻むる事甚だ激しかりしに、信長東照宮と共に後卷あり。軍評定の時、

酒井忠次進み出で、今夜脇道より、長篠の附城鴨巣へ押し寄せ、攻め破らば、勝頼必ず敗北すべし、と申しもあへぬに、信長嘲笑ひ、汝は三河遠江の小競合には慣れつれど、大軍の計策は知らざりけり。と嘲られしかば、忠次云ふべき詞なくて、出でける處に、信長東照宮にさゝやき申されけるは、左衛門尉が申す處尤も然るべし、又呼び出されよとて、酒井が側近く居寄り、誠に由々しくも計りたる哉。されども、外に泄れ聞えんかと思ひて、わざと僞りて誹りたりき。疾く馳せ向つて、鴨巣を攻め破り候へ、といはれしかば、忠次承りて、出でんとする時、又引き留め、同じくは信長が向ひたき所なり。あたら武功を汝に讓りき、と申されける。忠次大に勇みて、夜半ばかりに思ひも寄らぬ所に押し寄せて、武田兵庫頭信實、三枝勘解由、和田兵部を初めとして、數多討ち取り、火をかけたる煙を、武田軍兵顧みて、大に勇抽けて、終に敗北の原因となりけるとなり。此夜討に、天野惣次郎は指物を挿さず戸田半平は道遠し、夜明くる事もあらんとて、指物を持たせけるが、城を燒きたる火の光、白日の如く、天野戸田先を爭ひけるに、戸田が銀の髑髏の指物輝き渡りて、人の目を驚かしけり。信長後に、酒井が功を賞して、汝は前に眼あるのみにもあらず、後にも眼ありと、云はれしかば、忠次忝き由申して、さて、終に後を見たる事はなく候ふ、と申しければ、信長笑ひて、前後の計、違はざる事を賞せんとて、云ひ過ぎたりと云はれければ、忠次此時、仰せの旨面目ありとて退出したりけり。

◉長篠合戰の事

長篠にて、信長の先陣と旗本との間に、堀切を構へ、柵の木結びて、欺きて敗北すれば、武田の猛兵、敵は逃ぐると云ふて追ひ來り、柵の木に行き滯みたる處を、數千の鐵砲、雨の降るが如く打ち掛くれば、空矢なく中りて、討たるゝ者數を知らず。引き退かんとすれば、柵より出でゝ付け窺ふ。戰を挑めば、柵の中に入りて打ち白ます。勝頼の士大將、勇氣餘りありといへども、打ち破るべき樣なく、皆的になりて討死しけり。

◉内藤四郎左衛門返答の事

同じ時、德川家の先陣を下知せよとて、信長の使來る。内藤四郎左衛門、我れ等が主君は、先陣の下知を、他人に受くる者には候はず。内藤承はりて、返答仕りたりと申されよ、と荒らゝかに云ひて追つ返す。信長聞いて、德川家よき士數を知らずと云はれけり。

内藤を鳥井に作れるあり。然れども、鳥井は三形ヶ原にて討死したれば、内藤の事なるべし。

◉多田久藏が事

同じ軍に、甲斐の士一人生捕りて、信長の前に引き來る、裸に緋緞子の下帶をしたり。信長名を問はるゝに、美濃の者多田久藏と名乘る。信長手を拍ちて汝は伯父の葬禮の時、火車を斬りたりと聞けり。美濃尾張は、我れに親しみある國なり。我れに奉公せうとや思ふ。縛りたる繩を免せ。惡源太も搦められたり。弓箭とる躬の恥ならず、と云はれしかば、長谷川藤五郎傍に引き退け、繩を解けば、多田側なる槍を奪ひ取り、四五人突き伏する。長谷川其處にて首を切りて、信長に出し、しか〳〵なりと云へば、信長深く惜しまれけり。

一說、赤地の唐織の錦の下帶したる士を、生捕り來る。唯者にあらじ、名乘れといへども、名乘らず。さらば雜人の手にかけて殺さん。士ならば、腹切らせんと云ひしかば、多田淡路が子なりといふ。信長聞きて、淡路に久藏新藏とて、二人の子ありと聞く。孰れぞと問はるゝに、新藏なりと申す。勇士なり、援けてこそとありければ、生捕りとなりたる耻辱、疾く首を刎ねらるべしと乞ひたり。信長の前にて繩を解きしに、門外に立て懸けたる槍を取り、周圍の者を突き殺すによりて、遂に新藏を切り殺しけり。

◉佐久間信盛僞りて勝頼に降る事

長篠合戰の前、信長謀を廻らし、佐久間信盛より、潛かに長坂釣閑が許に使を遣し、日比信長に恨むる子細あり。願はくば、勝頼軍をすゝめ、戰あらんには、其時信盛裏切りして、

信長の旗本へ俄に切りかゝるべき旨を、いひ送りしかば、釣閑悅んで、これを謀るとは知らず。勝頼に一戰を勸めける故馬場美濃守信勝を始めとして、侍大將の軍評定していひける事共を、勝頼悉く用ひずして、楯なしを誓つて進んで軍すべきと決斷せられしかば、其後は、諸大將諫むる事を得ざりけるとなり。

◉二股城攻め內藤櫻井功名の事

天正三年六月、東照宮二股の城を攻め給ふ。城主は依田下野田幸成なり。其子右衛門大夫幸致城を出てゝ、鳥羽山の下なる小川を隔てゝ、防ぎ戰ふ。內藤彌次右衛門家長强弓の手利にて、散々に射白ます。松平彌右衛門忠長が子彥九郎、敵に朱のてうちんの指物あるを見て、味方にも此指物ありければ、誤りて敵の中へ紛れ入りしを、朝比奈彌兵衛一箭にて射伏せたり。內藤は彥九郎と緣者の親みあれば、引き返して彌兵衛を射る、其箭彌兵衛が乘りたる馬の鞍の前輪より、後輪をかけて射貫く、彌兵衛が弟彌藏馳せ來りて、兄が屍をひき退けんとするを、二の矢にて是れも射倒したり。城兵二人の屍を引き退けんとするを、本多忠勝等進みかゝりて追つ立てたり。城兵引き退く中に、一人手負ひて、退き兼ねたる者ありけるを、一人とつて返し、是れを援け、門內に引き入れけるを、櫻井莊之介勝次、敵の首を一つ取りたりしが、又進んで追つ駈け行く。東照宮御覽せられ、茜の四半の指物は、櫻井なるべし。

深入りするよと仰せられけり。其時敵の手負を助くる者、漸う一の木戸、揚錠門の中に入りて手負ひたる者は、未だ半見ゆる處に、勝次走り附き、手負ひたる者の足を取りて、三間ばかり引き出し、遂に其首を取る。其時門内より、勝次が指物を打折りけるが、屍に掛かり留りしを知らずして、五六間ばかり引き取る時、從者斯くと云へば、又取つて返し指物を取り得て、鳥羽山に歸り、首を奉る。東照宮唯今の勇氣いかめしさ、誠に無双と覺ゆるなり。然れども、是れより後は、努々今日の如く、深働きすべからずとて、遠州にて祿を增し賜りけり。彼の從者も度々働きありて後、士となし、内田彦右衞門と云ひけり。

◉蘆田信蕃二股城を退く事

勝頼、長篠敗北の後、蘆田常陸介信蕃二股の城を守る。三河の軍、五月下旬より此れを攻む。南方の山に、東照宮御陣を据ゑられ、巽の方鳥羽山、東は安倉口の山、北は三十原口の山、西は和田島に向ひ城を構へらる。信蕃固く守りて、十一月に至りて。城を渡し甲州に引き入るべしと。勝頼より再三下知せらるれども聞き入れず。勝頼自筆の書をもて、下知せられしかば、十二月下旬に人質を出し、二十三日に城を渡さんと約せしが、雨降りければ、簑笠にて見苦しく候ふとて、翌二十六日、天晴れて後城を渡し、二股の川の邊にて、人質を取り換へ引き取れり。信蕃小勢にて久しく守り、且城を渡す作法正しかりけるを、御感ありて後終

に德川家に仕へけり。

◉信長公秋山伯耆を刑し給ふ事

天五三年、信長美濃岩村の城を攻めて、秋山伯耆晴近を生捕り、生きながら逆磔といふ物にせられけり。此れは信長の姑、遠山内藏助が妻にて、遠山は其前岩村にありけるを、秋山遠山の七家と稱せし人々と、和平して謀り、元龜二年信長の加勢の士、三十五騎を殺害し、城を奪ひ取りて、内藏助が後室を己が妻としけり。遠山は是れより前に病死し、其嗣信長の男、御坊丸を甲州へ送りやり、岩村を居城とせしかば、信長怒り憎まるゝ事深くて、斯くはせられしなり。秋山口惜しくも計られけるかな。我れは、信長と緣類の親みあり。斯くせらるゝ事、無念なりとて齒を嚙み、信長の末を見よと罵りて、七八日ばかりありて死しけり。信長信州法華寺にて、兵粮をつかはれける時、いろ〳〵の小袖を着たる女房一人來り、懷より、錦の袋に入れたる茶入を取り出し、是れを信長に見せ賜り候へ。見知りておはしまさんと云ふ。信長走り出て、茶入をば石に當て、打ち碎き、刀を抽いて、彼の女房を切り殺されけり。此れ秋山が妻にて、信長のをばなり。

◉松平忠次諏訪原城を守らるゝ事

天正三年八月、東照宮諏訪原の城を攻めさせ給ふ。此城は、甲州馬場美濃守氏勝が城制の法にて築きたりし名高き城なりといへども、城兵力弱りて、二十四日の夜城を棄てゝ、小山の城に逃げ落ちける。東照宮、此地は高天神に往來の要路、駿州田中持船の敵と、大井川一筋を隔てたり。勝頼必ず隙を伺ふべし。誰か此にありて、城を守り敵を防ぐべきと仰せありけるに、松平左近忠次進み出で、身不肖に候へども、此城を守り申すべしと申しける、御感ありて、松平の姓を賜り、御諱の字を下され、松平周防守康親と申せしは、此時よりの事なり。勝頼が暴惡。殷の紂王に似たり。これより攻め入りて打ち滅すべきとて、諏訪の原のばを、牧野の城と改められしとりな。

◉山内治太夫進士三清郎功を讓る事

諏訪の原の城を、甲州より攻め來りて合戰あり。松平康重「康親の子」の士山内治大夫、進士清三郎、山崎惣左衛門、三人後殿しるに、山内は精兵の手利にて、射拂ひて引き退く時、矢だね盡きたり。山縣源四郎猶追つかくる時、進士清三郎矢一筋を山内に投げ遣りしかば、山内踏み止りて射けるに、志村金右衛門が胸板を射徹し、後の松の木に射附けたり。それより物別れすゝ山縣此矢を康重に送り返して、强弓精兵無雙なりとぞ賞めたりける。康重、其矢に進士が姓名の彫付けたりしを見て、賞する處に、是れは山内が射申したるにて候ふと申す。復山内を呼び出して、云々なりやと聞かるゝに、清三郎が射たるにて候ふと讓りけり。康重兩人に感狀を與へたり。世の人、兩人を今の孟子反と云ひ合へり。

◉信長公松永彈正を恥ぢしめ給ひし事

東照宮信長に御對面の時、松永彈正久秀傍にあり。信長この老翁は世人の爲し難き事三つなしたる者なり。將軍を弑し奉り、又己が主君の三好を殺し、南都の大殿を焚きたる松永と申す者なりと、申されしに松永汗を流して赤面せり。

東照宮後長臣たちを召して御物語ありける時、此事を仰せ出され、先年信長、金崎邊を退きし時、所々に一揆起り、危かりしに、朽木が淺井と一味を疑ひ、進退極まりしに、松永信長に告げて、朽木が方へ參りて味方に引き付け候ふべし。朽木同心せば、人質を取りて、打ち具し御迎ひに參るべし。者し又歸り參らずば、事ならずして、朽木と刺しちがへて死したり、と知し召されよと云ひて、朽木が館に赴き、事なく人質を出させ、それより信長朽木谷にかゝりて、引返されしなりと、仰せられしとぞ。

◉山口六郎四郎奥田三河守高屋の城を落つる事

松永が士大將山口六郎四郎、奥田三河守、高屋の城を守りけるを、信長攻めらるゝに、城中

力盡きて、一方を駈け破り、落ちんとせしに、山口風雨の夜鐵砲をあつめ、東の門の寄手へ向けて、散々に打たせければ、すはや打て出ると騒ぎける。其隙に西の門を開き、一同に駈け出で擊ち破りて落ち行きたりけり。

◉東照宮勝頼と大井川にて御對陣の事

天正七年九月、東照宮、勝頼と大井川のいろうにて、川を隔てゝ、對陣しおはします。時に大木川上にて川に轉び落ちける。其音波に響きて、ことゞくしく聞えしかば、すはや勝頼夜討に寄すると、騒ぎ立ちて止らず。牧野半右衛門に、先陣を鎮めよと仰せられしかば、牧野馳せ行きて、何事に騒ぎ候ふや。御旗本も騒ぎ候ふぞ。疾く鎮まり候へ、と呼はりければ、愈亂れ立ちけり。かゝる處に、大久保七郎右衛門忠世馳せ來り、勝頼押し寄すべしとて、御旗本の物の具固め、城を待ちかけたるに、何とて先陣の人々、斯くまで驚き狼狽へ候ふ哉、後日に鎮り笑はるべし。疾く鎮まり候へ、と罵りければ、是れに耻ぢしめられて程なく騒ぎも鎮まりけり。

一説、持船の城を攻め落させ給ひ、保ち難しとて、焚き棄てらる。此時勝頼沼津の城普請築地の上にて、此烟を見られしが、北條家の軍を後にして、九月二十日東照宮の御陣に打ち向ひ、富士川を打ち渡す。東照宮客戰は危しとや、御思慮ありけん。兵を返して、

大井川の伊呂を渡らせ給ふべきに定めさせ給しに、俄に總軍騒ぎ立ちて鎮まらず。牧野半右衛門制し止むれども、愈騒ぎしに、七郎右衛門忠世御旗本に大提灯を高く差し揚げさせ、士を附け置きて、我が歸るまで動くべからずと云ひ含め、先陣に行きて、御旗本は二の身を討たんとて鎮まりたり。其證は、あの火の動かぬを見よ、と云ひければ、是れによりて鎮まりければ、やがて乘り歸り、先陣はよく鎮まりて、敵を待つ體なり。以後先陣の人々に笑はるべし、と云ひければ、これも亦鎮まりけると云へり。

◉栗田刑部幸若が舞所望の事
附時田が首實檢の事

東照宮、高天神の城を圍ませ給ひ、柵を付けて固く守らせらる。城中後詰を乞へども、勝頼出でず、粮盡きけり。栗田刑部使を以て、幸若が舞を一曲所望し、是れを今生の思ひ出にせんと、申しけるを、東照宮聞し召し、優しくも云ひけるよとて、幸若に高館を舞はせらる。栗田が最愛の小姓、時田鶴千世と云ひし者に絹紙樣の物を持たせ出して、幸若に贈り與ふ。其後落城の時、時田討死しけるを、城を取りたれども、女の首なるべしと、人々疑へり。東照宮聞し召され眼を開き見よ。女ならば白眼なるべし、と仰せありければ、開いて見るに黑眼あり。又幸若忠四郎も、高館を舞ひける時、見しりたりければ、時田が首に定まりけり。

◉岡田竹右衛門見切の事

天正八年七月、東照宮田中の城を攻めさせ給ひ、八幡山に御陣ありて、苅田働きあり。勝頼後巻せんとて、甲州を打ち出づる。松平康親が士岡田竹右衛門元次、此頃夕立洪水あるべき時なり。大井川は、一夜に水出て渉り難し、勝頼血氣の勇將にて候へば、若し俄に押し出せ候ふ事あらん。苅田終らば疾く川を渉りて、兵を返され然るべしと申す。東照宮尤もなりとて、川を渉り、兵をゝさめ給ふ。果して其夜、大雨激しく大井川水出でたり。

◉朝日千介西郷伊豫を討つ事

田中の城を攻めらるゝ時、西郷伊豫といふ剛の者、足輕を引き具し、度々打つて出で、寄手を破りければ、東照宮誰れかある。西郷を討つべき者は、と仰せありけれども、答へ奉る人なし。其夜菅沼大膳が陣に、人々集まりて、此事を云ひ出したるに、菅沼が小姓朝日千介「後には丹後と申す」十八歳なりしが進み出で、討ち取るべしといふ。菅沼聞いて、汝寢言を云ふやと云ひしに、必定討ち取り申さんと云へば、さばかりの古兵も、軍し兼ねつる西郷なり、容易く討たん事思ひも寄らず。其處立ち去れと罵りければ、傍よりいやとよ。千介が面魂並々ならず。末頼母しき若者なりと、云ひ宥めけり。千介明日を待たれよ。西郷が出提げて參らん物を、と獨言して退きけり。かくて夜更けて菅沼が愛せし鐵砲を取り出し、曉陣屋を密に出で、岡部と藤枚の間なる竹林に隱れて居たり。夜あけて西郷馬に乘り、足輕引き具して來る。東照宮は、岡部の傍の小山に陣しておはせしが、敵又出でたると仰せありける處に、千介鐵砲を矯め据ゑ、西郷を馬より打ち落し、走り出て首を取り、駈け歸りて斯くと申す。東照宮、あはれ剛の者よ、と賞めさせ給へば、是より千介が名、高く聞えけり。

◉岡崎三郎君の御事

岡崎三郎君、天正七年二股の城にて、自殺おはしましける事は、信長より叛逆の志ありて、勝頼に内通し、二股の城へ甲斐の兵を引き入るべきとの三郎謀あり。此事は酒井左衛門尉よく存じたり、と告げ申されしより事起りて、つひに死を賜りぬ。

忠次を信長召し寄せて、三郎君の北の方より、告げ申されし十二條の惡事を擧げて、忠次に問はれしに、忠次是れより前、三郎君の侍女おふうと云ひし美人を、密に己れが妾とせし事によりて、三郎君憤深かりければ、陳謝の事に及ばずといへり。

又一說に、佐久間右衛門尉信盛三河に參りけるに、東照宮御馳走ありけるが、三郎君を召され、御對面ありしに、佐久間黄なる帽子を被り居たるを、三郎君引き奪ひて投げ棄て、無禮なりと怒らせ給ふ。東照宮驚き思召しけるに、三郎君、我れは信長の婿にてこ

そあれと、仰せられしかば、佐久間無禮を謝し申せしが、是れも信長に讒言せし故とも云へり。三郎君は勇氣逞しく、極めて物荒くおはして、軍に臨みて氣色變り、髮毛も逆に立つべく見えしを、東照宮御覽じて、摩利志天の像に似たりと仰せありしとぞ。

平岩七之助親吉は、三郎君の傅なりしかば、臣が諫め申さゞる罪を以て、刑に行はれ、首を信長に送り、三郎君をば獄に押し籠め置いて、時を御待ちあれと申しけるを、東照宮汝が忠心は、誠にいふべき詞もあらざれども、能く察せよ。武勇我れに優れりと思ふ子を殺すは、忍びざるの至りなり。汝が首を信長に送るとも、既に吾が家の長臣酒井が、信長に飽くまで惡しく云ひつると覺えたれば、なか〳〵聞き入れられじ。汝を殺さば、恥の上の恥、損の上の損とは是れなるべし、と仰せられけるとぞ。其後年經て、忠次目を煩ひて、久しく引き籠りたりしが、御前に出で、年老ひ候ひぬ子を不便にせさせ給くと申しけるを聞召し、信康生きて有るならば、かばかり心を勞すまじきよ、汝も子の不便なる事を知りたるが怪しき、と仰せられしかば、言葉なくて退出したるとなり。又ある時。幸若大夫が滿仲を舞ひたりしを、御聞きありて、滿仲の舞は大久保は得見まじ、と寄せられしかば、忠世も引き籠りけり。これは三郎君を忠世に御預けありしに、定めて引具し參らせて、片陰の山林に、身をひそめなんと思し召しけるに、さはなかりける故、三郎君の御事を、悔ませ給ふをり〳〵、御詞には出でざれども、事に觸れ數年の後も、愁傷の色現はれさせ給ひけるとぞ。

◉攝津國花隈城落つる事

攝州花隈の城は、荒木攝津守村重が一族、荒木志摩守元清籠れり。天正八年、信長の命にて付城を構へ、花隈の北諏訪が嶺には護國公、西の方金剛寺山には士大將伊木清兵衛忠次、森寺清右衛門忠勝、南の方生田の森には、護國公の嫡子勝九郎之助守り給ひぬ。いづれも花隈より、六七町ばかりを隔てたり。三月二日、城より兵を出す。勝九郎二十二歳にて、組討の功名あり。國清公「此時古新と申す後に三左衛門尉輝政公」十六歳にておはせしが、是れも組討にて首を取り給ふ。護國公敵五六人自ら討ち取り、伊木清兵衛、秋田嘉兵衛、堀與左衛門、芳賀五郎右衛門、石黑武左衛門、佐橋武右衛門、後藤市兵衛、波多野彌藏等、烈しく戰ひて追つ崩す。ある夜護國公、森寺政右衛門を呼んで、城中へ忍び入り、よく見來れ、と命ぜらる。森寺行く時、梶浦勘兵衛も打ち連れんとす。森寺今夜の物見は大事なり。相俱はん事叶ふべからずと云ふ。梶浦聞いて思ひ立つたる事、空しく歸るべきや。自害するより外なし、と中々歸るべき體にあらざれば、打ち連れたり。陣と城との間に小さき坂あり。城中より武者二人槍を提げ來るに出會ひ、二人とも討ちとり首をば草の中に匿し、搦手の水道より忍び入り、又水道より出で、匿し置きたる首を持ち歸り、實檢に入れ城中の有樣を申せば、護國公早や城は攻め取りたる心地するよ。如何にしてかは此功を賞すべき。但し梶浦は後で

行きたるや、と問はるゝに、梶浦承りて、政右衛門に仰せられしを、物蔭にて聞き候ふと申す。護國公近習の人を退けて云ひつる事を立ち聞きし、且つ軍法を破りたり、と怒り給ふ。其時森寺、只今忝き仰せを承り候ひき。さして賞美の望み候はず。勘兵衛が咎を免させ給ひ候へかし、と申せば、護國公さて止みなんとぞ仰せける。かくて七月二日に及びて、生田の森の南へ、馬の草苅りに雑人出でけるを、城中より兵を伏せ置きて迫つ散らしけるを、生田の森の付城より是れを見て、藤九郎馬上に槍を横たへ、續け者共、とて馳せ向ふ。梶浦兵七、河三崎忠郎、大陽寺左平次、臼田喜平次、日置清十郎など迫ひ續き、聲をあげて切りかゝる。竹村喜左衛門、乾平右衛門、長谷川新次郎槍脇を射る。淵本彌兵衛は、四寸角の柱の一丈餘りなるを打ち振りて、敵を叩き伏せ相戰ふ。金剛寺山の伊木森寺も、大手の軍烈しきを見て、搦手より乗り取らんと押し寄する。城より野口與一兵衛といへる者、半町計り打つて出で防ぎけるが、野口も討死すれば、城際へ押し詰むる。大手の戰に、寄手多く討たれ危かりければ、引き返さんと護國公、梶浦に詞を懸けらるれば、勘兵衛唯今あげんとせば、彌々亂れ脚になるべし、先程は、鐵砲の數少く覺えつるに、俄に增したるは、搦手より大手へ救ひ來りぬらん。政右衛門早搦手へ押し詰め、乗り込み申すべし。然るに、只今大手の味方を引き取らば、敵搦手へ廻りて、政右衛門討死すべしと申す。護國公尤もなり、疾く行きて見來れ、と仰せられしかば、勘兵衛馳せつけて、云々の事なりといふ。政右衛門能くこそ云

ひたれ。早乗り入るべし。大手を攻められ候へと云へと云ふ。勘兵衛此塲を見捨てゝ歸らんは、口惜しけれども、使の仰せ重ければとて、馳り歸り、斯くと申せば、護國公無二無三に乗り破れ、と下知せらる。勘兵衛は城兵の必ず突て出づべき門脇に詰め寄せたり。搦手よりも、伊木森寺先を爭ひ門を破りて攻め寄りたり。森寺は今年の春、案内は能く見たりし故、門を破る透間に、傍の屏を踰え、敵槍にて突きけれども、飛び込みて其まゝ討ち取りたり。梶浦が察せし如く、搦手は防ぐ兵少かりければ、攻め入りて火をかけたり城兵も、大手の門を押し開き切つて出る。勘兵衛待ち請けて、槍を合す。城兵爰を切り拔けんと、死狂になりて戰ひけるに、寄手搦手より攻め入りたるが、敵の後へ切つてかゝりしかば、城兵濱邊をさして敗北せり。兵庫の築島に雑賀孫一郎、花隈の加勢としてありけるを、伊木森寺先陣にて押し寄せ攻め落す。此時湊川にて、勝九郎五輪作右衛門といふ剛の者と槍を合す。森寺政右衛門も仰せ付けたれば、作右衛門引つ返して退きけるが、五輪の指物を、是れは隱れなき指物なり。兩人へ進らすよと云ひて川へ飛び込みて逃れ得たり。黑き四半に白き五輪の形を染めたるなりしとなり。信長より、勝九郎國清公に馬を進らせらる。護國公今度の軍、我が目前にて、各々功名したるなれば、明かに見屆けぬ。中に就きて、梶浦が決斷、槍を合せたるよりも、忙はしき塲に能くこそ察したりとて、返す〳〵賞美ありけるとぞ。

◉高天神落城仁科信盛戰死の事

天正十年、勝頼の弟仁科五郎信盛、高遠の城を守る。織田信忠僧を使として勝頼の滅びん事近きにありとて、城を出でらるべし、と云ひ送りたりければ、信盛怒つて返答もせで、僧の耳鼻を削いで追ひ返す。信忠さらば攻めよとて押し寄せて嚴しう攻むるに、城兵殘り少なく討たれ、信盛、小山田備中、渡邊金太夫照、春日河内守、原隼人、今福安左衛門、諏訪莊右門已下十八人、十二間に七間の廣間に籠り、火を散らして戰ふ。信忠淺黃金蘭の母衣懸けて屏に上り梧桐の枚に取り付き、下知せらるゝを目にかけ、七八度打つてかゝる。此時三十五六歳ばかりの、女房の緋威しの物の具着、眉尖刀を提げ、諏訪莊右衛門が妻なりと名乘り、七八人薙ぎ伏せて自害しけり。信盛を始めとして、死狂に切つて廻れば、攻めあぐみたる時、森武藏守長可屋根の板引き破らせ、鐵砲を打ち込みたりければ、信盛床の上にあがり、腹切つて腸を掴んで、唐紙に擲うち倒れ死す。其血痕後までありといへり。小山田已下も自害したり。信盛此時十九歳なり。忠信の取り付かれし梧桐に、槍刀の痕ありしと付きて。大廣間の天井も、柱も、槍太刀の痕ありて、血に染まらぬ所なし。庭に殘れる雪に血かゝりて、紫となれりとぞ。

◉勝頼の首穿鑿の事

勝頼天目山に落ち行く時、瀧川一益攻め入りて、落人ども討ち取り、勝頼の首を取りたれども、誰れといふ事を知らず。小溝の中に棄てけるに、百姓ばら溝の前にて、必ず平伏し禮をして打ち通る。如何なる故ぞと問へば、あの溝の中に、屋形の御首のおはしまし候ふと云ふ。さらばとて首ごも取り出す。信忠勝頼の首を分ち置き、先づ瀧川義太夫を呼びて汝が取りたる首は、いづれぞと問はるゝに、是れなりとて出す。此は土屋總藏昌惟が首なり。伊東伊右衛門といふ者進み出で、勝頼の首を見て、此れこそ伊右衛門が取りたると申す。證は如何にと問はるゝに、斬口に乘つたる馬の栗毛糟毛の血に混りて付きて候天目山の麓、田野より鞍の四方出に付けし故なりと申す。果して詞に違はず。よりて伊東が取りたるに定まりぬ。信長勝頼の首を見て、いかに汝が父、非義不道なりし故、天の譴遁れ難く、今斯くなりぬ。信玄一度京に赴かんと志しけると聞く。汝が首を京に送り、女童に見知られよと罷り、首を東照宮の御許に送られけり。東照宮御將机におはしませしが、勝頼の首と聞し召し、將机を下りさせ給ひ、偏に若きゆゑ、思慮なく斯くならせ候ふと禮義正しく仰せあり。是を傳へ聞く甲斐信濃の土ども、德川家に心を寄せ奉るもとゝなれり。

又一說に、勝頼の首を、瀧川が士瀧川莊左衛門といふ使番に持たせて　信長に見せ申せば、さま〳〵に罵りて、杖にて二つ突きて、後足にて蹴られけり。莊左衛門是れを見て、かゝる事こそなけれ。織田家の運命早や盡き果てなんと云ひけるを、蜂須賀阿波守至鎮

の長臣、稲田修理が弟丹波瀧川が方に、信長より置かれたるが聞きけるが、果して程なく信長弑せられしかば、惣左衛門心ある者よとて、蜂須賀の家より搜し求めけるに、瀧川の家滅びて、後匿れ居たるを、召し出して仕へけるとなり。

◉秀吉勝頼の滅亡を惜まれし事

信長甲州に攻め入られし比、秀吉は筑前守とて、西國毛利家に向ひて、甲州の軍に從はず。勝頼死して甲州平均なりと云ふを聞き、秀吉大息吐いて、あたら人を殺したる事の殘り多さよ。我が軍中にあるならば、強ひて諫め申して、勝頼に甲信二州を與へて、關東の先陣としたらんに、東國に平押にすべきにと繰り返し悔まれけり。

◉信玄の館の跡を信長公見給ひし事

勝頼亡びて後、信長信玄の館を見んとて、馬を乘り入れんとせられしに、馬進まざりしかば引き返されけり。東照宮は程經て、甲州を治めさせ給ふ時、信玄の館の跡御覽の時、館の門外にて御馬より下りさせ給ひしとぞ。

◉勝頼天目山にて最後の事

勝頼滅亡、天目山にての事共、甲陽軍鑑には切死に沒せられし由載せたり。甲州の土民の云ひ傳ふるとは異なり、鶴瀬も勝頼に背きしかば、天目山をさして落ち行かれしに、一揆所々より起りてければ、百姓の家に從ひし婦人共をいれ、旁の人家に茅のありけるを運ばせて、出入る口を塞がせ、火をかけられけり。小高き所に上りて、武田の家代々持ち傳へられし楯無と云へる物の具を信勝に着せしめらる。土屋總蔵肩入の役をしけり。さて勝頼薙刀を擴たへ、寄り來る一揆に向はれしを、總蔵屋形は新羅三郎より、二十八代弓箭の家を繼せ給ひ、今はの際に及ばせ給ふとも、一揆ばらに御首を渡し申さん事、口惜しく候ふと諫めければ、尤もなりとて物の具脱ぎ、總蔵に介錯せさせ終られしとぞ。相從へる人々、皆互に刺し違へて、勝頼の供しけり。總蔵と僧の麟岳と殘り留れるが、皆事よく終りしを見屆けて後、總蔵自害しければ、麟岳刀を口にくはへ、貫かれて死しけるとなり。されば後甲陽軍鑑天目山の事は、もとより彈正の筆記にあらず。後の人誤り傳へて書きたるなるべし。

◉禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事

勝頼父子の屍、田野にあれども、信長を恐れて、慧林寺の僧を始めとして斂むる人なし。田野の西北四里ばかりに中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴來りて勝頼夫婦、勝頼已下の屍を斂め葬る。其後東照宮甲州を御をさめ、一寺を建立有りて、景德院と號し、田地を寄附あり。小

宮山内膳友信が弟の僧なりしを、住持の僧となしたまへり。

◉東照宮依田信蕃を助け給ふ事

天正十年三月、東照宮江尻に御軍を出され、成瀬吉右衛門正一を以て、田中城を守りける。依田右衛門佐信蕃に降参を勧められ、武田の舊臣悉く背きて滅亡近きにあり、疾く城を出で候へ、と仰せ送られけるに、依田從ひ奉らず。武田の長臣どもの書簡を得て、虚實を定むべき旨を申す。其後先年遠州二股の城にてゆかりも候へば、大久保忠世に城を渡すべしと申せしかば、東照宮尤もなりとて、穴山梅雪が書簡を送らせらる。信蕃こゝに於て城を忠世に渡しければ、降参せば信州の本領をあて行るべき由、仰せ出されしに、依田承り、勝頼の存亡を審に承らざる間は、仰せを承り難しと申して、信州佐久郡蘆田に赴かれけり。勝頼既に亡びて、信長今度勝頼に三心なき輩といふとも武名ある者は、諸將召しかゝゆべからずと下知し、猶匿れ居る者を、捜し出して死罪に行はれんとなり。東照宮この事を悼ませ給ひ、信蕃を市川の御陣に召され、密旨を蒙り、主從六人遠州飼東郡二股の奥小川といふ所に匿させ給ひけり。其餘仁徳によりて、人數多援けさせ給ひけり。

◉武田信綱誅戮の事

天正十年三月、武田趙遙軒信綱降参しけるを、信忠森武藏守長可に下知して殺されけり。長可各務兵庫元正を使とし、武前釆女を添へたり。信綱刀を膝下に置きて放たず。各務武前行き向ひて、武藏守が愛する馬の候、慰みに見給はんと云へば、庭に出る處を、元正二尺六寸ありける雲次の刀にて一太刀斬りたりしに、信綱小脇指を抽く處を、釆女續いて切り伏せたり。小姓河野といふ者信綱の刀を持ち居たりしが、即ち抽いて釆女を切る。兩士遂に河野をも討ちとめたり。元正槍を合せ、首を取る事二十一。ことし高遠の城攻めにも、さまよりうかゞひ見て、群りたる眞中へ飛び入り倒れたるが、起きあがりて、散々に切り合ひ首を取りけるが、鶏尾の棒の指物さして、四邊を拂ふ有様を信忠見て、誰れと問ふ。長可わが家の士、各務兵庫と申す者なりと云へば、誠に今日の見物なりと云はれしとぞ。

◉戸田半右衛門山口小辨佐々清藏功名の事

高遠の城にて、戸田半右衛門重政一番に駈け入る時、赤母衣に金の戻竹の出し戸張隱のす戸、衝木に當て通り得ず。尻居に倒るゝ其間に、信忠の小姓山口小辨、佐々清藏踏み越えて駈け入りたり。戸田後に人に語りて我れ等が如き武功にては、母衣指物の門木戸に問ゆべきと、心付く事はなき物なり、敵を見て、かゝる時外の志はなきものなり。若し勝れたる武勇の人は、別の事よと云ひけり。半右衛門後武藏守と稱し、關ヶ原にて討死なり。信長後に感狀を

與へらるゝ時、先づ小辨に手づから國久の刀を與へ、次に佐々に長光の脇指を與へ、汝が武功は、誠に大功の内藏助が從子なれば、と詞をかけらる。二條にて、明智、信忠を攻むる時、清藏小辨に向ひ、素肌にて死なんは屍の上の恥なるべしとて打つて出で、一人づゝ敵を斬り伏せ、其屍を引き入れて、物の具取りて打ち着、又切つて出で、討死せしとなり。共に十六歳、容貌世に超えて美しかりけるが、面に血を濺ぎ、髪の亂れしを見る人、殊に惜しみ合へり、小辨は伏見の賤しき者の子なれども、美少年にて呼び出されけり。

◎小山田信茂誅戮の事

小山田兵衛尉信茂は、武田累世の長臣なりしに、勝頼に叛き、降參して善光寺にありしを、信忠堀尾茂助に下知して殺せとなり。則武三太夫を討手とす。士一人添へて甲冑を送り、一禮せん時刺殺せとの事なり。三太夫善光寺に赴き甲冑を贈り進らする由いひければ、小山田出て一禮すれども則武討つべき氣色なし、稍ありて、則武靜かに武田家士大將として、數世重恩の身、今度主君に叛き、不義の至りに候ふ故、討手に參り候、立ち向はれよといふ。小山田聞きて、口惜しくも計られけるよ、疾く首を刎ねられよ、といへども、則武猶動かず、小山田刀に手をかけ、是れまでに候ふと云へば、其の時則武立ちあがりて、首を斬りたりけり。

◎馬場美濃が女召出さるゝ事

勝頼亡びて後、馬場美濃氏房が女、召し出さるべしとて、甲州の郡代鳥井彦右衛門元忠に仰せ出されしに、尋ね探し候へど、行方知れざる由を申しけり。程經て、其あり所知れたる由申す人のありければ、東照宮何方に匿れゐたるぞと御尋ねあり。即ち井鳥が許に、潛に匿し置きたると申しければ、すべて彦右衛門はぬからぬもの哉、と仰せありけるとぞ。

◎辻彌兵衛が事

辻彌兵衛盛昌は、天正三年の勘氣にて、七月甲州を出で、信州小諸の與良遠江が許に忍び居たりしが勝頼亡びて後、德川家へ仕へ奉る。甲陽軍鑑に勝頼天目山に落ち行く時、辻一揆の長となりて、攻めたる由を記せるは非なり。

◎明智光秀信長公を弑する事

明智日向守光秀、信長を弑せばやと思ふ事久し。天正十年六月朔日の夜、明智左馬助秀俊を寢所に呼び入れ、傍の人を退け、一大事のあるなり、蚊屋の中に入れといふ。秀俊頭を蚊屋の中にさし入れて、何事にてか候ふといふ。光秀汝が首を得させよと云へば、秀俊聞いて、

一人のみにて候ふかと問ふ。光秀三人の命を貰ひ、猶足らざる故なりと云ふ。秀俊いと易き事にて候、大事こと能く成るべしと云へば、光秀如何に知りたるやと問ふに、事新しき仰せと、日比の恨み思ひ合せて候ふと云へば、光秀いま信長を討たんと思ふなり汝を偏に頼み思ふぞよ。先づ汝に語らんと思ひしに、中々諫め爭ふべし。汝力を合せずば志遂げ難からん。從はずば、汝を斬らんと思ひしとて、盃を出す。秀俊先づ臣一人に語り給ふならば、諫め申すべし。早や外にも語り給はんには、駟も及ばずと申す事の候。泄れ聞えて、臍を嚙むとも益なし。疾く打ち立ち給へとて、夜半ばかりに、俄に軍兵を押し出し、明れば二日の曙に、信長の宿せられし本能寺を取り圍む。森蘭丸長定、何事ぞ物騒がしきとて、白き帷子の上に、淺黄鹿子の小袖を被り、立ち出で見るに、壁の外に、水色の旗見ゆる。信長敵は誰れと問はるゝに、蘭丸明智にて候ふ、と申しも果てぬに、箕浦大藏、古川九兵衛、天野源右衛門等、大庭に亂れ入り、信長白き一重物を着、弓持ちて射られしに弦切れたり。地臙脂の帷子着たる二十七八歳ばかりの女房、十文字の槍を持ち來りけるを、信長おつ取り、暫し防がれしが、内につと入りて、障子を引き立てたれども、燭臺の未だ殘りし火に、信長の影映りたるを見て、天野槍を取りのべ刺し通す。蘭丸弟の坊丸十七歳、力丸十六歳なりしが、切つて出て討死しける隙に、内より火をかけ灰燼となりたりけり。

◉秀吉備中にて光秀が書を取られし事

明智、信長を弑する時、秀吉は備中にて、毛利家に向つて陣せしが、秀吉所々に忍びの者を置かれしに、備中庭瀬にて、怪しげなる飛脚の者を生捕たり。秀吉其書を披き見るに、信長を討取らば、秀吉必ず敗北すべし。秀吉を追ひ擊たれよと、毛利家へ云ひ送る書なり。若し此書毛利家に到らば如何なる謀あるべきも知るべからず。秀吉の慮淺からずと人云へり。又高松の城は容易く攻め落すべきに、水攻めにして日を經たるは、信長常に大功の速に成るを、忌み妬むの心あるを察しての故なりと云へり。

◉秀吉西國の米を買はれし事

秀吉備中に陣して、毛利と和平せん事を計り、密に手だてを運し、西國の米を、價を貴く買はれしかば、城米を出して賣る者多し。小早川隆景、一人固く制して賣らせず。信長弑せられて、秀吉と毛利家手切れなるべかりしに、兵粮の豐ならざる故、終に和平に及べり。

◉光秀居城を築く事

附辛崎の松の事

明智江州坂本に城を築く時、三甫といふ者、
波間よりかさねあけさや雲の峰

光秀わさに、
磯山づたへしける松村、

又光秀丹波龜山より、愛宕に續ける山に廓を構へ、此山を周山と名く、自ら武王に比し、信長を殷の紂王に譬ふる心、後に現はれたりと人云ひけり、又志賀唐崎の松、何日の比にか枯れたりしを、秀光植ゑつぎて、今の松なり。光秀詠める歌、

われならで誰かは植ゑむひとつ松心して吹け志賀の浦風

一說、青蓮院宮尊朝法親王の辛崎の松の記にて見れば、大津の城主、新庄駿河守直賴舍弟、松庵「東玉」雜齋「直壽」此雜齋、天正十九年卯の秋植ゑられし由、其時の歌に、

おのづから千代も經ぬべし辛崎のまつにひかるゝみそきなりせば

されば今の松は、此新庄の植ゑられしか。

◉光秀反狀の事

光秀天正七年六月、修驗者を遣して、丹渡の守護波多野右衛門大夫秀治が許に、光秀が母を質に出し計りければ、秀治其弟遠江守秀尙、共に本目の城に來りけるを、酒宴して纓し、兵

を伏せ置きて、兄弟を始め從者十一人を生捕り、安土に遣しけり。秀治は伏兵と散々に戰ひし時、傷を蒙り途中にて死す。信長秀尙以下を安土にて磔にせられたり。丹波に殘り居たる者ども、明智が母を磔にしたり。明智遂に赤井等を攻め從へ、丹波を信長より賜りけり。

又信長ある時、酒宴して七盃入の盃をもて光秀に强ひらるゝ。光秀思ひも寄らずと辭し申せば、信長脇指を抽き、此白刃を呑むべきか、酒を飲むべきか、と怒られしかば酒飲みてけり。其後稻葉伊豫守家人を、明智多くの祿を與へ呼び出せしを、稻葉求むれ共戻さず。信長戻せと下知せられしをも肯はず。信長怒つて明智が髮を捽み引き伏せて責めらるゝ。光秀國を賜り候へども、身の爲に致すことなく、士を養ふを、第一とする由答へければ、信長怒りながらさて止みけり。東照宮御上京の時、光秀に馳走の事を命せらる。種々纓禮の設しけるに、信長鷹野の時立寄り見て、肉の臭しけるを、草鞋にて踏み散らされけり。光秀又新に用意しける處に、備中へ出陣せよと、下知主られしば、光秀忍び兼ねて叛きしと云へり。されば信長の暴なる、もとより論を待たず。光秀土地を略せん爲に、老母を質にして殺しぬる不孝を、信長の賞せられたる、君臣共に惡逆の相合へる、終を令くせざること理なり。

◉秀吉浮田を欺きて上洛の事

光秀信長を弑する時、秀吉備中より引き返さる。此時備前の浮田八郎秀家、幼少なれども、

長臣老將の面々、如何なる謀あるや料り難ければ、先づ使を岡田の城に遣りて、一刻も疾く馳せ上り、吊軍を志し候。岡山にて相謀るべしと云はせられける。浮田はもとより光秀に心を通じければ、秀吉の歸路を塞ぐべきや、如何せんといふ處に、かく告げ來れば、さらば城中にて討ち取るべし。願ふ處の幸ひなりと、密に悦び合うて、其謀をぞ相議しける。秀吉六月七日の明方に高松より引き返し、午の刻ばかりに宮内に着きて、やがて岡山に赴くべし、と云ひ觸らしけるが、俄に霍亂したりとて、打ち臥しければ、秀家の使來りたるに、近習の者共出で給ひて、只今霍亂にて吐瀉せしが、腹の痛み少し止みて寢入り候と、應答ひて時を移す。其間に秀吉は、奥州驪といふ名馬に乘り、雜卒に交り、吉井川を渡り、片上を過ぎ、宇根に馳せ著けたれば馬疲れたり。さて使を岡山に遣りて、急ぐ事の候うて、脇道を通りて過ぎ候ひぬ、と云はせられしかば、浮田の人々皆呆れけるとぞ。

◉黑田孝隆思慮の事

秀吉信長の弔合戰せんとて、備中より引き返されし時、姫路に立ち寄らるべしと、人々も思ひけるに、黑田孝隆姫路に馬を駐めらるべき事、少しの間も然るべからず候。假初めの旅にも、家出は遲々する人情なり。今度は、主君の仇を討つべき爲の軍にて候。大和の筒井細川を始め、明智が親しみある者ども、馳せ加はりなば、ゆゝしき大事なり。如何にやせんと、

思慮の未だ決せざる中に、急ぎて押し付けられよ、と謀りたりければ、能くこそ云ひたれとて、一人も姫路へ寄りたらん者をば、忽ち誅すべし、と觸れさせられけり。孝隆先だつて人を走らかし、姫路の町人ども、河原へ出で粥をしたくして、軍兵に饗すべし、と下知したりければ、食肴を河原へ持ち出でたりければ、立ち寄らずして山崎表へ押し付けられけり。太閤記に、姫路に二日滯留といへるは誤りなり。

◉池田家の使者筒井順慶を試みる事

光秀信長を弑せし時、筒井順慶は光秀と親しければ、必ず與せしならんと人々思へり。池田紀伊守、其臣日置猪右衛門、土倉四郎兵衛、丹羽山城、三人を使として、順慶の許に遣らせる。三人承りて、順慶若し明智に與せば刺し殺すべしと申す。紀州公、否とよ、汝等死せば、我が片手を折られたるに同じ、と制せられしかば、三人重ねて、順慶と軍せんに、幾何の手負ひ討死か候ふべき。さらば、三人も討死すべきにて候。三人をもて、多くの味方に換へ給へ。順慶を討ち取らば、光秀必ず敗北すべしと申して、順慶が許に行く。順慶出會ひて、如何てか光秀が不義に與すべき。疾く信長の弔軍せんと云ふに、實にも僞りならぬ體なれば、三人悦びて、歸る道にて、山城今日順慶否と云はんに刺し殺さんと思ひて、坐中をきつと見たりしに、傍に十六七歳ばかりなる男の順慶が刀持ちて居たりし面魂只者ならず。順

慶に飛びかゝるならば、頭二つに切り割りつべく見えし、と語りければ、日置も土倉も、されば我等も然思ひつる事よと云ひけり。かの小姓は牧野兵太夫とて、武者修行して、世に聞ゆる剛の者となりけり。

◉東照宮和泉國堺より御歸國の事

信長弑せらるゝ時、東照宮は泉州堺におはしましけるに、小勢にて斯かる亂れに、遙々と三河へいかてか引取らせ給ふべきと、人々色を失へり。東照宮素より地理を知し召され、河州飯森の宮は、要害の地なれば、其地を守りて、軍あらんと仰せありて、森口に着かせ給ひし時、本多忠勝京都に御使に參りけるが、道にて變を聞き引き返して來り敵大勢にて候らん。疾く御歸國然るべからんと、申すを聞し召し、案内者は如何すべき。敵道を要ぎらんは必定なり、やみ〳〵と討たれんは、口惜しからずや、と仰せありける處に、信長より馳走につけられし長谷川竹丸、當國の交野郡津田の邊は、信長の恩を蒙りたる者の數多候へば道導させ候ふべしと申す。宇津越を經て山城の相樂郡を過ぎ、木津川を渡り、それより宇治橋の上、一里ばかり東の瀨を渉り、江州信樂に出られたり。伊賀の上野鹿伏兎越を、伊勢の白子に至りて船に召され、然るべからんと定められけり。忠勝蜻蛉斬と名づけし槍を提げ、其邊の百姓を打ち具し此殿の案内申せと云ひて、それより道々の村々に匿したりければ、津田よりも案

内者來りぬ。其日は山城相樂郡山田村に泊らせ給ひ、所々より心を寄せし人々ども、あまた警衛し奉る。穴山梅雪は、これまで從ひ奉りしが引き別れけり。

宇治より小幡越を江州高島に至り、濃州に赴き甲州に歸るべき旨を申して引き別れしが、一揆の爲に、山城の綴喜郡にて殺されけるとぞ。

其翌日、木津川に至らせ給ふ柴船二艘あり。忠勝借らんと云ふに、肯はざれば憎い奴かな、切つて棄てんといふに、恐れて乘せ奉る。やがて渉り終らせ給ひて、二艘の船皆打ち破りて棄てたり、その明けの日、一揆石原村に集りて待ちかけたり。大和より從ひ奉りし吉川善兵衛・其子主馬助柏の木を馬標にして、先駈けして追ひ拂ふ。柏を家の紋にせよ、と仰せけるとぞ。それより宇治田原の地士、山口玄蕃御膳を献じて、宇治川に至らせ給へば船なし。榊原が士原田左衛門馬を乘り入れ、瀨踏みして打ち渉す。酒井忠次船一艘を探し出して渡し奉り、雜卒に至るまで、皆渡る事を得たり。江州信樂までは嶮路なれども警衛に附き從へる人々多く、一揆手さす事もなし。多羅尾四郎兵衛光敏は、世々信樂を領しけるが、其の子長兵衛御迎ひに參りたり。人心計り難しと、人々恐るゝ處に、忠勝いや〳〵光敏御敵するならば、彼れが家に入らせ給はずとも遁し奉らじ。一向入らせ給へと申せば、皆尤もなりとて、立ち寄らせ給ふに、御待遇を設け人々勞を忘れたり。

又忠勝、此多羅尾二心ありと見ば、捕へて刺し殺すべしと云ひける故、立ち寄らせ給ふ

とも云へり。

五日には、高見嶺を打ち越え給ふ。御供に候ひける服部半藏正成は、もと伊州生れの人なれば、忠勝下知して、伊賀の案内したりけり。國士數多參りて、警衛し奉りて、上柘植より三里半ばかり鹿伏兎越といふ深山を越え給ひて、六日に白子の浦に着かせ給ひて、長谷川竹丸秀一「後藤五郎」を始めとして和州山州伊州の士に御暇賜り、時を得て濱松に參るべき由、懇に仰せを蒙りけり。それより三河に事なく歸らせ給ひぬ。伊賀は去年九月信雄攻め入りて、打ち從へられし比、逃げ匿るゝ者を求め出し、殺害を專らとせられしかば、國士ども三河に參りて、御恩を蒙りたる人々多かりしかば、其從類皆警固し奉りけるとなり。やがて明智を追討のため、御軍を出されしに、伊賀の國士ども集りつどひて參りけるを、多くは大番に入れさせ給ひ、恩賞に與かりけり。

◉小寺黑田始末の事

黑田美濃守職隆「後宗圓と稱す」は、備前國福岡の人なりしが、播磨の小寺藤兵衛政職に仕へて、子官兵衛孝隆「後如水と稱す」、共に功名ありて用ひられけり。播州は其比、所々に人々地に據りて守り軍せしが、小寺は五着にありて、姫路に小城を構へ、黑田父子こゝにありて、秀吉に賴みて、信長の旗下に屬す。孝隆の子長政、其比は松千代といひしを、人質にし

て、秀吉の居城近江の長濱に置きたり。此頃毛利家の兵勢强かりしかば、小寺約を變せんとす。孝隆此は然るべからず。信長物荒き人なれども、一旦天下に旗をあげられん、行末は知らず、先づ時の宜しきに隱ふべし。松千代を棄つるを悲みかゝ申すに非ずと諫めけり。小寺聞き入れず。孝隆父宗圓に父子とも誅せられぬべき密謀を告ぐ。宗圓物馴れたる士五六人呼び集め、所存を問ふに、官兵衛五着に到られなば危かるべしといふ。孝隆、されば諫めは尤もなれども、事も見ずして姫路に立て籠らんは、君に弓を引くに非ずや。五着に赴きて力を盡し奉公し、かなはずば自害せん。其後人々心を合せ、父の御事賴みまかする由決斷せられしかば人々父子おし隔てられむはいかゞ候べき。只病とて五着の奴原に使をもて媚び諂ひ欺くに若くべからず。討手來らば力なし。其後一戰を遂けて五着を打破るべし。罪無くて討たんとする惡逆の人、天の咎なからんやと口々に云へども、孝隆各々存ずる旨は誠に理なれども、今病と云はんに、實とは聞き入れじ。必ず主君に叛くと人に誹られん事士の志に非じ、君に深く思ひ入りたる忠の空しくならんは、運のきはめなれば力なし、われ一人誅せられたりとも、いかにかせん。此姫路をだに取られずば天下の安危歲月を經ずして定るべしとて、とゞまる色の見にざれば、宗圓家の恥を思ひて身を捨てむと思ひ定むる事士の志なり。疾く五着に行きて事かなはずば自殺せよ。後の事は心安く思ひ候へ。君の志違ふともわれ叛くべからずといひしかば、孝隆打ち笑ひ、さらばとて座を立てば、人々只今思し召し切られ

ての仰は遺言にあらずや。もし五着にて難を遁れ給はずば、其時人々五着の城を枕にせんと誓ひけり。宗圓、官兵衛は官兵衛の志をせよ。人々は人々の志をせよと下知せられしかば、孝隆五着に赴きけり宗圓見送り、子ながらも恥かしき事なり。先だつべき親の留まりて子に死ねといふこそ口惜しけれ。されども君恩淺からざるは人の存ずる處なり。今讒言を信せらるゝこそ悲しけれ。孝隆を遣らずして引き籠り、謀叛しては命は惜しき物ぞと敎ふるは父の道に非ず、逆となりて身を殺すは恥を知る道なりけりとて、さめざめと泣きたりけるが、さぞ五着にて謀りて見んに、今姫路に弓をひく設けなしそ。小酒盛して時々舞ひ歌ひて日を送れといはしとぞ。孝隆は五着に行きて必おくべ人の許に使して、求め來れる肴ありとて、饗しめやかに語りて打ち解けたる體なれば、いかに繕ふとも心の外に顯はれぬ事はあらじなど云ひ合へり。又此を疑ひて黑田父子は謀たくましき者にて、よき士あまたあり、城に籠る用意せん間に官兵衛を以て引くべきも計り難しとて、姫路の樣を聞くに、宗圓金剛に舞まはせて打ち解けたる體なれば、さては別の事もあらじといへり。此時攝州荒木攝津守村重は毛利に屬し、信長と戰ひ利あらずして有岡の城に引き籠る。此由小寺聞きて孝隆を呼びて、われ毛利に與すべきとは內々荒木と云ひかはしたる故なり。今毛利にたよらん事は我が過ちなりと覺ゆるぞ。されども此まゝにて手切をせんに、表裏者と云はれんも口惜しければ、とく有岡に行いて荒木を諫めて、もし聞き入れば秀吉に謀りて信長と荒木和平をとり行ふべし。

攝州信長に從はゞ眞に心を翻して信長に從ふべしといへば、孝隆聞きて、信長と荒木と和平は思ひよりも候はず。荒木度々信長に背きたれば、いかで其言を信ぜらるべき。參りたりとも徒事ならん。然れども辭し申せば勇なきに似たりとて、有岡に赴く。路姫路に立ち寄りて父子對面し、有岡に至らば、必ず首を刎ぬべきか、おさへて囚とするか、二つの中に過ぎ候まじ。五着に死なんより有岡にて死に候へば、信長も聞き、又世の譽ともなり候べしと思ひ切つたる色を宗圓見て涙に咽び、しばし物をも云はざりしが、やゝありて誠に困厄の至極なれども、名にかへて身を捨つるは義を思ふ故なりとて見送りしかば、孝隆有岡に赴きたり。小寺兼て村重に密に毛利に一味すべきに、黑田父子人質の松千代を信長に出し置きたれば、かの父子は織田に內通の志ありと告げ知らせつれば、有岡の本丸に呼び入れ生捕りて牢におし籠みけり。五着に此由聞えしかば、小寺僞りて齒がみをなし、荒木が狼藉の次第遺恨深し。然れども此上は信長に一味の心を易へて毛利に與し、官兵衛を引きとる謀やあるべきと云はせしかば、宗圓怒りて官兵衛生捕になりしかば是非の論なし。年老いたる身の子を失ひし事は誠に力なき次第なり。然るに官兵衛を救はん事いはれなきに非ざれども、先づ松千代を信長に出せし事は君も又臣父子と相計れる處にて候ふに、此度官兵衛を有岡にて捕らへたるは、荒木が橫さまの振舞なり。相計れる處の人質を棄てゝ、おしとめたる者を助くべきは逆ならずや。只順道に隨がひて天の冥見を待つに若かず。我れ若き時より度々の軍に

臨み、小寺の家の危難を救ひ候に、今齢傾き、頼み切つたる長子を捨て候事は口惜しく候へども、首を砕かるゝとも毛利に一味せよとの仰をば得承らじとて、刀を抽き誓つてければ、使も言なくて歸りけり。宗圓が士ども五着を攻め破らんといへども用ひず。村重心あらば勞るべし。もし五着を攻めなば、村重も官兵衛を殺害すべし。知らぬ樣にてあれよ。斯くあらんと思ひて官兵衛が女房をば潛に此比引きとり置きたりとて驚がず。村重は小寺に頼まれて孝隆を生捕りたれども、己が敵にも非ざれば、いたはり置きけり。かくて信長有岡を攻むるに及びて、毛利家の後卷もせざれば、城落ちたりけり。孝隆は牢の中に呆れてありける處に栗山備後「其時善助」時々有岡に行きて忍びて商家を語らひ、牢の後の沼より姫路の事ども語りし事度々にて、案内を知りたれば、牢に走り行きて見れば、番人も落ち失せたり。此はと驚き且つ悅びて、善助棄て置きたる斧にて鎖を破り、引きたてけれども、三年居屈み、其上に濕瘡を病みて起つ事能はず。かたへなる牢中の人を頼み舁き負はせて城を出で、寄手の陣に行き、さて姫路に歸る事を得たり。秀吉播州に攻め入るに及びて、小寺は但馬に落ち行き黑田父子は危難を脫るゝ事を得て、孝隆に宍粟郡を賜はり、姫路を秀吉の城とす。後に如水と稱して、智謀逞しく秀吉の功臣第一と聞えしはこの孝隆なり。

◉井口兄弟武勇の事

黑田孝隆播州にて秀吉の命を承け、長の坪といふ城を攻め落し、井口猪之介、三宅藤十郎に其城を預け、孝隆は秀吉の先陣たる處に、其城より逃げ落ちたる者ども一族を催し、其夜攻め寄せたり。井口三宅人も少く攻め破りて普請も未だせざれば守り難し。殿未だ遠くは行かせまじ。切りぬけて參り、後卷の事申すべしと云ひ合せ、三宅は百二十人許にて搦手にありしが、人數を殘し、二十人許を連れ圍を出る。敵、利を得て攻め入りたり。井口は大手にて防ぎ戰ひしが、翌朝辰の刻、後卷の旗先見ゆる比、薙刀にて片股を薙ぎ落され、石垣にたより居たれども、敵恐れて近付かず。最後に大音あげ、此城の大將井口猪之介ぞ、首取れとて自害しけり。藤十郎は後三宅若狹とて武名あり。猪之介に三人の弟あり、六太夫、甚十郎、與一之助といふ。六太夫は播州北條の構を守りて討死しけり。ある時孝隆の士罪ありて討手を向けらるゝに、却りて討手を切つて兄弟三人町に出で、大なる屋に取り籠りたり。甚十郎見て參らんといべども、孝隆許されざりしに、再三に及びければ、さらばとて許されたり甚十郎其處に行くと忽ち門の潛戸をひき放し、楯にとりて飛びこみ、戸を以て二人を打ち伏せ、一人は切り殺し、打ち倒したる二人も切つて、首三つ取りて馬に乘り、二町計歸る處に、罪科人の從者主人の首を見て、槍にて甚十郎が馬上を目がけ飛びかゝりて突く。突かれながら其者を切つて捨てたれども、痛手にて馬より落ち、少時ありて蘇生したるを、戸板にのせ來る孝隆膝を枕にさせ、手は如何と問はるゝに、如此に候と一言いひて終れり。兄弟三人皆

わが爲に死したる事、報ゆるに詞なしとて、孝隆其父與二右衛門が宅に自ら往きて弔はれ、與一之助七八歳なるを呼び出さる。既に九つになりける比、三人の兄は勇氣ゆゝしき者なりけれども、人の性質は計りがたければ試みんと思ひて、磔を見つるやと問はるゝに、見ずと答ふ。今夜は月明かなり、某の所の磔木の下に行き、標を立てゝ、歸らんやといはるゝに、承り候とて、自ら御幣を切り、竹につけて與へらるゝを、與一持ち行きて立てんとするに、磔木動くを見て、死にきらぬか、留を刺してとらせんとて、木に登るに、驚きて條木より飛び下り逃ぐるを與一さては憎き次第なり、遁すまじと追つ蒐くる。せん方なく宮のありし内へ入り戸をたつれば、いつまで待ちても出づるを斬らんものをと呼ばはる。さまざまにすかし、名をいへども歸らざれば、殿の仰にて威の爲に來り。着せさせ給ふ帷子の片袖を證據に取りて許されよといふによりて歸りぬ。朝鮮にて竹も木もなき廣野に一筋の道窪くて切通しに似て、其向ふ處大山の麓にて曲尺の如し。大穴を穿ち射手を籠め置きて、行きかゝる日本人あまた射殺され、屍相重れり。山蔭の敵多少を知らざれば、進む者無し。井口が從者山崎喜兵衛、見て參らん、馬を控へて待たれ候へと云ひすて走り込む。井口も馬より下りて走り入り、山崎先づ射手三人を討ち取り、其首を持て大音あげて名乘りたり。井口攻め入り追散らす。井口其時は兵助と云ひけり。此賞美に朱柄の槍を許され候へと申す。卒爾には許し難し。一日に首七ツ取りてこそ朱柄は許さるゝと申し傳へて候ふと人々申しける故、事延び

にけるが、其後井口一日に首七ツ、山崎も首六ツ取りしかば、朱柄を兵助に許されたり。晩年に村田出羽吉次と稱しけり。

◉吉田六之介首供養の事

別所家にて、首供養したる人ありと孝隆聞きて、秦桐若首三十一取りたるに惜むべきは死したりき。吉田六之介正利供養すべしと云はれしに、正利首數二十七取りて候ふとて辭したりけり。孝隆小氣なる男かな。今年三十一歳なり此後首取るまじとや。先づ供養して後に、其數を合せよとて、米百石與へ、供養して播州青山の南に塚を築きたり。後所々の合戰、朝鮮の軍までに取りたる首五十に及べり。後壹岐といふ。

◉生田木屋之介武功の事

天正五年、黑田孝隆播州佐用の城を攻むる時、生田木屋之介夜中に忍びて、城際に近づきより、懷中の小鋸をもて塀柱の根を切り、目標をして、翌日城攻めに、彼の柱に鈎繩を付けて引き倒し、先駈けして城に入りけり。木屋之介もと隅田小介といふ。日向國隅田刑部少輔が嫡子なり。十六歳の時朋輩を討つて出奔し、播州に行きて、孝隆の士井上九郎右衛門を頼みけるに、留め置き、未だ對面せざる處に、其夜隣家に人を殺し、取り籠りたる者あり。夫れ

からめ出すに付き、即時に孝隆に申して、それより奉公しけり。攝州生田の城にて高名ありこれによりて生田木屋之介姓名を賜る。是れこそ高名を長く顯さん爲とかや。

◉山崎合戰の時堀秀政寶寺の山を取る事

山崎合戰の時、堀久太郎秀政の士の子、何某といへる者、明智が許に奉公してありしが、光秀夜の未だ明けざる內に、寶寺の山に兵を押し上ぐべしと謀りしを、父のもとに告げやりて思ひも寄らず敵味方となり、明日は一戰に及ばん事を歎きける。其書狀を則ち秀政に見せけりければ、秀政夜半に寶寺の山に押し上り、陣し待ちかけたりけるを、いかで知るべき。夜明け方に明智先手押し寄せたる處を、秀政山上より鐵砲を打ちかけ、不意に切つてかゝり、追ひ崩して一戰に利を得たり。

◉森寺政右衛門武名の事

山崎の合戰に、明智が先陣と護國公の先陣と戰を挑む。時に侍大將森寺政右衛門忠勝、眞先かけて敵を追ひ立つる。森寺が馬標檜木笠なりしを、明智が者ども見て、今日檜木笠の馬標持たせたる大剛の者、下知せし有樣目を驚かし候。姓名を承らばやと、度々呼はりけるを、秀吉聞きて今日の軍森寺が一人の武名をあげしとて、桐の紋付きたる羽織を與へられけり。

◉則武三太夫功名の事

山崎の軍に、堀尾帶刀吉晴の士、則武三太夫首を取りて、吉晴の前に來る。吉晴思ひしよりも出かしたり、と詞をかけられしかば、則武怒つて、首を提げて進み寄り、かゝる時は、大將も目の暗くなる物に候。則武三太夫が取つたる首能く御覽候へと罵る。吉晴も憎き奴哉と云ふまゝに、刀を抽いて斬られしに冑の星を削りたり。則武眞一文字に敵の中に駈け入り又首を取りて歸る。吉晴は必ず則武は討死せんと悔み思はれし處に、則武來りければ、大に悅んで、汝を先に褒めたる詞、賞する餘りに、思ひしよりもと云へる、剛の者に云ふべき詞にあらず、我が過にてこそあれ、汝が二度の先駈け、大きに勝れしよと感ぜられけり。

◉幸田彥右衛門が母義死の事

織田信孝、秀吉と弓箭をとる時、信孝の乳の人を人質に、秀吉のもとに出し置かれしを、磔にして誅せらる。かの乳の人の子は、幸田彥右衛門とて信孝の士大將なり。是れより前、秀吉信孝の長臣等を語らはるゝに、岡本下野守は同心して、信孝に背きけれども、幸田は背かず、幸田が母誅せらるゝに及びて子の彥右衛門に書を送りて、我れ今空しくなること、努々歎くべからず。親は必ず子に先立つ習ひなり。唯忠義を守りて、君にな背き參らせそ、と言

ひ遣ばしければ、聞く人感じ合へり。天正十一年四月十八日、秀吉の陣先の地に攻め入る時幸田兄弟潔く討死したりけり。幸田が母は、實に漢の王陵が母の志とも云ひつべし、但し王陵が母は、天下を知しめすべき高祖の事を識りたれども、只今危難に迫れる織田家に、忠を盡せと云へる、眞に有難きことなるべし。

◉志津ケ嶽合戰秀吉智謀の事

佐久間玄蕃盛政。柳瀬にて中川清秀を討ち取りける時、秀吉長濱より、一騎駈けにて來られけり。志津ケ嶽に到れば日暮れぬ。陣の相去る事二里ばかりなり。盛政使を以て、早くも軍を寄せられ候、相待ちて候ふほどに、夜明けなば、矢合仕るべしとぞ言ひ送りける。秀吉聞きて、是れより申さんに、ゆゝしくも承り候。明日潔く軍を遂げ候ふべしとて、使を返して後、吾れに怠らせ、夜討ちせんとの事ならん。遠き異國の張良は知らず。我れを欺るべき者、日本にありとは覺えずとて、野にも山にも、篝を透間なく焚きて、白日の如し。佐久間は、敵人馬の行程を急ぎて、疲れたる處へ、するりと押し寄せ、打ち破らんと思ひけるに、秀吉の謀に夜討の支度空しくなりにけり。

◉堀七郎兵衛見切の事

志津ケ嶽の合戰に、堀久太郎秀政兵を分ち出さんとする時、其臣堀七郎兵衛押し留て曰く、勝家の陣より佐久間が陣に、頻に使來ると見ゆ。疾く引き取れとの事ならむ。若し引き取らば玄蕃本の道をば歸るべからず。然らば間近き所にて戰ひあるべし。玄蕃引き取らずば、勝家必ず來りて軍あるべし。此二つを出づべからず。兵を分たずして待つべしと云ふに、玄蕃も退かず、柴田も進まざりしかば、勝家運盡きたりと云ひしが、果して敗北しけり。又志津ケ嶽の事を、老功の人に問ひしに、勝家の詞の如く、玄蕃引き取らば、勝利を全うすべし。玄蕃が言の如く、勝家押し詰め來らば、必ず敗軍すまじきなり。兩將互に猶豫して、勝を失ひたりとぞ語りける。

◉佐久間盛政生捕るゝ事
附久右衛門安次源六郎實政が事

志津ケ嶽の軍破れて、佐久間を生捕り來る。秀吉見て汝は武勇逞しき者なり。助けて國を與ふべし。二心なからんやと問ふに、盛政冷笑ひ、我に國を與へなば汝を生捕り搦めん事、今日我が身の上の如くせん。新に恩を受くるとも、柴田を忘れんやと云ふ。死すべきに及びて、大紋紅裡廣袖の小袖白帷子に、空炷して吳れられよ。一生の終りに、風流を盡したし。是れ一つの望みなりと云ひしかば、秀吉其望みに任せられしかば、大に悅んで是れを着たりけ

り。玄蕃其時二十七歳、皆人惜しみ合へり。

柴田亡びて後、其從士佐久間久右衛門安次、源六郎實政兄弟紀州に遁れ、粉川法師三池を語らひ、河内霧坂に城を構へ、後亦南河内天野山の國見を要害にして、度々軍しけるが、遂に秀吉に攻め落さる。後に小田原に入り、北條亡びて、兄弟金澤の稱名寺にありと、秀吉傳へ聞き、伯父勝家の爲に吾れを仇とする志、誠に大丈夫と云ふべし。今日本平均しぬれば、心を改めよとて、安次に一萬五千石、實政に一萬石與へて、蒲生氏郷に附けらる。兄弟氏郷に一禮じける時、躓きけるを人皆笑ひしかば、氏郷物の思慮なく汝等が奉公ぶりを彼に競ぶる事よ。兄弟とも疊障の士にあらざる物をと言はれけり。

◉尼子家の十勇士

尼子家十勇士と世に傳へけるは、山中鹿之助、薮原茨之助、五月早苗之助、上田稻葉之助、尤道理之助、早川鮎之助、川岸柳之助、井筒女之助、阿波鳴戸之助、破骨障子之助なり。

◉信雄長臣を誅せられし事

秀吉信雄を打ち亡さんと謀りて、先づ信雄の長臣長岡長門守、津川玄蕃、淺井田宮丸、瀧川三郎兵衛を招き、懇に待遇して後、信雄に自害をすゝめよ。さらば恩賞厚く行ふべしと語ら

れけり。聞き入れずば首を刎ねん氣色なる上、神文を書けよと責めらる、四人力なく承りぬと言ひて、起請文を書きにけり。秀吉も約を背かじと神文を出されけり。是れは一人づゝ語らふべきを一同に招きたるは、信雄に告げ知らする者ありて、殘る者を誅せさせんとの謀なり。又皆秀吉に實に心服せずとも、既に神文を書きたれば、疑ひて一和すべからずと思慮せられたるべし。瀧川素僧なりしを、信長呼び出し、四萬石の地を賜りし身なれば、長島に歸りて、信雄に斯くと告げ申せば、頓て三人を誅せんとて、長門は飯田半兵衛、玄蕃は土方勘兵衛田宮丸は森源三郎と討手を定められけり。土方承りて、長門をば臣に仰せ付けられ候へ、打ち留め申さんと云ふ。飯田既に定りたる上は、何の申し條のあるべきとぞ云へば、信雄さらば、長門をば土方討ち候へ。飯田は既に下知したれば、討ちたるに同じとて、長門を土方に讓りけり。土方が斯く言ひけるに故あり。土方は始め彦三郎と云ひけるが、太く逞しく、胸より手足に至るまで、毛生ひ熊の如くにて、勇猛の士なり。長門常に土方に語りて、殿は人の申す事輕々しく信ぜられて、日比我れを疎まるゝよ、と度々云ひけるを、土方夫れは戯れか、又は汝の心の違ひたるならんと云へば、長門いや〳〵此長門をば、必ず誅せらるべし。其時汝討手なるべきよ。容易く討たるべ身にあらずと云へば、土方聞きて、討手の仰せを奉らんに、此勘兵衛ならで、又誰れかあるべきと語りたるに、長門仰せに寄りて此の七つ胴切り落したる脇指にて、が頭を斬り破らん詞に依りて、斯くは申せしなり。天正十二

年三月三日の禮に、岡田信雄の前に出でけるを、相圖とせられけり。岡田其日は、脇指を横たへて進み出る。信雄新に造らせた鐵砲を見よとて指し出し、此臺尻の穴は、何の爲ぞと問はるゝに、岡田少し差しうつむく時、土方つと寄りて引つ組んだり、岡田己れをやと云ふまゝに、脇差しを七八寸抽きけれども、大力に強く抱かれて、抽きも放たず捻ぢ合ひける處を、信雄土方放せ、我れ自ら切らん、と詞を懸けられしに、臣と共に斬らせ給へとて放さず。信雄放たざれば、何時までも斬るまじと云はれしかば、土方岡田を突き放しざまに、小脇差を抽いて指し通せば、信雄すかさず切つて殺されたり。津川は、此騷ぎを聞きて、走り來りけるが、信雄に行き逢ひ、刀を取り延べて切りたりしに、廊下の長押に切り付けたるを、田傍より刺し殺しけり。淺井をば森討ち留めたり。是れよりして、秀吉と弓箭をとられけり。

◉平松金次郎始末の事

平松金次郎重之、甲州の溫井と同じく天瀧川を渡る。平松先達つて陸に上がり、船に殘れる從者溫井に無禮の事有て、忽ち切り殺しけり。扨平松に斯くといふ、間もなくてと云ひければ、無禮する者は吾も捨置かじとて色も變ぜず、人皆平松を誹りける處に、幾程なく長久手の軍に、平松と鳥井金次郎と先を爭うて槍を合はす。平松が相手は森武藏守長可の士、山田八右衛門とて、始め播州三木の城主、別所長治に仕へて名高き勇士なり。平松肥え太りて、

小男なりしかば、東照宮さぞ走り廻り不自由ならんとて、常に笑はせ給ひしに、其の日御前に進み出て、不行歩者今日槍を合せて候と立ちながら申して傍若無人の有樣なり。賞せられしかども猶不足に思ひけるに、前田利家の士、山田出羽其の時平一郎とて、秀次に仕へしが、秀次に申して一萬石の祿にて招かれけり。平松是れに約し京に趣く時、心易き朋友に暇乞して立去りけるを聞し召し、追々討手を出ださせ給ふ。大剛の平松なればとて、第一番に渡邊半藏、續いて河村善七郎、大久保與一郎、坂部治兵衛、段々に迫駈けゝる。坂部袋井にて逢ふ、平松は久能へ行く本坂越に、遠州可睡齋に「曹洞宗の禪寺」立ち寄ると物語す。坂部は兄三十郎に用の事有て、横須賀へ行くとて打連れたり。道の別れ際にて久しく逢はじと馬より下り、暇乞ひする時、坂部平松を一太刀斬たるに如何したりけん、切り外しければ、平松坂部が眉間を切る、坂部眩みけれども、さしもの者にて、落人あり、打ち留めよと呼ばはるを聞き、近所の郷民群り出づるにより、平松可睡齋へ入りたるを取り圍み、横須賀よりも馳せ集り寺を取り卷きけれども、平松は爰に居らずといふを、小僧を捕へて責め問ふにより、平松何方へも逃ぐる者にあらず、爰にて腹切らんとて立出で、坂部三十郎に向ひ、治兵衛は殊に親しく語りけれども、不便ながら身にかゝる火を拂ひて、是非なく切りたるといふ。三十郎聞いて、治兵衛疵淺しと答ふ、平松吾が斬る程にて助かるべきや、日比の交り故止は刺さゞりぬとといふて腹切る時三十郎介錯せんとすれば、平松治兵衛を吾手にかけ、今汝に首を

討たれんは心よからずとて、同心せざりしとなり。

又一説に、平松は度々口論の時後れ有り、殊に遠州新井の渡り舟にて、柏原新五郎、平松が從者を討つたるに、おめ〳〵として有りければ、人々嘲笑ふ。東照宮聞し召し、人は何ともいへ、平松が眼差剛の者なりと仰せられしが、果して長久手にて懸り兼ねたる處に、平松茜の羽織を着、十文字の槍を提げ進み出で、池田家の軍兵の眞中に槍を入れたりける。其後出仕の中にて諸士に向ひ、吾胎内より厚恩を請け、猥りに一命を捨てじと思ひしが、今は早や思ひ殘す事なし、誰にても出られよ、撫切にすべし、昔の金次郎となる思はれそ、殊の外荒者になりたりと、大言しけるに、一人も答ふるものなし。平松が勇名高く聞えて、先年天王寺勝曼の槍、貝殼塚の槍、備前八濱の槍をこそ言ひ傳ひたれ、平松が槍は近き頃稀れなり世の人賞しけり。秀次一萬石にて招かれしかば平松立退きけるを聞し召し小栗又市、渡邊半藏、河村善七郎、坂部治兵衛を追手に出でさせ給ひ、岡崎へ早飛脚にて本多作左衛門にも御下知有り、平松終に袋井の北なる可睡齋にて自害すともいへり。

◉水野勝成高名附行狀の事

長久手の軍に、水野忠重の嫡子勝成は、目を病みて冑を着ず。鉢卷したりけるを、父見て、汝が冑は尿壺にしたるかと罵られしかば、父ながら餘りの詞かな。眞先かけて首を取るか、吾が首を敵に取らるゝか、二つの中よと云ふまゝに、馬引き寄せ打ち乘り、もう鐙をあてゝ駈け出す。忠重彼れは如何にてと、太田重助といふ士をして、呼び歸されけれども、耳にも聞き入れず。又水野喜右衛門馳せ來り、引き留めんとするを、勝成はたと睨んで、壘の上の諫めは聞きも入るべし。只今大軍の中に駈け入り功名せん時止れとて、引き返す樣や有ると云ひ捨てゝ、秀次の將、白井備後守が陣に突いてかゝり、冑首を取りて馳せ歸る。此日の一番首なり。勝成あら者にて、人を物ともせず。忠重の心に忤ひ、虛無僧となりて、國々を廻りて武者修行す。後に忠重死して、東照宮勝成に三州苅屋を賜はり、日向守と稱して、大阪の時、大和口の先陣として大功ありし人なり。勝成十萬石を賜ひて後、愈士に下り身を卑しくして、すべて士に貴賤はなきものなり。主君となり從者となり、互に賴みあひてこそ、世はたつ習ひなれ。されば、大事の時は身を棄てゝ、忠義をなす事ぞかし。汝等我れをば親と思はれよ。我れ汝たちを子と思はんと、常に士に云はれけり。年老いて、鷹野に出る時、行步叶はず。蒲團に乘りて士に舁かれ、士番所にては蒲團と共に下に居て、年寄りての鷹狩をかしかるべし。鳥とらん爲にあらず、心ありての事なりと度々いひて打ち過ぎられけり或る時鷹狩の野にて、昔勝成に仕へし士を見かけ、いかに懷かしや、我が方にて祿三百石な

りしに立ち去りて、越前にて千石の祿と聞く、今爰に來られしは、如何にと問ふに彼の士、仰の通り祿は越前にて增し候へども、殿の下を勞り、懇に待遇し給ふなじみ、祿には換へ難く、暇乞うて歸り候ひぬと申せば、勝成大に悅び、折に觸れ思ひ出せしなりとて、卽日に祿を增し與へられけり。その後勝成隱居して又鷹狩の時、彼の士の家の門閉ぢたるを見て、如何にと問はるゝに、美作守の心に背く事有りて、暇を乞ひ走りぬと答へしかば、彼の者は越前の祿千石を捨てゝ、小祿の我が家を慕ひて歸りし者なるに、いかに作州は思へるにや。斯く云ふ勝成は、若き時心得過ちて、武藏の金川根笹流の弟子となり、尺八一本携へて、虛無僧となりて日本國を廻り、或る時は堂塔に夜を明かし、或る時は野にも山にも日を暮し、樣々に艱難に遭ひ、人にも誹られしが、一言虛妄を云ふ事なく、不仁の振舞ひせざりし故にや、今福山十萬石を賜りぬ。然れども下の情を知る事は、これ虛無僧たりし故なり。返すゞ〳〵も惜しむべき士を失ひぬるよ。美作は下の事は知られぬぞかし。すべて善き士は、主君又は頭の下知をも無理なる事は心服せず。たりと少しの過ちありとも、能き士は二度も三度も知らぬ體して、猶已み難くは、傍輩に諫めさせんものを、美作の政事歎かしきぞとて泣かれけるとかや。

◎初鹿傳右衞門が事

勝賴亡びて後、武田家の士多く、東照宮に仕へ奉る、前に領したる祿知を書きて、奉れと仰せ出されけるに、初鹿傳右衞門は、加藤駿河守が二男にて、兄の源二郎は川中島にて討死しけり。傳右衞門其祿を受け繼ぎたりし故、祿地を書きて出しけるが、駿河守が二百五十貫の地をも合せて書き記せり。駿河守が嫡子丹波、三男を彌平次と云ふ。兄弟共に、傳右衞門は源五郎が祿をこそ申すべけれ。駿河守が祿を合する事のあるべきや、と言ふこと聞えて、本領四百貫のみ下し賜りぬ。傳右衞門人は皆親兄弟の祿地を記し出して、其儘賜りたるに吾れ獨然らずとて、御朱印に墨を塗り、詔はざる故にかゝる有樣なりと云ふを岩間大藏左衞門訴と申して、無禮なりと仰せありて祿を召し放さる。翌年長久手にて、傳右衞門密に御旗本に來り、眞先駈け、三宅彌次兵衞と爭ひて首を取る。傳右衞門は內藤四郎左衞門が傍に參りて、申し給はらんやと云ふを、其間十間ばかりにて御覽ぜられ、傳右衞門連れ來れと仰せられしかと御前に跪く。いかに汝が無禮なれども、今日軍の先駈けしたれば赦すぞと御詞に傳右衞門涙を流しける時、三宅先に臣を一番高名と、御詞をかけさせ給へと、傳右衞門は猶進みて、首を取り候ふ、申しければ、三宅が實なる志を感じさせ給ひけり。

◎秀吉東照宮の御陣へ戰書を贈られし事

東照宮の小牧の陣を、秀吉二重湟の城の櫓に上り見やりて、高山右近太夫幸任を呼んで、小

牧に書翰を送り、一戰せんと思ふなり、十三萬の軍兵陣を整へて押し出し、後に柵の木結びて、引き退かざる手立せんは如何に、と云はれしかば、高山、是れは思し召し止らせ給へ、小牧よりの返書、必ず怒らせ給はん事を申し來るべしといへども、秀吉增田長盛に書翰を書かせ、長岡忠興に敵陣の木戸なる道に立てよと下知せらる。高山色を變じ仰なりとも行くなとぞ制しける。秀吉、忠興は弓箭に烈しき所へは思ひも寄らじ、剛の者を使にせんと言はれしかば、忠興高山を睨みて、つと立て馬に乘り、竹に書翰を挾み乘り行きて村だつたる松原の小塚の上に、押し立て歸るを見て、秀吉悅ばる。やゝ有て、小牧の陣より月毛の馬に乘り紅の母衣掛けたる武者書翰を取りて歸る。暫くありて、金の枇杷へらの指物さし、鹿毛なる馬に乘りたる武者、書翰を竹に挾み元の所に立てけり。あれ取り來れと言はれしかば、忠興又馬に乘り馳せ行きて取り歸るを、秀吉披きて讀まるゝに、東照宮の返書にはなく、渡邊半藏重綱、水野太郎作正重が書簡にて、其詞に、後に柵結ひて、一足も引くまじきと思ひ定めて、軍あらん事兎も角もの事に候、三河者下部に至るまで一足も逃ぐると申す事露ばかりも存せず候、とぞ書きたりけり。秀吉讀みも終らず怒られければ高山されば斯く候はんとて申したる事よ、と威たけ高になりて申す。秀吉冷笑ひ馬牽き出させ、ひたと乘り、僅四五騎ばかりにて、松原の小塚に上り、臀を打ち叩き、敵の大將是れ喰へと、大音に呼はるを、小牧より唐冠の冑に、孔雀の尾の羽織着たるは秀吉よ。あますなとて鐵砲を打ちかくる。秀吉天

下の大將軍には、矢の中る物かはと言ひて、しづ〳〵と歸られけり。

◎東照宮蟹江御出陣の事

尾州蟹江に瀧川一益中入すと告げ來る時、祐筆尊通といふ者、御出馬可被成者也と書きけるを、東照宮この可の字を削れ。今日に於いては一字も大切なり。大敵を前に置き、可出馬とはおくれたり。出馬するとは、其時をぬかさぬなりと仰せられけり。

◎東照宮の御軍略に依つて蟹江城降參の事

東照宮長久手の軍に勝たせ給ひ、勢州蟹江の城、前田與十郎を御攻めあらんとて、打ち向はせ給ふ所に、加勢多く馳せ入りけるを御覽じて敵いかほども城中へ入れよと仰せられしを、酒井左衛門尉忠次承りて、何とて押し留め給はぬぞやと申す。東照宮如何思ふぞと御尋ねありしかば、忠次城は堅固なり、多勢籠りなば爭てか攻め落すべき、いかなる御心か候ふ、と申すを聞召し、大將謀を言ふやうやあると仰せられけるが、其後援兵の乘り來りける船を追ひ拂はせ粮道を絶せ給へば、粮忽ち乏しくなりて、城を渡し降參しけり。東照宮四十二歲の御時なりとかや。

◎九鬼嘉隆蟹江の港出船の事

蟹江にて井伊直政兵を進む。秀吉の舟手大將九鬼大隅守嘉隆、日本丸といふ大船に乘り、蟹江の港に漕ぎ入れて打ち上り、堤を隔てゝ戰はんとせしが、引き退きて船に乘るところに、入江の港に、東照宮の兵船角新道といへるを横樣にして、左右に亂杭を打ち、眞中に取り圍まんとす。直政は追ひかくる九鬼が者共多く討たれ、水主楫取驚き騷ぎて、船を出し得ず。かゝる處に九鬼が士村田七兵衛鐵砲に藥を込め、間宮造酒丞が舳先にて下知しけるに大音上げて靜に相だめにするを、兩軍なりを靜めて見物す。其中に九鬼が者共、ひた〳〵と船に乘り組みたるは、村田が躬を捨てゝ鎭めん爲の謀ゆゑなり。斯くて村田思ふ矢坪に中りて、間宮倒れしかば、九鬼が者共力を得、鐵砲を打ちかけ、船を乘り浮めて港を出にけり。

◉中村一氏紀州の一揆を追ひ拂はれし事

秀吉小牧に陣を出す時、紀州の根來雜賀の一揆を押へんため、中村式部少輔一氏を岸和田の城に置かれけり。紀州の一揆秀吉大阪を打ち立つと聞きて、二萬三千ばかり二手に分れ、一手は東の山際より堺に向ひ、一手は岸和田に押し寄する。はやり雄の若者ども、二騎三騎城を出で、寄手に向ひしかば、士大將早川助右衛門、川毛惣左衛門引き歸れと使をやるを、一氏聞て、かゝる時進んで行重りたる武者を引かんとすれば敗北するものよ。いざ打ち出でんとて鐵蓋ケ峰と名付けし冑の緒を締め、城を乘り出す先に進んだる者共、菅笠の馬印を振り

返り見て、すはや殿こそ出で給へ、軍は勝ちたるよ、と言ふ程こそあれ、一萬餘の紀州勢に、面も振らず切り掛り打破りて、七筋に分れて逃ぐるを追ふ　一氏は三百ばかりにて、堂ノ池といふ所に控へて、先陣の歸るを待つ處に、堺海道に馬煙黑う見ゆ。是れは堺に向ひたる敵の返し來れるなり。荒手の大軍にかけ合ひて、戰はん事思ひもよらず。疾く城に楯籠らんと口々にいへば、一氏いや〳〵退くならば、味方氣挫けて打ち負けなん。一寸も退く時は先陣を捨て殺し、城をも攻落さるべし。一揆は何百萬もあれ、先陣をだに切り崩すならば二陣を忽ち敗北すべし。我れに任せよとて、敵の一同にかゝり難き地の理を料り、堂ノ池を前にして、大敵を待たれけり。一氏馬をば悉く城へ返し候へ。馬を引き付け置く時は引き退きたき心の起るぞとて、將儿に腰懸け、旗本三百ばかりの勢槍を膝の上に置きて折敷たり。新藤勘左衛門强弓矢繼早の手利なるが散々に射る。射白まされて、手負死人倒れ重りて躊躇ふ時一氏弓の者の羽壺を勘左衛門に渡せと下知せられしかば、愈指し詰め引き詰め射ける。矢にあだ矢なかりけり。一氏麾を取り、蒐れと云うて立ち上る。黑田如水は大阪にありしが、岸和田に敵押し寄すると聞き、子の長政十四歲になりしが、岸和田にあればいざ救はんとて、七百ばかりにて敵の後にかけ來るを一氏見て、愈進み喚き叫んて切つてかゝり、追つ立て八百餘の首を取りたり。如水は長政いかにと思ふ處に、黃羅紗の羽織着て、鹿毛なる馬に乘り、今朝討ち取りし首を、鞍の四方手に付けて馳せ巡るを見て、悅ばるゝ事大方ならず。秀吉一

氏に感狀賜ひてけり。一氏は豐臣家諸將の中にも勝れし勇將なれば、加藤嘉明も羨み慕ひて吾が子の明成を式部少輔になしけるとぞ。

◉竹中重治の事

竹中半兵衛重治は、美濃の菩提の城主なり。後に秀吉の軍奉行たり。謀略ある人なれども、打ち見たる處は婦人の如し。軍に臨む時も猛威なる事なし。馬の皮にて包める甲を着、木綿の羽織一ノ谷と名付けたる冑の緒をしめ、靜り返りて居けり。重治向ふ度ごとに、士卒戰はずして、既に勝ちたりと勇み合へり。重治ある時軍物語せしに、子の左京いまだ幼かりしが、座を立ちければ、重治軍は國の大事なり、何方に行くと問ふ。厠に行くと答ふ。重治爰に溺をたるゝとも、軍物語の大事の席を立つ事やあると怒られけり。

◉戰國の士功を讓る事

稻葉治左衛門は、美濃齋藤家の士、戰場にて必ず眞先に獨進み出で、芒の如くなる所に居ける故、世の人是れを芒の治左衛門と言ひけり。澤喜藏は美濃飛驒に隱れなく、若き頃より功名あり、芋ガ島の槍澤一番なりと言ふを、吾れにはあらず稻葉なりと云ひて、互に歸りて決せず、澤は早く進みたれども、稻葉がほろの手をしむる隙に先に乘り込んだり。實は一番

稻葉なりといふ。人皆是れを賞しけり。有吉武藏が足輕鐵砲に槍を持ち添へて鐵砲を打ち、其上に一番槍を合せたるが、吾れ一番にあらず、園部儀太夫がほろの手を締るを見て駈け出でる、園部が一番なり、と讓りしと同事にて、戰國にかゝる士は稀なる事にこそ。

◉羽柴勝雅敵を免す事

羽柴下總守勝雅の許に二藏三藏といふ士あり。いづれの城にての事にやありし、下總守城より出て働き引き取りたるを敵付け來る。二藏三藏門を固めて揚簀戸を下して敵をたてこめたり。勝雅下知して門を明け敵二人を出して討ち取らず。近藤石見守加勢たりしが、其子細を問ふ。たてこめられたるは、死地に入りたる敵なり。是れを討たば城兵餘多死傷すべし。打ちとめたればとて、軍の勝敗にあづからずと答ふ。石見守武功の人なりし故大に感じたり。

◉利家鳥越城を攻めらるゝ事

天正十三年四月八日、前田利家金澤を打り出て、鳥越の城へ押し寄せらる。鳥越の城は、金澤より元と兵を入れ置きたるが、去年末森の時、城を明け退きて成政の軍兵入り替り守りければ、利家是れを憤りて、攻め落さんとの志なり。城兵も久瀬但馬守其外、選みたる者共五百計り門を開いて突いて出て、利家の先陣を追つ立つる。利家は傍なる山の尾崎に陣して、馬

を立てられしに、味方敗北するを見て、山崎少兵衛は如何したるや、はや返すべき鹽合ひなるに、と言ひも終らぬに、白き羽織にて進み出たる者の候ふといへば、利家山崎出たるよ、早味方勝つたるぞ、と言はれけり。旗本の早雄の者ども、駈け出んとするを敵の勢競ひ懸りて、足の踏止め難き時なり、今少し待ち候へと下知せらる。德山五兵衛只今槍を合はせたると見えたり。地煙立ち候ふと言ひけり。然るに近邊の越中の兵、城々より助け來て敵の陣は黑みけれども、山崎が與力鷲津九藏と名乘り槍を打ち入れたり。早かゝられ候へ。左なくば九藏危しといへども、山崎靜まれと云ふ詞の中に、九藏倒れたるを見て、山崎進み出で、槍を打ち入れ押し崩して、城際まで追ひ打ちにしたりけり。城兵門を鎖し固めければ、利家强ひて攻めずして引き返されぬ。此軍の前利家の近習の者、九里少藏勘氣を蒙り居たるが、成政馬廻りの將、杉江彦四郎と組み打ちして谷へ落ち組みしかば、杉江刀に手をかけたる處を、下より少藏小脇差にて、具足の鎖の外れを刺し通し、刎ね返しけれども、氣疲れて首を取ることを得ざりしに、片山内膳が從卒來りて少藏を押退け、相討と云ひて首を取りたり。利家細やかに事を糺明して、少藏が功名に定り、勘氣を宥し、鞍置馬を與へられけり。

◉東照宮伊豆にて北條父子に御對面の事

東照宮の御女を北條氏直迎へて、兩國和平なれども、御對面なかりしかば、天正十四年三月

使を以て拜謁して、見害國境の城々守りの兵を罷め候ふべし黃瀨川を渡り、伊豆に至るべきかと仰せ遣はされしに、酒井忠次黃瀨川を越え氏政父子に御對面候ひなば、北條家の旗下に屬し候ふと同じ事にて候。今德川家は五州の御主なり。爭か北條家の旗下に屬すべき、德川家の瑕なりと諫め申す。東照宮されば其位爭ひ無益の事なり。過し比武田上杉和平して、犀川を隔て對面の時、馬より早く下りたる方、旗下に似たりとて忽ち事破れ、其場より鐵砲を打ち合ひ、諸卒血に染みて相引きにしたりき。其時信玄十七歳、謙信十八歳の時なり。夫れより和平は、京をさしてのぼらんを、信長も、吾れも爭か支へ得べき。其故に兩方に使を以て、道理至極せりと云はせしかば、兩將十四年の間和平せざりき。其中に信長は近江和泉を打ち從へ、吾れも援を出して信長を後にして根を深くするの謀をせしが、信玄死して、勝頼父に優るべきと威をふるひ、暴逆して滅亡したり。信長又勝頼に勝りて驕長じ、樣々よからぬ事のみありて終に弑せられぬ。斯くの如き大將は、滅びて終をよくせざる事理なり。夫れを見て戒めとせず、位爭ひをするは、惡しき事なり。氏政吾れと二心なく言ひ交さんに、兩旗にて東國を打ち平げなん。其時に及びて、州あまた領する者上座に在らん。位爭ひ更に益なき事なりとて、伊豆の三島にて、氏政氏直に御對面あり。

◉謙信信玄二將を批評の事

信玄死なれし事を深く隠したるに、北條氏政泄れ聞きて、謙信の許に告げやられけり。謙信は春日山にて、湯漬飯を食せられしが、是れを聞き、打ち驚きて、箸を捨て飯を吐き出し、英雄とは此人なり、關東の弓箭柱を失ひたりとて惜しまれけり。信玄は將略の謙信に及ばざる故に、高野の成慶院にて、大威德明王の法を修し、謙信を呪詛せられし、其文今に高野山に傳はりけると云ふ。

信玄勇才は人に超えたりと稱すべし。父を逐ひ子を殺し、降將を殺して其子を妾とし、其餘不仁怨毒算へ盡すべからず。姑く此二事を併せ見ても、二將の賢否論を竣たずして明かなり。又甲陽軍鑑に記せし處、附會詐僞强ひて拵て設けて、信玄の惡を隱し、他を蔑にせし事、是れ又算へ盡すべからず。一事を擧げて論ずるに、北條家と戰ふごとに、利ありと見えたれども、北條五代記に記せるは、信玄川中島に陣せしに、氏康夜討して甲州の兵敗北し、八幡と書きたる旗を捨てゝ、甲州へ逃げ入りたりと見えたり。甲陽軍鑑に是れを忌みて、津浪に旗を取られしと記したり。たとへ北條五代記說誤りたりと云ふとて、津浪に旗を取られしは、陣所の地理にくらきにあらずや。

◉仙石權兵衛九州に間者の事

秀吉島津を討たんと思ふ事年久し。天正十三年仙石權兵衛を商人の體にして九州に間者とし

山々浦々の地理悉く繪に書きて起臥に見え兵を分ち攻め入るべき道々を計られけり。

◉島津家久島原合戰の事

附 惠藤某が事

島津中務大輔家久肥前に攻め入り、島原の城を攻め落したる所に、龍造寺隆信大軍にて押し寄せたり。家久僅に三千ばかりなりしを、幾重ともなく取り圍む。家久是れを物ともせず。明日の合戰吾れ先陣すべし。貝を相圖に切り懸かるべしと定めて、夜の明くるを待つ。朝霧深く物の色も分たず。家久床机に倚りて晴れ間を待ち、やゝ朝日出でゝ晴れ渡りしに、子の又七郎豐久十五歲になりけるを近付け、天晴武者振よ。只上帶の結び、斯くするものぞとて結び直し、脇差を抽いて其端を切て後、よく聞け、若し軍に打ち勝つて打死せずば此上帶我解くべし。今日の軍に屍を戰場にさらさんに、島津が家に生れたる者の思ひ切つたりと敵も知り、我れも黃泉に悅ばん物をと云ひもあへず、貝吹き立てさせ、眞先に隆信の旗本へ切つてかゝる。島津家の弓箭は、先駈の兵は矢一筋持たせ、射放ちて弓を捨て、長き刀を抽いて切つてかゝる。今日も又然したりけり。隆信の旗本亂れ立ち、敗北すれば、隆信汚し返せと下知し、遂に踏み止り討死せられけり。家久勝つて誇らず、人數を纏め陣を整へける所に、龍造寺の臣惠藤某、首一つ血に染みたる刀を持ち添へ、大將は何處におはしまし候ふぞ。功

名の印の候ふと云ひて、家久に近付き寄り、首を投げ捨て、馬の上なる家久を一太刀斬りたりしに、家久心疾く馬より飛び下りたれば、左の草摺を切つて、餘る刀膝に當りけり。惠藤を中に取り込めて討たむとすれば、家久あたら者を討つなと下知しければ、生捕らんとすれども、素より今日を最期と思ひ定め、切て廻りし程に、終に討たれけり、惠藤とのみ云ひて名をば名乘らず。家久惠藤が首を膝の上に置き、並びなき剛の者、義勇の士とは、是れをこそ言ふべけれ。生捕りて對面し、龍造寺に送り返さんと思ひしに、思ひ切つたる戰死せられしかば、力及ばずとて、近所の僧を請じ、惠藤が弔ひの事念比に沙汰し、其有樣詳かに記して、其僧に賴み故郷に遣られけり。偖豐久を呼びて、今朝の約の如く、上帶を解きたりしとかや。家久は島津家の士大將なり。豐久後又中務と稱したり。關ヶ原に於いて、義弘の身に代り、討死ありしは此人なり。

◉立花道雪行狀の事

立花道雪は始め戸次といふ。立花の跡を嗣ぎし故、立花と稱す。始めの名は鑑連、男子なく高橋紹運の子を養ひて嗣とす。

若かりし時雷に震たれ、足痿え歩行心に任せず。常に手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大

友家衰へけれども、道雪心を變せず。武勇逞しき人にて、士卒を見る事子を愛するが如し。戰ひに臨む時は、二尺七寸ありける刀と、種ヶ島の鐵砲を手輿に入れ、三尺ばかりの棒に腕貫をして手に提げ乘られ、長き刀挿したる若き士、百餘人手輿の左右に引き具し、軍始まれば手輿を此士に舁かせ、棒を取りて手輿を叩き、えいとうと聲を揚げ、此輿を敵の眞中にかけ入れよとて、拍子取り遲き時は、輿の前後を叩かれけるに、敵に逃げたるよりも恥として、面もふらず舁き入れければ、手輿の左右の士、三尺餘りの刀を抽き連れて一文字に切つてかかりけるに、先陣の者ども、すはや例の音頭よと云ひもあへず、我れ先にと競ひかゝり、如何なる堅陣をも切り崩さずと云ふ事なし。若し先陣追つ立てらるゝ時は、道雪大音上げて、我れを敵の中へ舁き入れよ。命惜しくば其後逃げよと、眼を見出し下知せられし程に、盛り返して勝たざる事なし。斯れば道雪の士は、一日に幾度槍を合せたりと云ふ者多し。又道雪常に士に弱き者は無きものなり。若し弱き者あらば、其人の惡しきにはあらで、其大將の勵まさゞるの罪なり。吾が士は云ふにや及ぶ。下部に至りても、度々功名なきにはあらずゝ他の家にて後れたる士あらば、吾が方に來り仕へよ。取りかへて逸物にせん。吾が士の四月朔日三左兵衛は、若き時初めて後れし事のありしに、いつの頃よりか、血臭き事にあひて次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世に云はるゝぞかしとて、遇武功なき士のあれば、明き塞ぎのあるは武功の事よ。弱からざるは我れ見定めたり。明日にも軍に出んに、人にそゝろ

がされ、必ず扳け懸けして討死し給ふな。夫れは不忠なり。身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各々を打ち連れたればこそ、斯く年老いたる身の敵の眞中に有て、ひるみたる色を見せざるぞと、いと懇に睦しく云ひて、酒酌み交し、其比流行りける武具取り出して與へられければ、是れに勵まされて重ねて軍のあらん時、必ず人に後れじと勇みて、聊も武者振の能く見ゆれば呼び出してあれ人々見候へ。此道雪が見し所に違ふべきにあらずとて、勝れたる剛の者の名呼びて、賴み候ふほどに能く引き廻してよといひ、又人々の心を合せらるゝ、此道雪は天の冥加に叶ひたる事よと勇め立て、若し若き士の席上にて心得違ひたる事のある時は、客の前などに呼び出し打ち笑ひ、道雪が士ふつゝかにこそあれ。されども軍に臨みて火花を散らし候。槍は此人々こそ能くすれとて、槍追つ取りたる眞似して譽められしかば、人々感じ涙を流し、此人の爲に命を捨てんと勵みけり。

◉道雪仁愛深かりし事

道雪の側に仕ふる女に、心を通はす者ありけるを、知らぬ體にてぞありける。是れを知る者ありて、ある夜物語の時申しけるは、東國の大將に、誰れとは知らず候。寵愛の女に、密に情を通はす者の候ひしを誅せられきと、あらぬ事を態と云ひて、道雪の答を試みけり。道雪打ち笑ひ、若き者の色に迷ひたるは必ずしも誅せずともありなん。人の上に居て、君と仰が

れんには、假初めの事に人を殺せば、人背く基よ。國の大法を犯したるには異なりとぞ語られける。彼の者傳へ聞きて心に慙ぢ、又道雪の仁愛に感ず。其後薩摩の軍、鎧ヶ嶽の城を攻むる時、道雪城を出で戰ひしに、大軍押し懸り危かりしに、彼の者大音上げ、亂れける味方を恥しめて、散々に戰ひける。其隙に道雪城近く引き取りたるに、敵猶嚴しく進み來て、城門を閉てあへぬばかりなりければ、彼の者又取つて返し、武士の討死すべき所は爰にあり。各是れにて討死せば城をば敵に奪はれじ、返せや人々と云ふまゝに、槍を横たへ折敷きければ、返し合する者三人あり。面もふらず戰ひて討死しける間に、城門を閉ぢたりける。

◉稻葉一徹罪人を免さるゝ事

稻葉伊豫守一徹下人罪ありて死罪に行ふ時、聲を上げて泣く。命惜しきやと云へば、彼の罪人、いや〳〵命を惜しみて泣くにあらず。命あらば一太刀恨むべきに、斯く成り果つる事の口惜しくて泣くなりと云ふを、人々憎き奴哉。疾く〳〵斬り棄てよとひしめくを、伊豫守聞きて、それ助けよとて繩を解かせ、いかにもして我れに一太刀打てよとて追ひ放ちければ、忝き由再三いひて立ち去りけり。其後年經て、一徹病重くなりし時、彼の下人來て、力を盡せしに、本意を遂げずとて又泣く。頓て一徹死して葬の後、彼の下人一徹の墓に詣でゝ、吾れ今日まで長らへたるは、君を一太刀恨み申すべしと申せしが故なり。君隱れさせ給ひし

に、生きて居たらむには、刑死に及んで泣きしは、命惜しきに泣きたるなりと、人の申さん事恥かしく候ふとて、腹掻き切つて死しけり。是れを以て見るに戰國の時、上の人下の人、其情の太平無爲の化に浴したる時の人に異なるを思ひ知るべきなり。

◉志賀親次山海ケ峯に兵を伏する事

島津義久大友を攻め、所々に亂れ入る。志賀太郎親次獨義久に降らず。義久松の尾の城に在りて、秀吉大軍にて九州に渡らると聞て、薩州に引き退く。親次大きに悅び、嶮岨の地に兵を伏せて、打ち破るべしとて、鐵砲の手利十人選み出し、山海ケ嶺の林に待たせけり。然る處に、首藤五郎太夫、堀八郎といふ者、此度の選に殘りけるを、口惜しき事に思ひ、密に道に隱れて、薩摩武者二騎打ち落してけり。扨は伏兵あるぞといふ程こそあれ。大軍林に入り、草を分けてさがしければ、二十人の者ども力なく、藥を惜しまず散々に打ちかけ、追ひ來る者共打ち殺し分引き退く。親次大息ついて、義久をば山海ケ嶺は越させまじき物を、天の祐に逢ひたる義久なりと云はれけり。

◉高畑三河功名の事

豐後國合志常陸介を大友義鎭攻むる時、佐伯紀伊守（一說に彈正少弼）敎惟大將たり。佐伯が

士大將高畑三河一日に十三度の功名あり。其後人問ひて、僅に槍刀一兩度迫り合ひても、大に疲れ息切れて小兒にも負くべきに、一日十三度の功名は、たとへ志は飽くまで剛なりとも、力も息ち續きぬるこそ、不審しけれと云ふ。高畑聞きて打ち笑ひ、別の子細もなき事なり。我れ戰場に打ち臨みて、勿論の事とは云ひながら、死生存亡の間に於て、少しの思案を費すべき事なし。さる故に人は騷がしくても我れは靜なり。大方は槍を合せ、太刀を打ち違へざる巳前に、力を出し氣を張るならん。是れに依りて精神草臥れ疲れたるならん。我れ敵に逢ふ時は我が首を敵に取らするか敵の首を我れ取るか此二つの中天命にありと思ひて、初めは緩きに似たれども、打ち合ふ時一決して、一槍の中に勝負分るゝ故に、疲るゝ事なく候ふなり。入らざる處にて氣を苦しめざる故、幾度事に逢ひても、胸中安閑なりと答へけるとぞ。

◉森迫親正討死辭世の事

同じ城攻めに、佐伯に屬したる森迫（一本關に作る）三十郎親正首を取り、又戰ひて討死する。時に十七歲なり。常陸介が從兵山本十郎といふ者其首を取る。小鍬形三本菖蒲の冑なり。短冊を付けたり。

命より名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなければ

常陸介感じて、其首死屍を高畑が許に送り返しけり。親正は豐後大野郡三重郷の人なり。

◉薩摩勢根白の砦を攻むる事

天正十五年二月、秀吉島津を討たるゝ時、大和大納言秀長、近江中納言秀次八萬餘、島津が豐後府内より、薩摩へ引き退く後を追うて亂れ入り、高城賤部の城を取り圍み、附城五十一ケ所築きたり。中にも耳川を越えて、根白の砦には、宮部善祥坊繼潤、木下平太夫貞基、龜井新十郎廣政、鹽屋隱岐守光成、福原右馬助直高一萬餘にて守りけり。是れは島津が後卷を防がん爲なり。頃は四月十七日の朝、島津使を根白にたて、高城を渡すべし。士卒を助け給はり候へ、と言ひ送りければ、宮部五丁隔てたる秀次へ、此旨申して後、兎角の返答を申さんとて、使を返して後斯く欺きて怠らせ、思ひも寄らぬ所へ寄すべき謀なり。其用意せよとて、人夫千人俄に山々の竹木を伐らせ、陣の前に深さ二間、廣さ三間ばかりのから堀を構へ、柵木を結ひて、我れも〳〵と物具して待つ所に、物聞に出したる者ども、走り歸り、敵押し寄せ候ふと言ひも果てぬに、義弘一萬六千餘の兵を率ゐ、鬨を揚げて攻め寄せたり。宮部木戸口に進み出で、一番槍と名乘つて相戰ふ。田中九介、其子彦六、國友半右衛門三村三郎右衛門を始め、大剛の兵ども、先を爭ひて切つて出で相戰ふ。義弘も義久の子にて、素より聞ゆる勇將なり。薙刀を提げ眞先かけて、只今此城踏み破れ、者共と呼はり、多勢堀を越え、冑の鍬を傾け、蟻の如く柵の木に付きて引き破らんとする時、兼て巧みたれば、ひか

への網を斷ちて、柵を堀の中へ倒せしかば、薩摩武者討たるゝ者、八百人に及べり。義弘愈怒り進んで屍を蹈み越えて、内の柵に攻め寄り、透間もなく戰ひけるが、内の柵をも打ち破り、十八日の朝三の丸を攻め取つたり。宮部を始め愈死地に入りたれば、爰を限りと防ぎ戰ふ。斯りしかば、秀長三萬ばかりにて耳川に打ち向ひ、根白の方を見渡せば、薩摩の軍兵雲の如く取り卷きて、鐵砲の音鬨の聲、矢叫び相交り天地も動くばかりなり。川を渡らんと進まれけるに、尾藤左衛門尉知宣秀長の馬の轡を取て、義弘が鋒武田四郎が長篠の掛り口に似たり。關白秀吉も叶はせ給ふべからずと、强ひて留めければ、既に川へ打ち入れたる馬を控へて進み得ず。藤堂高虎は手勢を率ゐ川を流し、搦手より根白に駈け入り、自ら槍おつ取り、敵數多突き伏せて、宮部に力を合せけり。黑田孝隆、同長政も手の者を引き分け進み行く道より、村上彦右衛門と云ふ剛の者を遣して、唯今秀長六萬の兵にて、後卷せられ候ふと呼はらせければ、宮部を始め大に勇み悅べり。長政の士栗山、後藤、川を渉り、義弘の陣に切つてかゝる。秀長の士大將羽根田長門守も千ばかりの兵にて、黑田父子に劣らじと、槍を打ち入れ攻め戰ふ。小早川隆景も三千ばかりにて耳川に來る。秀長今敵陣にかゝるべきと存ずれども、人々同心せられず。如何すべきと問はるれども、隆景冷笑ひて物を云はず。かかる所に、井上伯耆就遠、浦兵部宗勝、古き背破の物具着て進み出で島津は今日の客人なり。訪ひ來るに出で迎はずば、弓箭の禮儀に違ふべし。軍評定と申す事や候ふと、秀長を嘲り

けれども、進む氣色のなかりければ、隆景馬を打ち入れて川を渡り、敵の後陣を取り切らんと進まれければ、是れより薩摩の軍亂れて敗北しければ、義弘の從子三郎忠親踏み止りて討死しけり。黑田小早川使を秀長の陣へ遣して、味方は八萬に餘れり。鐵砲三千ばかり、左右の嶺を取り切り打ち立つる程ならば、義弘を打ち取らん事、掌の中にありと申されけれども、知宣堅く留めて追はざりしかば、義弘敗軍の士卒を集め所々に火をかけ引き取たり。後れたる士卒五十餘人、戰ひ疲れたるを生捕りて引き來る。助けて歸さん、如何にと云へば是れ見られよ。生きて又歸らじと紙に書きて、髻に結ひ付けて候ふぞ。疾く首を刎ねられ候へとて、皆殺されにけり。薩摩の人の勇氣こそゆゝしけれ。秀吉宮部には、日本無双といふ感狀を與へ、尾藤は領國讃州を召し放されけるとかや。

◉巖石の城合戰坂小坂先登の事

秀吉島津を伐たるゝ時、蒲生氏郷、前田利長、巖石の城を攻めらるゝに、氏郷の先陣蒲生源左衛門、此頃は坂小坂と云ひけるが、眞先に進んで、假名にていちばんと、墨黑に書いたる白き吹貫を、門の眞中に押し立て、喚き叫んで相戰ふ。雨の降る如く鐵砲を打ち出せば、吹貫は蕉蕉の秋風に破れたるが如し。大音上げて、一足も引くな、者共と下知し、面もふらず攻め入りけるを、後陣より、是れぞ聞ゆる蒲生が內の士大將、小坂といへる大剛の者よ、と

口々にぞ譽めたりける。寺島美濃守、比頃は半左衛門といひけるが、是れは黑き吹貫押し立て坂に續きたり。利長の士松原久兵衛を始めとして、先を爭ひ攻め入り、終に城を攻め落して、首四百餘打ち取りたり。秀吉氏郷に感狀を與へられ、小坂に金錢十匹羽織を賜りぬ。

一說に、小坂を一番と記せり。秀吉坂を賞して、刀を與へられけるに、坂申しけるは、一番の賞にて候へば、粟田其一人なり。粟田は黑き吹貫にて候ひき。坂が吹貫白くて、目に立ち申したるなるべしと讓りければ、秀吉愈大に感じ、刀を粟田に與へらるとも云へり。

◉野矢甚右衛門功名の事

野矢甚右衛門は、敵五人討ち取り首五つ提げて氏郷の前に來る。氏郷容易くも首多く取りたるかな。如何してと問はるゝに、敵の太刀先左の腕に當ると存じ候ふ時射出せば、中らぬ矢はなき物なりとぞ申しける。

◉秋月種長降參の事

秀吉島津を伐たるゝ時、秋月種長小熊の城を出で、秀吉の陣に至り降參しければ、秀吉對面、降參の禮を受けて、後更に心おく事なし。家に傳はりたる楢柴の茶入とて、名高き物あると

ごそ聞け。あれは一目見ばやと問はれしに、種長速に取り來り候ふべしと云ふ。秀吉さらば使を以て取り寄せよとて、秋月の從者を返して、彼の茶入を取り來る。秀吉見て、聞きしに優れる物なり。家の寶たれども、我れに得させてんやと、懇に云はれしかば、種長既に兜を脱いで參り候ふ上は、何條惜しむべきやうの候ふべきと申す。秀吉殊に悦ばれ久しく我が陣所に在て、軍兵ども怪しみ危ぶむべきよ。疾く歸れ。我れを防ぎしは弓箭取る身のならひなり。降參の上は吾が恨み露も殘らず、領地本の如くなるべしと云はれしかば、種長悦びて馳せ歸る。種長が士卒、若し秀吉種長を害せらるゝならば、秀吉の陣に駈け入り、切死にせんと思ひ定めて居たりけるに歸りて委しく秀吉の詞、茶入を乞はれし有樣を語りければ、皆思ひも寄らぬ事よと云ひあへり。かくと聞き傳へて、九州の敵多く戰はずして降參せり。

◉黒田家岐井谷合戰の事

附小川傳右衛門野村太郎兵衛岐井友房を切る事

秀吉、黒田勘解由孝隆に豊前國を與へられしに、一揆處々に起る。中にも岐井谷友房はもと下野國宇都宮彌三郎友綱が次男、鎌倉の比より地を領したる子孫なり。毛利壹岐守勝信に誘はれ地士をかり催し民屋に放火す。黒田父子は馬ノ丘といふ城にありけるを城下に押し寄する。長政其時十六歳、岐井を討つべきと勇まれけれども、孝隆同心せられず。長政其頃は

吉兵衛と云ひけるが、若士ども引き具し切つて出れば、一揆ども一支もせず、敗北するを追つ駈けたり。岐井は山中の嶮路にそびき入れ、多くの大石の蔭に逃げ隱れたり。大野小辨といふ若武者、眞先に進みたるを、一揆起り合せ、七八人取り卷きて馬より突き落しけり。後藤又兵衛、小河傳右衛門、久野四兵衛、馬の首を引き返し敗北しけれども、長政の馬廻りは眞丸に成つて一揆勝に乘り、押し詰めけれども、槍を合はす一揆は木蔭谷蔭より五人十人駈け出で、狩場の鹿を射るごとく、竹の鏃の矢にて雨の降る樣に射たりけり。長政馬より下立ち、討死すべき色なりしを、近習の者共馬に搔き乘せ退きければ、一揆頻に追つ駈けゝり。長政の馬矢に中りしかば、爰にて自害せんと言はれしを、菅六之介政利、己が馬に召され候へと云へども聞き入れず。早や上帶を解かんとせられけるを、三宅三太夫「後に若狹」走り寄り、大將の自害の所にては候はずとて、かき抱き馬に打ち乘せ、片手に馬を牽き、片手に長政を捕へて、我等生き殘りたるに、殿を追ひ討つとや念もなく候。地の利を見て引き返し、一揆の奴原追ひ崩し申さんとて引き退く。菅は長政の鞦の組違ひに手をかけて、少しも離れず、木屋兵右衛門は長政の槍を持つて、歩立ちにて續きたり。一揆長政と見知り、餘さじと付け慕ふ。三宅、菅、木屋を始めとして、岡本彌兵衛、小河久太夫、坂本七左衛門已下五十人ばかり丸くなりて、思ひ切つたる色を見て、靜に詰め寄せて二里ばかり追つ駈けしが、其後は慕はざりけり。後藤は如何したりけん。猩々緋の羽織を脱ぎ捨てたりしを、長政取らせ

歸られけり。

後藤度々の功名ありて、一萬四千石與へ小隈の城にありしが、後に岐井谷の軍物語に及べば、俄に病み出でしとぞ。木屋兵右衛門は長政に向ひ、後藤小河が有樣大臆病の男にて候ふを、親子共に取り分けて懇にせさせ給ひ候。此兵右衛門は誠にあるにもあらぬ體に候へども、敵追つ詰め來りなば、一番に討死して御目にかけ候ふべし。さてもさても歎かしき御眼力やと飽くまで罵りて退きけり。其後長政筑前を賜りしに、小祿の士皆祿を增したりしに、兵右衛門は六百石に鐵砲の者二十人司れり。さのみ賞美なかりしかば、人々木屋に、殿を岐井谷にて罵りたる事を、ねたく殿は思し召して斯くはあるならんと云へば、木屋我れも然思ふ事よ。此の憤ならば、首をも斬られなんと思へども然もあらず。是れより後も軍あらば、度毎に大言を吐き散らし、只今寵愛にほこる奴原の中に、武者振りの惡しき者あらば、恥を與へん事、我が思ひ出なりと云ひければ、聞く者汝は下部の所謂口に倒されなるべしと諫めければ、今の祿を削らるゝとも口は利きたき事よとて笑ひけるとぞ。

孝隆は馬ノ丘の矢倉に上り、長政の敗軍を見て笑ひ居られしかば、側より危く候。疾く加勢をせさせ給へと、口々に云ひけれども、いや〳〵引き遲れたる味方の眞丸に成り、靜々と道を引き退くは吉兵衛なるべし。危氣もなしと云はれしが、果して長政事故なく引き返されたり。長政敗軍を口惜しとて引籠り、夜の物打ち被ぎて臥し居たり。孝隆物主を呼びて、弱敵をば恐れよ、初めの勝を勝にするものなり。勝すぐれば必ず敗の本なりと戒められけり。鹽屋善七郎といふ侍、長政の近習に仕へしが、京に仕に行き、此日の暮れ頃に歸りて、長政の寢所に行き、今日の敗軍是非もなき事に候。さばかりの者共小辨を捨て殺し、殿をも捨て逃げたりと承り候。殿もよき討死の所にて候ひき、何とて敵に後を見せ給ふや。父祖の高名に瑕付き申すこそ口惜しけれ、善七郎が御馬の傍にあるならば槍を合せ、一揆の奴原追つ立て引き取るべきに、後藤めら汚き振舞に候はずや。重ねて一揆と軍あらんに、必死と思し召し定められよとて座を立ちければ、長政も髻を拂ひ思ひ切つたる體なり。翌日善七郎又申しけるは、あながち口惜しとな思し召され候ひそ。一揆押し寄せ候はゞ、眞先かけて切り崩し、恥を雪ぎ給へ。善七郎は御馬の先にて討死せん。逃げたる奴原も勵まされて、軍する程ならば、鬼神なりと恐るゝに足らずと云ひ慰めければ、長政起き上り物語せられけり。長政は面目なしとて父の前に出ず。孝隆扨は必死を期したるなりと察し、老功の者數多長政に差し添へて、はやりたる下知を禁ぜられけり。一揆又上毛郡へ押し寄せければ、長政火隈の海近き所の山に上り待ちかけて思ふ圖に引き受け、一同に乘り出し、馬のかけ場よかりければ縱横に乘り割り、一揆敗北する所を追ひ立てたり。鬼木、塩田など云ふ者討たれ散々になりにけるを、長政鹽田内記を手づから討ち取り、尙も追ひ駈けんとせられしを、老臣ども馬より飛

び下り押へて陣を整へけり。鹽屋善七郎は敵の中に乘り入り、鬼木掃部が首を取り、右の方を見れば、長政敵の首を取りたりしかば、又馬引き寄せ打ち乘り、追つ詰めて首二つ取りしが、痛手負ひて精神も亂れたるが、尙も若殿の功名を問ひ聞きて、嬉しや先日の恥辱を雪がせ給ひぬ。此上は思ひ置く事なしと云ひけり。長政善七郎が枕元に居寄られしかば、長政の手を取り、此後能く心得給へ。殿に討死し給へと申す者は無き事に候ふと云へば、長政涙を流し、汝を先だつる事の殘り多さよと咽ばるれば、善七眼を見開き、先の頃諫め申せしは、必死を思ひ定めたる故に候。今度の高名こそめでたけれ、今生の御目見得只今を限りなり。人は一代名は末代と申す事の候ふと、云ひも終らず空しくなりけるとぞ。比類なき者なりと云ひ合へり。翌日孝隆火隈に來りて對面し、若き者は懲るゝ事なくては、思慮の練れぬものぞかし。終の勝を計れ、只勝つべきとのみ思へば敗を取るなり。良將は時により緩に見ゆれども、卒爾の軍はせざる故に、終の勝を全うするよと敎へられぬ。長政又押し寄せんと云はれしを、孝隆制して要害を設け、兵粮の道を塞ぎ、馬ノ丘に歸られけり。斯くて一揆勢ひ盡きければ、毛利輝元を賴み和平しけれどひ、友房は病とて出ず。中津川より三宅三太夫、岐井谷より傳法寺兵部、使者往來して、互に物語しけるに、ある時三宅云ひけるは、友房內室なしと聞く。勘解由に妹あり。婚禮あらば何如にと云ふ。傳法寺夫れは悅ばしきことなり。能く計らはれんやと云ふに、三宅我れ年若ければ、老人と相計りてこそと云ひけり。傳法寺

は敵の妹を、人質に取らんは然かるべしやと思ひけん、わりなく三宅を賴みけり。三宅我れ主君の心をも知らで容易にも申し出でたる哉。事調はずば、面目も候はずなど云ひて、長政に斯くと告げて、孝隆にも告げ遣りしかば、密謀をなし、三宅に孝隆書を與へ、緣を結ぶは末賴母しき事なれども、例の麁忽ならんとぞ書かれける。三宅、傳法寺に語りて、潛に其書を取り出して見せ、吾れをば常に麁忽者と戒め候ふが、此度も又然なりと云へば、傳法寺是れは既に聞き届けられたるなりと悅び、斯くと友房に告げて、是れより心置きなく中津川へ出づべきにぞ定まりける。三宅又迎ひに行けば友房三百人ばかりにて山中を打ち立ちけり。三の丸の大手にて人を留め、次第に減じてけり。本丸の書院にて對面あり。吸物を出して、酌は小川傳右衛門なり。野村太郎兵衛肴をはさむを相圖に、傳右衛門一の太刀、太郎兵衛二の太刀と定めたり。長政盃をさしける時、野村肴を持ちて出でけるが、持ちたる臺を友房に投げ付け飛びかゝり眉間を切る。小川おくれたりと脇差を抽いて切り付くれば、さばかり逞しき友房即ち討たれけり。供の者をば所々に手當して、物具したる者共槍ずくめにして殺しぬ。岐井谷へ軍兵を指し向けて打ち滅されけり。小川野村一二の定めありしに違ひたりしかば、小川怒つて其夜野村に云ひけるは、岐井を吾れ初太刀たるべきに、先を越され面目を失へり。いかにと問ふ。野村打ち笑ひ、左思はるゝは道理なり。能く聞かれ候へ。年を云へば吾れは弟なり。汝功名は四度に及び、我れは唯二度なり。是れ程劣りたる者のそなたに先を

させて、我れ後れなば、是れこそ面目を失ふと云ふべけれ。栗山か又我が兄の多兵衛とならば、前後を爭はれん事似合ひたるべし。かく劣りたる我れに爭はれんはおとなげなし。只免され候へと云ひければ、小川素より心易き事なり。但し心安くも切れたり、尤もとて愈親しみければ、人々野村が道理も聞き事なり。小川もよく聽き入れたりとぞ感じける。

◉井伊直政關白を討たんこと言はれし事

東照宮小田原に向はせ給ふ時、先陣は榊原康政と命ぜられ、井伊直政御旗本と定め給ふ。直政毎も先陣を好まれしに、此時は少しも辭退の氣色なかりしに、小田原にて秀吉傍の人僅に引き具せられしを見て、唯今取り圍みて、討ち取るべき時に候ふと勸め申せしを、東照宮聞し召し入れられざりしかば、さらば、先陣たらんと云はれしとぞ。

◉鳥井源八郎先登志士を論ずる事

山中の城を攻むる時、木村常陸介師春が士、鳥井源八郎先駈けして城に付き名乘りけり。羽柴藤五郎秀一が士、磯野平三郎續き來り、汝は首取源八と世に云はれたる譽の士なれども、田舍育ちなる故武功を辨へず。かゝる場にては、人は呆れ氣後れする物なる故、爰にて名乘れば、是れに心付きて、我先にと進む故、思ふまゝなる獨功名もならず。物の譯も知らず、

名乘るまじき處にて名乘るなりと笑ひければ、鳥井聞きて平三郎は志の士と聞きしに、眞の志士をば知らざるよ。人のあきれたる時は、尙高聲に名乘りて、人に心を付け力を添へて、多くの人を用に立つるこそ武士の義なれ。獨高名をせんとするは小事なり。いふに足らずと答へしかば、平三郎言ふ事なかりけり。

◉南部越後攻口の事

小田原を圍む時、國淸公の攻口は、搦手の山の上なり。目の下に見おろし、鐵砲を打ち入れけるに、城中よりあげ矢にうつ鐵砲烈しく、士卒進み兼ねたる時、南部越後銃口を空に向けて打たせたり。其の玉雨の降るが如くなりしかば、城中ひるむ所を見濟し、鐵砲山端に並べ、透間なく打たせて攻め破りけり。

◉上樣日和と云ふ事

同じ時、九鬼大隅守嘉隆日本丸といふ大船を乘り廻し、南の海上を取り卷きけり。此所は荒海にて、東風吹く時は波浪山嶽を倒しかくるが如し。船をかけ並ぶる事思ひも寄らぬ所なるに、秀吉城を圍まれし間、五十餘日風靜に波穩かなり。是れよりして小田原海邊風なき日を、上樣日利と云ひ習はしけり。

◉蒲生氏郷の陣夜討の事

附 氏郷金の三階菅笠の馬印を免されし事

同じ時、蒲生氏郷金の三蓋菅笠の馬印免され候へと申されしに、秀吉夫れは聞ゆる佐々成政が馬印にて、容易くは免し難し。今度小田原の武功によりて、望む所に任せん物をと云はれしかば、氏郷今度の軍に、人の目を驚かすか、然らずば討死と思ひ定め、繪像を描かせて、日野の菩提寺に籠め、打立たられける。斯くて五月三日の夜搔き曇りけるに紛れ、城中北條十郎氏房が持口より夜討をしたりけり。氏郷も今夜は夜討入るべきよ、懈るなと下知せられしに、果して廣澤兵庫秀信「一作助重」大將にて押寄せたり。氏郷の物見の兵、町野萬右衞門に行き逢ひぬ。弓取り直し指し詰め引き詰め射けれども、叶はずして引き返せば、敵進み來て柵の木を打ち破る。蒲生源左衞門郷成、田丸中務直政、町野右近幸知切て出で、爰を專途と戰ひけり。氏郷銀の鯰の尾の冑の緒をしめ、

氏郷の許に新に仕ふる士に、吾が家にて銀の冑を着たる兵、度毎に眞先に進み出で働くなり。此男に劣らず振舞ふべしと言はれけり。氏郷彼の冑着て、毎も眞先かけられしとぞ。

兼て一丈餘の槍を設け置かれしを提げ、追つ立て〳〵進まれけるに、廣澤、兼て鐵砲を、後

陣に並べ置きたれば、追ひ來る寄手を打ち立てけり。廣澤は聞ゆる剛の者なるが、槍を横たへ片足を堀の中へ踏み入れ、大音上げ一槍參らんと呼はるを、氏郷聞て飛びかゝり突き合ひければ、蒲生左衞門郷可、同五郎兵衞郷治、佃又右衞門等駈け來り、喚き叫んで攻め戰ふ。廣澤は今宵夜討の大將、廣澤兵庫一番槍と高らかに呼はりけるを、氏郷目にかけて堀の中に飛び入りて擊ち取らんと面もふらず冑の鍬を傾け、槍を取り延べ叩き立てられしに、敵兵二人氏郷の槍を取らんとする事七八度に及びしかば、氏郷廣澤をば討ちもらされけり。寄手餘り烈しく戰ひければ、廣澤も叶はじとや思ひけん、城をさして引き退く。氏郷何處までもと云ふまゝに、先に進んで追はれしかども、門を閉ぢて鐵砲を打ち出せば、引き返されしに、冑に矢二筋折りかけ、物具に槍の疵透間なく十文字の槍さゝらの如くなりしかば、秀吉感狀にかの馬印許されけり。

◉武藏の國八王寺城落る事

武州八王寺の城主、北條陸奥守氏昭は小原田にありて、家臣留守したりしに前田利家上杉景勝攻めむとて、先に降參しける北條氏邦に使を城に遣らせ、小田原既に破れぬ。疾く城を渡し候へと言ひ送る。中山、近藤、狩野等從はず。氏昭降參せば、證書を賜りて城を出づべき旨下知すべし。然らずして降參せば士の瑕瑾なり。氏邦が如き臆病者は、一人も城中に候は

ずと答へけり。利家景勝も其義に感ずといへども、扨止むべからざれば、一萬五千の兵を以て圍まれけり。甘糟清長攻め入て火をかくる。狩野一庵、近藤出羽守助實、金子三郎右衛門家重死狂ひに切つて出で討出す。横地監物は氏昭の第一の長臣なり。火燃え上れば、今日を限りに散々に戰ひけるに、寄手討たるゝ者多し。中山勘解由家範は武勇の將、殊に八條修理滿朝が馭法を傳へ、關東無双と世に稱せらるゝ人なり。大敵に少しもひるまず、二白ばかりにて突いて出で、爰を最期と切て廻るに、寄手新手を入れ替へ攻めければ、僅十五六人に討ちなされたり　利家誰れか中山由緣あると問はるゝに、松山の降人根岸主計定直が妻は、中山が妻と兄弟なり。小岩井雅樂助は中山が馭法の弟子なる由を申す。利家疾く中山に味方に屬せよと云ふべしとて兩人を城中へ入れられしに、中山既に自害して、其妻も自害したるがまだ息かゝりてありければ詞を交して馳せ歸り、斯くといへば、利家大に惜しまれけり。監物は切り拔けて逃げ出でけり。北條家關東に城多しといへども、豆州韮山の城のほかは、多く降參しけるに、八王寺の兵、城を枕に戰死せし事を、東照宮聞し召し其義を感じ思し召され、中山が嫡子助六郎昭守、二男左助信吉に祿賜り、昭守が子信守大阪の軍に功あり、信吉は後水戸中納言に仕へて備前守と稱す。狩野一廣が子主膳も仕へ奉りけり。

◉大音藤藏雨森彦三郎功名の事

八王寺の城攻めに城兵切て出で、死狂ひする時、利家の小性大音藤藏一番首を取りたる處に、雨森彦三郎續きて首取りて、利家の前に至りて、實檢に備ふ。一番は大音なりと申して、二番首の帳に記させたるを、利家大に感ぜらる。其頃大音は、利家の勘氣を蒙り居たる故、數度高聲に姓名を名乘りしかば、諸人一番乘といふ事を知りしなり。

◉信雄卿那須に謫からるゝ事

北條亡びて後、秀吉石垣山の本陣に諸將を集めて酒宴に及ぶ時、信雄は舞の上手と聞き、あはれ一曲觀申し度と秀吉云はれしに、信雄吾れを侮ると口惜しくやとありけん。不吉の詞を舞はれたれば、秀吉かゝる悅びの中に忌々しき事ども心得ずとて、那須に追ひやられけり。此時までも千餘騎の士を具せられしが僅に打ち連れて那須に赴かれぬ。時を計らず勢ひを知らず。無益の空言に國を失はれし事のうたてさよと、人皆云ひあへり。

◉坂部岡江雪免さるゝ事

北條滅亡の後、秀吉坂部岡江雪齋に、汝先年北條の使として上京し、約せし所忽ち背きて、名胡桃の城を取る事、氏直の奸計にや。又汝が詐なるかと責め問はるゝに、直に申さんと答へしかば、秀吉大に怒り、手枷足枷を並べ、江雪を呼び出し、刀を奪ひ取り、左右の手を引

つ張り庭上に引き据ゑて後、秀吉罵つて曰く、汝が約せし處に背くこと誠に憎むに餘りあり。且つ日本國の兵を動かし主君の國を滅せし事、汝に於いて快きやと譴めらるゝに、江雪色も變ぜず、氏直更に約に背くの心なく候。邊鄙の士愚にて、名胡桃を取り、終に弓箭に及びて北條家の亡びぬる事、江雪が思慮如何ともすべき樣の候はず。誠に家の亡ぶべき運命にや候はん。されども日本國の兵を引き受くること、北條家の面目なり。此の外申すべき事なし。疾く首を刎ねられ候へといふ。秀吉顏色打ちとけて、汝は京に引き上せ磔に懸けんと思ひしに、大言を吐きて主君を辱しめず。大丈夫と云ふべし、命を助けん、吾れに仕へよとて許されけり。坂部岡を改めて、岡と稱しけるは、此時よりの事なり。

◉關白鶴ケ岡參詣の事

秀吉鎌倉の鶴ケ岡に詣でゝ、八幡宮の戸を開かせ、賴朝の像を見られしが、背中を打ち叩き、微賤より出て、日本を掌に握る事、我れと御邊と二人なり。然れども賴義父子鎭守府將軍として、東國の者ども久しく親しみ多かりき、蛭ケ小島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも謂れなきに非らず。我は土民の中より斯く日本を思ひの儘にすれば、功尙ほ高しと云ふべしと云はれけり。

◉關白宇都宮にて佐野天德寺と物語の事

秀吉陸奥に赴く時、宇都宮にて佐野天德寺を呼び、

野州佐野辛澤山の城主、佐野小太郎藤原宗綱、天正十三年討死して子なし。家臣連判の請起文を小田原に送り、氏政の弟氏忠を以て家を繼ぎ。宗綱が伯父天德寺了伯は、佐竹の一族の中に乞ひて、佐野の家を嗣がんとすれども、是れを用ひず。了伯は夫れより京都に赴き黑谷に閑居せしを、秀吉北條を伐たるゝ時、鄕導とせられしなり。物語させて聞かれしに、武田上杉の弓箭盛なりし事を申しければ、秀吉冷笑ひ、いかに天德寺、謙信信玄といふ坊主も、疾く死にたるこそ幸なれ。今に長らへ居ば、一人には薙刀をかたげさせ、一人には吾が輿の先なる朱傘を持たせて、馬の前に召し具すべきに、此世になければ力なし。何條車がゝり坐備、皆戯言なりとぞ云はれける。

◉奥州葛西大崎一揆の事

天正十八年奥州葛西大崎一揆の時、氏鄕名生の城にあり。會津に飛脚を以て鐵砲の玉藥を人に見咎められざるやうを計りて、運び來れと下知せられしかば山伏を語らひ、笈の中に玉藥を入れて、頭巾螺貝杖を携へて、湯殿山に詣づる有樣して送りけり。是れ蒲生左文が謀なり。

◉蒲生家の士大將軍兵調練の事

蒲生氏郷笠井大崎にての軍に、佐久間備前、同内膳兄弟を先陣させらるゝに、下知する事氏郷の心に叶はず。此兄弟は元秀吉に屬せしが、秀吉より氏郷に賜ひたる侍大將なり。氏郷明日の軍は神田修理、外池信濃、岡野左内、蒲生源右衞門等先陣せよ。佐久間兄弟は見物せよとぞ下知せられける。先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立惡しきとて、斯く仰せ承りぬ。各討死したりとも己が躬を捨てゝ只汚名を出さゞるまでの事にて、斯く仰せを承りたる、甲斐もなくては、御大將の恥辱なり。然らば進退の節内馴しせずば叶ふまじとて、先陣の軍兵を打ち具し、平野に押し出し、駈引の馴し五度に及びけれども、尙調はず。六人そこにて明日の軍は、殊に大事なる故、斯樣に馴しに及びぬると。人々の進退以ての外調はず。いかにも能く心得候へと、再三詳かに申し聞かせさて、采配を取りて下知するに、進退節に當りしかば、さらば明日の軍は、思ふ儘なるべしと悅び勇み、果して敵を切り靡かせ大勝を得たり。淺野長政秀吉の命にて、陸奥國にありしかば、其軍の有樣駈引の圖に當りたる、終に見聞に及ばざる所なりと褒められたりとかや。氏郷も大方ならず悅びて六人に感狀を與へて色々の物添へて賞美ありけり。

◉氏郷伊達家の刺客を免されし事

伊達政宗、蒲生氏郷の威に壓さるゝ事を、心中に深く憤りて、氏郷を殺すべき事を思案して、

數代家に仕へし者の子に、清十郎と云へる十六歲になりける者、容貌勝れて艶なりしに、密にたくめる事を語り聞かせ、田丸中務少輔が子小性に出して、奉公させられけり。田丸は氏郷と姻家の親しみあれば、來られん時、便を伺ひて刺し殺せとの事なり。清十郎が父の方へ遣しける書を關所にて改め見しより事起りて、其の謀の泄れたりしかば、清十郎を獄に押し入れ、此事を秀吉に告ぐるといへども、秀吉遠く慮りて、强ひて伊達家と和平せさせられぬ。氏郷清十郎を呼び出し吾れ過つて罪なき義士を獄に入れ、辱を與へたるよ。其君の爲に命を捨てゝ忠をいたす、賞するに餘りあり。疾く〳〵伊達家に歸るべしと。禮義正しく持て做して歸されけり。

記せし書に、清十郎が姓を泄らしぬ、惜しき事なり。

◉氏郷佐々木が鐙を細川忠興に贈らるゝ事

附 黑塚の歌の事

氏郷の許に、佐々木が鐙といへる名高き器あり。細川忠興いと懇に、我れに賜れと乞はれしかば、亘理某、是れは世久しく傳はる物にて候。似たる鐙を贈り給へと云ひければ、氏郷、

なき名ぞと人には云ひてやみなまし心の問はゞいかゞ答へん

といふ歌の恥かしきよとて、彼の鐙を贈られけり。

蒲生はもと江州の士にて、佐々木の臣なり。氏郷伊勢の松坂十二萬石なりしが、後會津を賜りける時は、四十歳の頃なり。佐々木承禎が子四郎太閤の時僅二百石與へ、太閤の咄の席に呼び出されしが、伏見にて太閤の前より退出する時、氏郷昔の故に、四郎が刀を持ちて從はれしとなり。又安立郡に川あり、向ふに黒塚あり、安立は氏郷の領地なりしに、黒塚は伊達政宗の領地なりとて爭ひのありしに、氏郷平道盛の歌に

みちのくの安立が原の黒塚におにこもれりと云ふは誠か

と讃める事あり。いかにと申されしに、聞く人、黒塚は安立が原に屬したる事分明なりとて、政宗爭ひを止めてけり。

◉本多忠勝萬喜が舊臣を呼び出されし事

本多中務大輔忠勝に、土總の小瀧十萬石を賜りしかば、小瀧に赴き、土岐彈正少弼頼定入道慶岸の士どもを呼び出して、祿與へたり。彈正は同國萬喜の城に居し故、世には萬喜少弼と稱して、武勇の譽ありし人なれば、これを問ふに舊臣申すは、萬喜常に房州の里見義高と、弓箭を取り候ふが、敵を怠らせん爲に、舞臺を設け踊をさせ、城門を明けかふるとて果さず。船着の嶮しきを平し候。里見が將正木大膳時綱寄せ來り、船より上る時、慶岸、城に飾りたる紙旗を、絹の旗に立て換ふると均しく、古き門より不意に打つて出で、忽ち切り崩したり。

是れより土岐が地に攻め入る事候はずと語りければ、忠勝聞て、土岐は甲越の兩雄將にも劣らぬ人なりと稱し、其後舊臣に其家の事を問ふ時は必ず萬喜殿とぞ云はれける。

◉東照宮武田北條の跡御制度の事

勝頼亡びて後、東照宮甲斐を治め給ふに、法度は信玄より用ふる處を、改め易ふる事勿れ。年貢は少く納めんと仰せ出されしかば、百姓大きに悅びあへり。小田原亡して後、其地を治め給ふも又同じ。諸民大に喜び、數百年の恩義相結べるに同じかりき。

◉東照宮武田の舊臣を召して御物語の事

同じ時、東照宮武田家の士横田甚右衛門等を召して、信玄の事ども物語りさせて聞し召さるゝ時、御坊の時、火繩は如何したると御尋ねあり。柿の澁に石灰を入れて火繩を染め候へば、年經ても用ひられ候ふと申す。横田又は城意庵などに、信玄の事をば御坊と仰せありけるとぞ。又武田家にて、鏃をゆるく詰め候ふは、敵の肉の中に鏃の殘らん爲なりと申すを聞し召し、士の軍に臨むはみな其君の爲ぞかし。射伏せたれば、吾が軍の利となるべし。後まで人を苦しむるは、不仁の業にこそあれ。今日より我が家の士は、鏃を堅く詰めより仰せ出されけり。

◉東照宮物具の御物語

附 小野木笠の事

東照宮仰せに、物具の美麗なるは無益の事なり。又重くするも益なし。伊井兵部は力も有りて、重き物具しつれども、度々手負ひしなり。本多中務はさもなくて、薄手負ひたる事もなし、只戰ひ易からんやうを心懸くべきなり。下部は薄き鐵の笠を着せたるぞよき。急なる時は、飯をも炊ぐべしとぞ。

鐵の笠は、甲州にても下部は著たりしとかや。畿内の方には無かりしに、丹州龜山の小野木縫之助、足輕已下の者に、鐵の笠を着せける故に、其頃は小野木笠と云ひけるとなり。

◉秤御定の事

附 一歩金辨當挾箱始まりの事

東照宮關東御打入の後、甲州にありける秤を造る、守隨兵三郎といふ者、井伊直政に申して、關東黄金白銀等を商賣するに、定りたる秤を用ひられん事を願ひければ、それより今の制は定めさせ給ひけり。

京に後藤德乘といふ彫刻師あり。東照宮關東御打入の後、德乘が弟子を召しけるに、遠國を嫌ひしに、後藤庄三郎、我れ行かんとて關東に至り、寵せられしがば、後天下を知しめさば、願の一つ叶へ給へと申す。何事ぞ易き事よと仰せあり。さらば黄金を四つに切りて、通用せばやと望みけり。果して海内東照宮に歸しければ、庄三郎が志の如く仰せ出されげるより、今の壹歩金といふは始まれり。但し甲州には信玄の時、碁石金といふ物あり、あれは夫れより前には碁石金の外にはなかりしにや。一歩金は碁石金に倣ひたるにやあるべき。又信長の時、今の辨當といふものは、安土より始まれり。其の始は小芋ほどの中に、いかで色々の物入れられんとて、人信ぜざりきと云へり、挾箱も同じ頃造り始めたりと云ふ。又大阪の津田長門守始めて造り出すとも云へり。

◉酒井金三郎本を忘れざる事

原吉丸、酒井金三郎、共に東照宮の近習に仕へ申しけり。伏見にて御庭に出でさせ給ふ時、原御太刀を持ちて庭に下り、草履穿くに遑なく、跳にて蒔石の上にありけるに、酒井草履を與へげれば、人々譏ると聞し召し、子細を御尋ねあり。酒井承り、原は元下總の笛井の城主、原一部が子にて候　臣が先祖原に仕へしと承りぬ。昔の主君のゆかり、跳にて炎天に居たるを見るに堪へ兼ね候ふと申しければ、本を忘れざるの士なり。吾が子孫にも斯の如くなる

べしと、大に御感あり。

◉東照宮相模境御打廻りの事

北條家亡びて後、東照宮甲斐相摸の堺三增嶺を御打ち廻りの時、過ぎし永祿年中の戰場を御覽あり。禿山なりし故、信玄兵を押し通し、容易く軍に勝ちしなり。北條家武略に拙くて、山林を伐り荒したる故ぞかし。生ひ茂りたらんにいかで信玄陣をしくべき。山を林にせよと仰せ出されけり。

◉伊藤七藏功名の事

信長江州小谷の城攻めに伊藤七藏先駈けしたるに、從者取り付きたる故、上帶切れて、刀も脇差も塀下に落つ。七藏少しもひるまず乘り込んで、柵の木取つて敵三人叩き伏せ功名しけり。七藏父を若狹と云ふ。相州の人にて、武者修行し、尾州前田村に居ける頃、信長呼び出されけり。七藏尾州三本木の軍に事急にして、編笠を被りながら、一番槍を合せける故、信長大に賞美して、編笠と呼ばれけり。後秀吉に仕へて、度々功名ありしかば、紫紬井筒紋、廣袖の小袖を與へられければ、甲の上に着たり、秀吉の旗奉行と成りたり。

◉井伊直孝用意の事

井伊直孝の曰く、人毎に具足櫃を持たせて、早く取り出す志を用意する者あり。取り出す間も遲き程の事あらば、何時も素肌にて駈け付けてこそよけれ。具足を着たると着ざるとの差別なき事なりと申されけり、

◉馬場重介武功の事

馬場重介職家は、陸奥栗屋川貞任が裔孫にて、備前邑久郡北地村に來り居しが、其後も安倍と云ひけるに、京都より來りし馬場氏の人、豐原に居て、其女を妻として、遂に馬場と稱しぬ。重介稚名を岩法師と云ひて、十三歳にて邑久郡戸石の城主、浮田大和守に奉公し、天文十四年浮田直家は、乙子の城に在て大和と軍あり。直家の士池田太郎三郎と岩法師、東北地村荷蓋の畠にて槍を合せ、疵を蒙りて戸石の城に歸る。今年十四歳なり。大和守膝に抱き上けて、疵の口を自ら吸はれけり。無双の剛の者なりとて、名を次郎四郎と改めさせられぬ。程なく直家、花房又七、近藤右郎左衞門「一說に六郎左衞門」、星野十郎を大將にして、戸石を攻む。次郎四郎白團の腰ざし指いて、一の城戸口に出る。近藤見て、いかに引くか進むか、と詞をかくるに、次郎四郎軍場に臨んで、引くといふ事やある、といひも終らぬに、花房星野とも手利の射手にて、弓取り直し是れを射る。花房が矢は中指にあたり、星野が矢は次郎四郎が持ちたる楯をもとはぎまて射貫く。次郎四郎物ともせず。敵を追ひ拂ひて歸れり。天

文十七年赤坂郡鳥取の砦を、大和守攻めて軍あり。次郎四郎膝の口を篭深に射させ、二町ばかり引退きたる所に、味方に泉養坊といふ山伏來て、其矢を拔けば足萎えて、歩む事能はず。大和守の馬に乘りて、二三町引き退きたりしかどと、馬を返してければ、味方も隔たりぬ。敵迫つ駈け來らば、討死せしと思ふ時、妹婿なりし片山彦三郎といふ者の弟來て、馬に抱き乘せたるに、血鐙を越えて流れ、朱になりたるを敵見て、深手負ひたりと見なしたれば、十文字の槍を取り延べ、頻にかけ落さんとする事、幾度といふ事を知らず。漸々に遁れ得て歸れり。首を取つて、見とられて見るといふ諺あるは、此事なるべしと、次郎四郎常にいひけるとなり。是れ十七歳の事なり。後次郎四郎直家に奉公し、與力六十人付けられたり。美作三星の城は、浦上宗景番手の兵をやりて守らせたるを、安藝の毛利家より附城を構へ、三村家親大將として、度々合戰あり。直家より馬場を加勢として、三星にこめたり。馬場愛宕精進するとて、五月二十四日細き流れに行て、身を清むる處に、敵出でたりと聞き、直に行き向へば、三星よりも槍提げたる士一人來て、馬場に並び進む。敵を追ひ詰めたれば、附城より出て、是れを助けて城に入る。門内を見れば、混冑の兵十四五人折敷して、鎗の先を並べ待ちかけたれば、靜々と引き返す。宗景感狀を與へられ、直家夫より重介と名を改めさせ、家の字をやられけり。備前上道郡妙禪寺の砦の合戰に、重介は刀、敵は槍にて相戰ひ、溝を飛び越えて敵の手の下にくゞり入らんとせしに、躓きて俯伏に伏したり。敵勇み懸りて思ふ所

を突きばづし行きあまるをつと立ち上り、切伏せて首を取る。同郡土田の軍にも、長六尺に餘れる梶井といふ兵を討ち取りたるを、角南恕庵見て、白き浴衣を著、右の肩を肌脱ぎ、太刀打したる兵の有樣、昔の辨慶などや斯くもあらんと驚きたりといふ。則ち重介なり。永祿十年五月十日、土田の上蟹目の軍に、敵五人槍を横たへ山の上より來るを、重介は坂の下に有て、一人射倒したれども、味方は續かず。引き返す時山の腰を引き退く。味方敵追ひ詰めて既に討たれぬべく見ゆれば、返し合せ敵を切り靡け、味方を助けて引き取り、備前岡山の城主金光與次郎を、直家謀を以て殺し、城を取り得たれども、近き邊りに敵多ければ、戸川平右衛門を城番とするに、寄騎六十人みな行き兼ねたり。重介我れ替らんといふに、何の仔細かあるべきといふを、直家に告げて免したれば、重介が寄騎六十人、一人も辭退する者なきに、戸川が與力も勵まされて、重介加勢ならば行かんといふにより、戸川馬場三年岡山にあり。美作三の宮の城を、直家一時に攻めらるる時、城主村上勘兵衛、士卒六十人ばかりにて突いて出る。重介眞先進み、東武者四人、薙刀武者四人と戰ひて、城門の際まで追ひ打ちす。敵槍を投げ突きにしたるを、奪ひ取て歸る。高城にての軍に、直家重介を谷の受手とす。敵來らざれば谷より上る處に、山の半に鐵砲を五段にして、待ちかけたる處に行きかゝり、三段追つ崩す。四段より擊つたる鐵砲に、右の膝より臀へかけて打ち通され、敵聲をかくれば、重介中らずと云ふて、四段をも追つたてる。崩れたる土手あるに、冑の鍬を傾け、

寄り添ひて待ちたるる、柴折かけたる谷の向ふより打つ鐵砲、背割具足の右の肩貝殼骨の内より、臂まで打ち貫かれ、目眩みたり。氣を靜めて見れば、田中藤助間近く來れり。重助田中を呼びかけ、大事の手負ひぬ。此所を退かんとせば追ひ討ちに遭はん。爰を死所どせんと云ふ。藤助我れ一支もすべしといふ。重介五間ばかり歩みて、郎等の眉に手をかけ靜に退くを、敵慕ひ來れば、藤介槍を合せ追ひ退けて歸れり。鐵砲に中りし時、大木を以て袋を突き通すが如く覺え、物の色目分れず。只朝貌の花の色に見えたりと、後に語りけるとなり。備前兒島八濱にて軍あり。浮田七郎兵衛忠家の子與太郎大將にて、戸川平右衛門、岡平内巳下度海し、麥飯山の敵城近き邊りにて草を苅る時、敵出て追つたつる。與太郎馬に輪をかけ、味方の兵を求むる所に、鐵砲内胄に中りて馬より落つ。中村宗介同じく討死す。重介馬を射られ、乘り放し歩立ちになりぬ。月毛馬葦毛馬黑馬に乘りたる敵三騎、重介を目にかけて馬を乘り寄する。重介敵に馬を乘りかけられじと、槍の鉾を後になして脇に挾み、靜々と退く。疲れはしつ、討死よと思ひたるに、敵引て助かりぬ。戸川見て、今日の働きゆゑ我が一命を繼ぎたりと、重介を譽めたる處に、寺尾孫四郎今日は重介を見すといふ、重介先にて見ざるか、後にて見ざるか。一番に進みたる敵の馬の毛色物具はいかにと問ふに、孫四郎赤面して詞なし。重介吾が槍脇に弓を持て、後の證に立れよと云ひて、敵一人射倒したる人ありと云へば、鷹見傳兵衛進み出で、某にて候ひきと云ふ。中納言秀家大阪より備前へ下らるゝ時、

雨中の徒然に、浮田修理、同太郎左衛門、花房又七の三人を呼んで、軍物語の時、前代の槍柱功の勝れたるは誰れぞと問はるゝに、馬場重助、幸和織部、寺尾孫四郎三人と答ふ。秀家聞て、幸和寺尾は武功はありつれど輕薄なりと聞けり。いつとても重助が人に越されたる事なしと聞きつれば、重助こそ勝れ候はんなれと云はれしかば、三人重助が武功は中すに言葉も候はずといふ。重助貞實にて詔はず。城下の近き邊りに引き込みて、此頃は耕作してありける由を秀家聞て、三百石加祿の折紙を、戸川肥後をもて重助に與へらる。如何にしたりけむ、事遂せず。重助是れを聞き愈出づる心なくて、遂に秀家にも仕へず。七十七にて病死す。士は假初めにも汚き心あるべからざるなり。吾れ數度の戰場に臨み、百死の中に一生を得て、斯く全く終りぬると遺言しけり。其子孫池田家に仕へけり。

◉利家白雲の琵琶を種村に與へらるゝ事

種村肖稚守は、もと柴田家にて譽れあり。後招かるゝ人々多かりけれども仕へず。前田利家懇に迎へられしかども出ず。利家秤村が琵琶を彈ずる事を好むと聞きて、白雲といふ名物の琵琶を贈られしかば、其志にや引かれけん、利家に仕へて、佐々成政と城中朝日山の合戰に、目を驚かす功名を遂げたり。其後淺野長晟に奉公して。彼の白雲の琵琶は、今淺野家にありとかや。

◉秦桐若勇威の事

黒田家の士に、秦桐若といふ剛の者あり。唐團扇長さ一丈ばかりもあるを指物にしける故、敵見知りて近付かず。或時指物を隱して近々と成て不意に出せば、敵大に驚きて引き退きたる程の者なりけり。

◉澤村大學朱柄の槍を持たする事

駿河を攻めらる時、東照宮傍らの人を召して、昔より皆朱の槍の柄、瑇瑁の柄は、武功勝れたる者ならでは持たせざるに、近比は持たするもの〻數多ありと聞く。心得難き事なり。改めよと仰せ出されけるに、皆朱の柄の槍持たせ、嵩蒲革の裁著を着て通る者あり。誰れぞと問ふに、細川越中守が士澤村大學と答ふ。此由を申しければ、東照宮其大學は、若き時才八といひつるが、小牧にての事なりし、秀吉二重堀の軍兵を引き取る時、秀吉六萬ばかり青塚に陣せしを、吾れ小牧より押寄せて、引き退く敵を打ち破る。其時細川忠興秀吉の先陣に有て、才八眞先に進みて槍を合せし有樣、今も猶目の前に見るが如く覺えたり。かゝる大剛の者に持たすべしとて、其餘の者を禁ずる事よと仰せられしかば、澤村傳へ聞き、今更我が功名を世に擧げたる忝さと悅びけり。

◉加藤清正天草の一揆退治の事

加藤主計頭清正、小西攝津守行長、各肥後半州を賜りしに一揆起る。天草領は島にて、一揆の勢ひ甚だ盛なり。小西志岐城を攻めけるは、天草木戸の一揆の長、天草民部後卷に押し寄せ、志岐の東の山に陣す。清正の先陣山岡道阿彌、岡田將監、南部無右衛門、小野木織部、澁野三位、莊林隼人、森本義太夫段々に進む。清正鵤平次をして、先陣を見せしむる時歸らず。又飯田覺兵衛を遣られしに、飯田見切つて歸る。平次只今軍始まらん、先に進みて戰に逢はんといふ。飯田知らぬ事はいふまじきよ。先陣只今追つ立てられん。戰に逢ふ場にあらずとて連れて返る。清正如何にと問はるゝに、飯田先陣は今打負けて、敵追つ駈け來らん。二の勝は旗本に候ふといふ。清正證はいかにと問ふ。敵東の山に陣し、地の利を得たりといひも果てぬに、先陣敗北して一揆蕪地にかゝり來る。清正高き處より横合に突いて懸り、天草民部敗軍せしを、三里ばかり追ひ討ちにしたり。清正十文字の鎗を突き折り、七度鎗を合せ、其勢に乘じて、志岐の城を攻め落されけり。清正の鎗は十文字にて三日月の形なり、志津の作なりしが、突き折りて片鎌となりし、及を拾ひ取りて佛木坂の神宮に納めしとぞ。鎗の鞘熊毛なりしに、瘧煩ふ人あれば、其毛筋拔きて戴かするに、忽ち落ちけると言ひ傳ふ。朝鮮人は今に至るまで、小兒の啼く時、鬼將軍來るといひて、啼き止みけるとかや。か

ばりの猛將類稀なる事なり。

◉森本義太夫組討功者の事

清正一揆を攻むる時、或夜森本義太夫清正の前にて軍評定せしに、凡そ組討は力によらず候。心剛にて手きゝたれば、易き物なりと申すを、清正組打は危きものなり、勇に誇る時は、必ず仕損ずべしと戒められぬ。其翌日清正の眞先に森本馬を進むる處に、歩行武者一人寄せ合ひたり。森本聞ゆる馬の上手なれば、敵を横さまにあてゝひらりと飛び下り、立ち上らんとする敵を引つ組んで、頓て首を取る。清正に向ひ。昨夕申せしに違ひ候ふ哉といへば、清正大に賞せられけり。

◉國富源右衛門組討の事

南大門の軍に、明の兵を追ひ駈け、秀家の士國富源右衛門とて剛の者、大力なりしが、さはやかによろうたる敵に追つ付きて、三尺餘ある刀を取り延べ、三刀まで斬りたれども、甲堅くて手も負はず。國富刀を捨て飛びかゝり引つ組んだるに、彼の敵國富を取つて押へたり。跳ね返さんとするに、大磐石を横たへたるが如し。國富脇差を抽いて、二刀刺せども、如何なる甲にや少しも通らず。已に危かりし時、味方數十人落ち合ひて、敵をば討ち取りたり。

◉吉田又助川巾を積る事

朝鮮の平安川は深さ八九尋、四五百石積の船の往來ありて、日本にては見ざる大川なれば、川の廣さを諸家の士、或は七八町十町、或は十二三町あらんと云へども審かならず。黒田長政の士吉田六郎太夫「稚名六之助、後壹岐、此時六郎太夫といへり」又助父子に見積り候へと下知せらる。斯樣の事に慣れず候ふ故、覺束なしと辭すれば、父子が組に功者もあるべしといはれて、翌朝又助組の士を引き具し、川岸に出で、川の向に朝鮮人三人見えたり。又助小柳權七は長高き者なり。あの向うの人退かざる內に急ぎ堤の上を行くべし。指物をふる時、踏み留まれと言ひ含め、權七走り行き、其長向うの人と均しく見ゆる時、指物を振りたれば立ち留まりぬ。即ち其間を打て見れば八町五段なり。長政聞て、又助二十一歳、老功の者にも劣らじと稱美せられけり。

◉太閤名護屋にて大言の事

明の援兵、大軍にて朝鮮に來り、日本の軍危しと、大閤聞かれ、軍評定ありし時、蒲生氏郷進み出で、何程の事か候ふべき。氏郷に朝鮮を賜り候へば、切り取りにして、打ち破るべきものをといはれしかば、太閤是れより氏郷の大志あるを忌み憎み給ふ。又同じ時、隆景使を

以て、隆景が存ずる所は、十萬の軍兵渡海せば、城々を守らせ、隆景先陣して明朝に押し入り、北京を攻め落すべし。此旨申せと申して候ふといふ。秀吉小早川の智謀さぞあらん。人々よく聞かれよ。秀吉功を遂げずして死するとも、秀次を大將として、明朝に攻め入らん時、我が魂魄雲に乘じて鐵の盾をつき、唐土の奴原を一々に蹴殺して捨てなんものを、昔も柘榴を嚙みて火となせし者のありしと聞く。其小男の名を忘れたりと云はれしかば、施藥院秀成、夫れは北野の天神の御事にて候ふと申す。秀吉夫れぞかし。雷になりて天に上りしと言ひ傳ふれど、吾が陰囊の垢程もあらぬ物をと、大音に云はれしを聞く人毎に驚きけり。

◉菅政利、後藤基次虎を斬る事

附 羅山先生南山銘の事

黑田長政朝鮮の全羅館に陣せられしに、ある曉、俄に騷ぎければ、敵夜討にや寄せたると、井樓に上られしに、虎馬屋に入りたるにてぞありける。恐れて出づる者も無かりしに菅政利刀を提げて走り向ふ。虎嚙みかゝる處を、飛び違へて腰骨を深く斬り付けたり。虎前足にて立ちあがり、愈猛りて危かりし處に、後藤基次馳け來り、肩先を乳の下懸けて切りつくれば、菅得たりやと、虎の眉間を切り割つて殺しぬ。長政、汝等は先陣の士大將として下知する身なるに、獸と勇を爭ふ事、おとなげなしとぞ云はれける、政利が刀に、林羅山銘を作りて、

南山と名付く。處周白額虎の故事なり。銘に曰く、

節彼南山。山惟劍鋩。菅政除去。酷吏逃藏。截邪斬佞。
惟刀在箱。惟其言虎。若有眞僞。傳之萬世。爲子孫當。

朝鮮機張にて、長政虎狩せられしに、虎一匹、人の群れたる中に駈け來る。菅六之助が足輕の肩を嚙みて後に擲げ、また一人をも腕を嚙みて投げ倒しけるが、六之助、其日朱具足を着たるをや目にかけゝん、忽ち飛びかゝりしを、菅二尺三寸ありける刀を拔いて、忽ちに切り伏せたり。其刀今に菅の家に持ち傳ふ。備前吉次が作なりき。大德寺春庵和尚、其刀に幾秦と名を付けたり。秦は虎狼の國と言ひし故にこそ。羅山林子も銘を作られたりと云ふ一說あり。

◉泗川の城に狹間を切る時の事

文祿五年朝鮮にて、泗川といふ處に城を構へたる時、門脇の狹間を、垣見和泉守家純あげて切れと下知しけるを、長曾我部元親見て、人の胸あたりより、腰あたりを當てゝ切りたるこそよけれと云ふ。和泉守下げたらば、敵城内を覗ふべきと云ふ。元親此門へ押し寄せ、心よく内を見る程の城兵にてありたらば、一支もすべきや。上げて切らば、敵の首の上を射べきかと笑ひけるとぞ。

◉加藤嘉明拔懸功名の事

慶長二年、朝鮮の番兵、船數百艘をから島に置きて、日本の軍船を防ぐ。諸將番船を乘り取るべき評定あり。加藤左馬助嘉明目に餘る大軍を小勢を以て爭か打ち勝つべきと云はれしが、密に手の者に下知し、五人十人船に乘り、番船の方に漕ぎ向ふ。嘉明法を背く者どもを押し留めよとて、追々船を出されしが、やゝありて、我れ押し止めずば、止らじと言ひ捨て、船に乘り漕ぎ出す。河合庄太夫、同庄次郎、荻野作右衛門、かぎ懸の三介、五人打ち乘りて、番船の中に押し入つたり。三介、船は何れと問ふ。正中の本船に着けよと下知し、やがて乘り移る。敵其勢ひに恐れ、船底に入りて劍を拔き、鏃を揃へて待ちかけたるに、嘉明少しもためらはず飛び込みたれば、從者何かは殘るべき、續いて飛び入りて、撫で切りにして本船を乘り取りたれば、諸將も追つ續き、船を押し出し來る。既に鐵砲の藥に火移り、燒船を乘り取る者多し。河合庄次郎は十六歳なるが、飛び入るとて海に飛び込み溺死す。仙次郎兵衛、加藤權七郎勝れたる功名せり。嘉明一人の武勇にて、七月十六日白晝に押し寄せ、番船百二十艘、一艘に五百人三百人乘り組みたるを、僅の士卒にて悉く海に切り沈めたるは、古今に稀なる事どもなり。秀吉感ぜを與へ、六萬二千石に增祿して、十萬石を與へらる。池田家の長臣池田河内が妻は嘉明の女にて、河内が男伊賀に外孫なり。伊賀若き時、外祖父の武功

の事を尋ねければ、今は年老いて、過ぎつる事皆忘れたりとのみ云ひて止みぬ。から島の船軍の事を問ふに、十五六歳なる小性の船に乘り移る時、矢に中り、海に落ちて死したりき。不便の至りなりと、只此事を語りて他の事に及ばざりしとぞ。

◉井口與市主從功名の事

朝鮮にて、何れの所の事にや。廣き野に道ありて向うは山の麓なるに、大穴を構へ、射手を伏せ置きて、行きかゝる日本人餘多射殺しけり。黑田家の士井口與市が從者山崎喜藏、いで參て見申さんと云ひもあへず走り行く。井口も馬より下り走り入りければ、山崎射手三人斬り伏せる。井口續いて攻め入り追ひ散らす。井口恩賞に望み候はず。あはれ朱柄の槍免され候へと云ふ。物師ども寄り合ひて、武功度重ぬるか。或は一日の中に首七つ取る時は、朱柄の槍持たすると申す事の候。輕々しく許し難き事にやといふ。井口是れを聞き、其後一日に首七つ取りて、朱柄の槍持たせけり。

◉朝鮮より虎と象とを渡す事

朝鮮より虎と象とを引き來る。象は柔順のものなれば、細き綱にて引きけり。虎には鐵の鎖を付け、左右より七八人取り付きて引き來る。朝鮮渡海の諸將、一旦名護屋に歸り集られし

時、彼の虎に大力の男あまた左右に鎖を控へどつと云うて駈け出し、幾らも並み居たる中を通りけるに、人みな驚きたるに、清正膝立て直し、拳を握り臂を張りて、虎をきつと睨まれしに、虎も暫し立ちとどまりて、清正を睨みて打ち過ぎぬ。嘉明は壁に倚りかゝりて、居眠してありしが、虎通り過ぎたる後も初めにことならず。やゝありて目を開き、何事に騒がれ候ふぞ。虎を引き通れる故にやと、いと靜に云はれけり。

◎清正の士卒土穴に住みし事

慶長二年二月、清正再び朝鮮に渡られしに、船の着きたる處は、北地にして寒風烈し。土民ども土穴を穿ちて、其中に住み居りしに、日本の軍兵押し渡ると聞き、逃げ走りしかば、清正の兵共土穴に入りて臥す。清正漫に民を殺さず。非道を嚴に戒しかば、後には商人も物を馬に付けて、來り賣りしに、寒氣以ての外に甚だしくて、馬の毛につらゝの下りて、からめきて鳴る聲土穴の中に聞えけるとかや。王元美が詩に、風劈レ面疑レ裂、凍粘レ有レ聲と云へるを思ひ合されぬ。軍兵盡は終日風砂の中に立ち、夜は土穴に臥しける故、皆雀目になりしを、土民教へて鳶を食して癒えけるとぞ。

◎森本庄林黑白鳥毛の槍鞘の事

朝鮮にて、何れの處の戰にや、清正の士大將森本義太夫、流矢に臂を射させたり。斯る處に庄林隼人馳せ來るを見て、いかに手負ひたり。此矢抜いて給はれと云ふ。庄林馬より下りて抜いて捨つれば、森本さても快き事かなと云ひもあへず、馬にひらりと打ち乘り、一鞭打てつと駈け出し、庄林殿續かれよと云ひ捨てゝ、敵に逢ひ首を得たり。二人とも清正の士大將大剛の者なり。森本が槍は白鳥毛を鞘とし、庄林は黑鳥毛を以て鞘とす。世の人黑鳥毛白鳥毛と云ひあへり。

◎峯澤某謙信を擊たんとせし事

謙信の許に、峰澤何某といふ士、罪ありて放斥せられしに、越中の椎名に奉公し、謙信越中へ師を出されし時、彼の士叢に隱れ、鐵砲を持て伺ひ居たりしが、俄に鐵砲を傍に投げ捨てゝ泣き居たり。謙信見出して、いかに峰澤珍らしと云はれしに、さばかりの仁君智將を、擊ち奉らんと存ぜし事、悔しくなりて候。今遙に見奉りて、先に屋形の心に背き、又かゝる設けを工み申す事、此上もなき大罪にて候。とく〳〵首を刎ねらるべし、と云ひてひれ伏しければ、謙信打ち笑ひ、吾れに智仁とは、相應せざる虛名なり。疾く馳せ歸りて、椎名によく仕へよと云はれじかども、かの士越後に歸りて、農夫となりて一生を終りたりとかや。

◎久世三四郎坂部三十郎物見の事

東照宮何れの時の軍にや。久世三四郎宣廣、坂部三十郎廣勝二人を物見に出し給ふ。坂部は勇める色あり。久世は氣色甚だ惡しう見えしかば、側より笑ふ人のありしに、東照宮、坂部は天性の剛の者なり。久世が及ぶべきにあらず。されども久世は、人に劣りて生き甲斐なしと思ひ定めたる者なり。其の故に務めて勵む故、心を勞して其氣色顯れて見ゆ。今見よ、久世は坂部よりも、敵近く進み行て、見て歸らむものをと、仰せける處に、二人歸り參りたるが、果して御詞の如くなりけり。東照宮、坂部は生得の勇を賴みにして懈あり。久世は勵むを以て味ひ深しと感ぜさせ給ひけり。

◉野々口彦助物語の事

明智光秀が士野々口彦助、山中鹿之助に逢ひて、功名せん事を問ふ。鹿之助物まへには、必ず目の明かぬものなり。能く心得られよと云ふ。彦助させる事とも思はず。其後何れの戰にや。川際に野々口打ち出でたる處に、朝霧たなびきて物色見え分かず。時に山中が敎へし事を思ひ出し、手綱を控へ、爰にて目が見えぬと云ひしは、吾が後れたるならんと、目を塞ぎ心を靜めて、目を開きたるに、川の半に物具したる武者、大差物を指して唯一騎渡り來るを見付けて、心もさはやかに、目も明かになりたれば、押し並べて引つ組んで落ち首を取りたり。後に彦助、是れも我が眞實の功名にはあらじ。彼の敵大差物に身の疲れて、輙く我れに

組み敷かれたるならん。彼の敵も物前に目が見えざりしならんと語りき。

◉石谷定清御供に參る事

石谷十藏定清は、先祖は遠江石谷村の人なり。大阪御出陣の時、江戸に殘させ給ひしに、御跡より從者一人に、具足箱を背に負はせ、自ら槍を荷ひて、潛に江戸を出で、駿府にて追ひ付き奉りけり。兼て心易かりし御近習の人を便り、江戸に殘り申す事、口惜しく存じ、重き御法を破りて參りぬ。首を刎ねられん事は、素より覺悟したる事なれば、いかに御咎め蒙らんとも、露ばかりも悔む事は候はずと、申し上げて給はり候へと云ひしかば、將軍には殊に法制を嚴に思召し給ふなれば、爭か御許されのあるべき。もし御許あらんには、御跡より引き續きて、追々に來るべければ、必ず烈しき刑に行はれなん。されども捨て置くべき事ならねば、斯くと申すに、蓋德院殿默しておはします。十藏は既に我が事聞えつる上は、今夜か明朝は首を刎ねられなんと、相待ち居たりしに、十藏呼べとて召されけり。思ひ極めて進み出れば、何如にし御法を破りたるや。憎き奴哉。切つて棄てばやと思へども、若き者なれば宥すよと仰せ出されて、黃金二枚賜りけり。さて江戸へは、重ねて誰人にもあれ、一人も忍ひて御供に參りたらば、重罪たるべしと、固く仰せ出されたるとなり。

◉坪内玄蕃心得の事

石谷十藏定清、坪内玄蕃に向ひて度々の功名世に高し。あはれ心掛にて、功名を遂ぐべき道もあらば、敎へられよと云ふ。坪内聞て、能くこそ問はれたれ。人々事に臨みて神の力を賴み八幡〳〵と云ふ。我れも又賴みては相賴みになりて、成就せじと思ふにより、我れは毎も八幡といふ神を、刺し通さんと一筋に思ひて、後れを取らざりしと云ひけるとぞ。

◉道化清十郎平野與兵衞に對面の事

道化清十郎は美濃の人にて、信長に仕へて、度々功名勝れたる故に、信長清十郎が指物に、無双道化といふ四字を書きて與へられしかば、世の人無双道化と云へり。平野與兵衞は齋藤家の士なるが、是れも武功譽れ高く、信長是れを招かれし時、人々往きて、平野に對面するに、道化も打ち連れて物指せしが、道化曰く、御身は遙に先立ち、引くに殿ると聞く。其趣を委しく語りて、敎へられよと云へば、平野更に心懸故にも候はず。齋藤家に冥加に叶ふ士は、皆々討死しつ、吾れ生き殘りて、重ねての軍には必死と思ひつれ共、武勇の不足故に死を遁れ。今日の問ひに逢ひ、恥の上の恥にあひ候ふと答へければ、只今の答至極の道理にて候。先駈け後殿は、必死を志さずしてはなり難しと、大に譽めて感じけり。

◉谷太郎左衞門物前心得の事

谷太郎左衞門は武功の士にて、黑田家に客の會釋にて招ぎ置かれけり。谷が曰く、軍の場にて先づ敵より味方に氣を付くべし。一人先に進み出で踏みこたゆる處に、跡より二人三人行き重ならば、始め出でたる者を强と知るべし。其處へ行くべからず。吾れは又別の所に獨踏み出して、こたへ居るべき志せよ。暫くすれば、又其處へ味方續くぞかし。又日比心安き人の、我が主君に寵愛せらるゝとも、軍場にて其人の傍に寄るべからず。必ず獨立の心得すべし、又士は弓鐵砲の上手と云はるゝ事好む事にあらず。敵を打ち立てたき時か、或は城へ射込みたき事のあらんに、足輕は進め難き故に人をさして命のあらん時、射當てざれば面目なし。危き場は、敵も堅く守る故に、多くは犬死する事ありと云へり。

◉秀吉有岡城へ使者に行かれし事

附 河原林越後、山脇源太夫が事

秀吉信長の使者として、荒木村重が有岡の城に來る。村重が士河原林越後守治冬、猿めが面魂遂に仇をなすべし。今刺し殺さん事易からんと、村重に囁きけれども、村重聞き入れず。此事を秀吉に語りければ、秀吉治冬を呼び出して、懇に詞をかけ、さしたる脇差を拔きて、引出物にぞしたりける。村重差替のなくてと云へば、秀吉吾れ刀一つを賴みて、信長に奉公する者に非ずと云はれけり。後秀吉世を平げて、治冬を深く憎み、探し出して殺されけるに、

治冬君の爲に其仇を除くは、武士の常の事なり。秀吉舊き怨を忘れず、無道なりと云ひて死したりけり。

秀吉河原林に與へられし脇差は、三條吉廣が作なり。河原林が舊友、山脇源太夫重信に傳へたり。山脇は播州の人、幼かりしより勇名の聞えあり。甲州に赴きて內藤修理が許にあり。其後攝州に歸り、荒木攝津守村重に仕へ、頻に用ひられて、長臣たり。村重神田伊賀守と軍の時、神田が軍奉行郡兵太夫は、勝れし剛の者なるを、毛付して討ち取つたり。凡そ首數九十八取りて、首供養三度せしとなり。荒木亡びて、重信中川清秀の許に隱れ居たり。清秀の妻は重信が伯母なり。前田利家、柴田勝家、丹羽長秀一萬石をもて招かれしかども、引き籠りゐたりしを、護國公「池田信輝公」懇に招かせ給ひしかば來り仕へ、山崎合戰に、明智が士大將丹波國にて、しら山とすひける城を預かり居たる、村上源之丞と馬上にて槍を合す。山脇が槍は十文字にて、村上が馬の額に疵付き、馬飛び出しければ、源之丞馬より落ちけるを、從者駈け來り助くるを、源太夫詞をかけ、村上と引組みける所を、味方數多落ち合ひて、村上が首を得たり。其後も功名ありて士三十騎の將たり。

◉成田助九郎誅せらるゝ事

秀吉北國に赴きし時、丹羽長重の小松の城に立ち寄りたるに、長重の士成田助九郎といふ者あり。秀吉先殿を北陸道の管領にせんと、志津ヶ嶽にて約束ありつるが、加賀二郡越前若狹を賜りぬ。先殿過ぎさせ給ひて後、小松十二萬石に減じ、既に滅亡に近しとも申すべし。秀吉の不義憎むに餘りあり。臣に討手仰せ付けられよ。輙く刺し殺すべしと云ひけれども、長重聞き入れずして止みたるを、秀吉いかにして洩れ聞かれけん。大に怒りて、成田を憎む事甚だしかりければ、成田小松を退て、伊勢の朝熊に隱れゐたりしを、終に搜し出して殺されけり。成田が子半左衞門、長重に仕へて、小松の軍に戰功あり。

◉谷大膳武勇討死の事

天正六年、秀吉播州三木の別所長治を擊つ時、谷大膳は濱手の大將たり。兼て大膳は寄騎にと秀吉望まれしかども、信長許されずして加勢たらしめらる。大膳敵三騎と馬上にて槍を合せ、皆討取りたり。秀吉疾くかさの丸「出丸の名なり」を攻められよと云へば大膳城堅固にして、容易に攻め取り難しと答ふ。秀吉日頃勇名高き大膳、小城一つ破り兼ねたるやと、詞を懸けられければ、大膳も怒り、秀吉も既に刀の柄に手を懸くべき色なりしかば、竹中半兵衞立ち塞がり、戰場の勝負こそ力を盡すべきに、いかなる事ぞといふ處に、蜂須賀彥右衞門も來たり、秀吉の轡を取て引き返す。夜に入りて、秀吉酒肴を持たせて、大膳が陣屋に至り、

今日の武功抜群なり。先の問答は、我が過ちにて後悔大方ならずとて、懇情甚だし。其後大膳手勢を率ゐて、かさの丸へ攻めかゝる。城中もこゝを大事と防ぎ、矢石を打ち出せども、大膳少しもひるまず。士五十騎歩卒二百ばかり、一の城戸口を押し破りたれば、手負死人、數を知らず、寄手押し續けば、大膳念なく乘り破りたるが、數ケ所手を負ひて、踞き居たる所に、法師武者猩々皮の羽織着たるが、引き返して大膳に向ふ。大膳、吾れ疲れたり。近寄りて首を取て高名にせよと云ふを聞き、走り懸りて一太刀打つ。大膳敵の草摺を取て引き寄せ、脇差を抽きて刺し貫く處に、別所が士大將由井小兵衛と名乘て、引つ返して馳せ來り、大膳を一太刀斬りたり。かゝる處へ大膳が嫡子、出羽守十七歳なるが走り寄つて、疊みかけて由井を打て、芝居に打ち据ゑ、押へて首を取り、父に向へば大膳は息絶えたり。出羽は父の死骸を陣屋に入れ、取りたる首を秀吉の實檢に備ふ。秀吉大膳が討死せし由を聞きて、せめて死骸になりとも對面せんとて、陣屋に行き、惜しき人を討たせけるよとて、涙に咽ばれけり。

秀吉家譜に載せたるとは大に異なり。然れども此一條は、谷の家に傳へたる說なる由なれば、家譜は誤なるべし。

大膳は江州犬上郡の人　信長に仕へて、川尻肥後守、稻葉伊豫守と同じく、軍の評定の人に加へらる。十四歳より四十七歳まで、槍を合する事九度、首を取る事十七度なり。

◉戸川肥後守秀吉公を負ふ事

浮田秀家伏見にて、秀吉を饗しける時、廊下より行く處の白砂の上に、戸川花房を始めとして、並び居て拜謁す。秀吉戸川達安に、吾れを負へと云はれしかば、戸川秀吉をかき負うて書院に行きけり。秀吉かゝる振舞多かりければ、夫れよりして、古き家々の禮儀も多く失ひたりとぞ。

◉直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳子、樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて景勝に至る。景勝奥州にて百萬石を賜はりし時、米澤三十萬石を直江に與へられ、陪臣の中第一の大祿なり。長高く容儀骨柄双なく、辯舌明かに、殊更大膽なる人なり。且つ文藝にも暗からず。五臣注の文選は、此人板行させたるとなり。詩をも作りて、

春雁似吾吾似雁。　洛陽城裏背花歸。

などいふ句も世に聞えけり。伏見の城にて、諸大名幾等も並み居たる中に、伊達政宗懷中より金錢取り出して、人々に見せられしに、其頃金錢の始まりし比にて、珍らしとて持てはやさる。直江が末座にありしを、これ見られよとありし時、直江扇の上に金錢を置きて打ち返

し、女童の羽根つくやうにして觀しかば、政宗いや苦しうも候はず。手に取られよと言ひも終らぬに、直江、謙信の時より、先陣の下知して麾取り候ふ手に、かゝる賤しき物取れば汚れ候ふ故、扇に載せて候ふとて政宗の方に投げ戻しけり。兼續父も山城守と云ふ。もと僧なりしが、還俗して武勇を事としけり。

◉石田が黨東照宮を謀り奉らんとせし事

慶長三年八月十八日太閤逝去。其比台德院殿伏見におはしまして、太閤の病重かりしかば、關東に赴かせ給はん事延引なりしが、俄に十九日伏見を發して、關東に歸らせ給ふ。是れ東照宮遠大神慮なるべし。四老奉行内々相計り、德川殿伏見にありて、權威日々に增長すべし。秀頼公を早く大阪へ移し、諸方一同に參り集りて、尊敬すべき事然るべしと、東照宮に强ひて申して、同四年正月十日大阪に移居あり。東照宮も送らせ給ひて、大阪へ御出あり。片桐東市正且元が宅に、御止宿ありけるが、十二日の曙に、俄に打ち立ち給ひて、淀川を御船にて上らせ給ふ處に、平方近く川岸に人多く群りけり。若しや謀り奉る叛反の輩にあるべきかと驚く處に、井伊直政が足輕と見ゆると申す者あり。程なく御船近く成りければ、脇五右衛門などいへる物頭、踞きて待ち奉りて、頓て伏見に入らせ給ひぬ。

又此時御乘物には村越與三右衛門を乘せさせ給ひ東照宮には陪者の騎馬の中に御混りあ

りたりとも云へり。又井伊直政は馬上にて御迎ひに出で、物具して其上に常の衣服着たり。直政が手の者、皆下に具足を着、弓鐵砲の者彼是れ二千ばかりにて、乘馬は殊に御愛ありける彌ハ鹿毛を引き來りければ、其儘打ち乘らせ給ひて、歸らせ給ふとも云へり。此頃既に、世間さま〴〵に言ひ觸らし、如何なる事か出て來らんと、人々危み思へり。東照宮も御屋敷に、大竹にて菱垣を結はせられ、御門を押し開き、敵寄せ來らば、堅固に防ぎ守らせ給ふべき設けあり。御門を開く事、然るべからずと申す者ありければ、門を閉ぢて守らば、敵に侮らるゝなり。只押し晴れて軍の支度をせよと、仰せありけるとぞ。京極高次參りて、大津の城へ引き移らせられんやと、進め申されけるを聞し召し、敵寄せば上の臺へ押し上げ、金札の宮の邊にて、眞丸に成りて一合戰すべし。吾が兵二千ばかりやあらん。敵何萬もあれ、打ち破る事難からずと仰せられけり。正月十九日安國寺瓊長老、生駒雅樂頭、中村式部少輔、堀尾帶刀四人、四老五奉行の使として、東照宮に參りて伊達政宗、福島正則、蜂須賀至鎭緣組の事によりて、德川家獨恣なる事ども、豐臣家のため然るべからざる由申す旨あり。依りて世の中愈さま〴〵なる風説あり。其頃榊原式部大輔康政伏見に上るとて、二月二十五日尾州宮に着きけるが、伏見の騷がしき由を聞き、日夜道を急ぎて。途中にて聞けば、伏見にて既に東照宮の御館へ敵押し寄せたりなどゝ云ひ觸らす。二十六日の晩膳所にて、伏見よりの飛脚に行き逢ひ、未だ弓箭は始まり申さぬと云ふを聞き、康政悅んで則ち膳所に

陣し、秀頼の下知と稱し、伏見の騷ぎに付き、東海東山兩道の人留すると觸れさせ、勢田矧橋を三日押し留めたり。其比の騷がしきに、諸國より聞き傳へ、京伏見に集る人殊の外多かりしに、押し留められ、草津野洲を始めとして、何萬といふ數計るべからず。扨康政三日の後、未の刻に構へたる關所を開かせたれば、旅人一同に京伏見に入る。康政膳所を立て、七千ばかりの人を率ゐて伏見へ入りければ、京にて關東より數萬の軍兵馳せ着きたりといひ觸らす、康政小具足着て鉢卷し、馬印押し立てゝ參りければ、御前に召して、御手づから御のしを下されけり。康政下知して、御藏より料足數千貫出させ、人々に分け渡し、内府の軍兵六萬にて駈け着きたれば、館にて兵粮の用意、俄に設け兼ねたりといはせて、店屋物を買ひ來らしむ。數千人京伏見淀に馳せ廻りて、赤飯菓子酒やうの物、一つも殘らず買ひ來れば、關東より十萬の軍兵集りたりと、人々思はぬ者もなし。是れに依りて、石田が謀空しくなるといへり。東照宮、柳生又右衛門は、石田が士大將島左近と同國の交誼にて、懇なりと聞し召され、左近方へ行きて物語して、彼は如何にかいふらん。聞て來れと仰せありしかば、柳生左近に逢ひて、世間の物語りし、いふに成るべきとならんといひければ、左近聞て、今松永明智二人の智謀決斷ある人なければ、何事があるべきかと打笑ひけり。此仔細は、或時石田密謀に及びけるに、左近豊臣家の爲を存ぜんに、斯くあらで止むべきや、されども爰に存ずる旨あり。大事を企つるには、我が志す處を無二無三に決斷して、少しも猶豫あるべから

ず。然るに去年より度々仕果すべき圖を空しく外し給ふ事多し。既に時を失ひぬ。能く〳〵世の有樣を見るに、石田の家を惡む人々大方德川殿に心を寄せたり。當家の存亡計るべからず。一日の過ぐるも殘多し。唯理を非にまけて、唯今まで疎遠の諸大將達へも謙りて、遺恨なく計らひて交り親しみ、暫く時を待つべきも、一つの計策にてこそといひければ、三成、されば縱令一時に能く志を遂ぐるとも、後の安かるべき樣を計るなり いひけるに、左近、いや〳〵、事能く一時に勝を得るならば、後に何の危き事か候ふべきの内府に親しき人々を積るに、其兵二萬に過ぐべからず。味方素より心を合する大國の人々、又近國の兵を集むるとも、忽ち馳せ寄つて、五六萬には及ぶべし。景勝卿采配を取て下知し、關東を攻め破らんに、何程の事か候ふべきとて、又存ずる旨をいひ出しけるに、客の來て、三成座を立ちければ、樫原彦右衛門居殘りて左近に向ひ、いかにも仰せ然る事なり。松永彈正、明智光秀は無双の惡逆の者なれども、事を決斷するに、誰れか相並ぶべき。此詮議の破り相手に、賴むべきものをと云ひけるとかや。それに由りて斯く柳生には答へけるなり。

◉細川忠興忠告の事

石田三成を始め相組みする人々加賀利家を推し尊みて、東照宮を傾け奉らんと、日夜相謀れり。利家の長子利長、細川越中守忠興を招きて、累年親しみたる間薄からず。さぞや危から

んを扶け給はんやと問はるゝに、二代の知音にて候へば、聊か龜略候ふまじと答へらる。利長尤も斯くこそあるべけれ。頃日石田三成、小西等相計つて、内府の向島の館を攻め圍まんと議決しぬ。潛に知らせ候ふぞと語られしかば、忠興熟々と聞きて、日比の親しみ、斯る大事を告げ知らせ候ふ事淺からぬ事なり。心得候ひぬ。明日參りて申し合せ候はんとて歸られけるが、

是はこれより前、東照宮は藤森におはしけるに、井伊直政が士木俣土佐若し風に乘じて御館の隣なる宅に火をかけなんは、危き事ならと申しければ、東照宮は御寢所へ土佐を召して、具に聞し召され、其翌日向島に移らせ給ひけり。

直に向島へ參りて、東照宮御對面ありしかば、忠興近習の人を退けて、唯今參る事、別の仔細も候はず。石田等黨を結び、利家を依賴として、君を亡し申すべきと、企て候。利長と年頃の親しみに依りて、具に洩れ承りぬ。彼等が謀に落ちざる事設けこそ、然るべき候へと申されけるを聞し召し、過ぎし年に信長攝州出陣の比、弱年にて武勇の譽れありし故申し通ぜしなり。斯る深志あらんとも知らざりける悔しさよと、悅ばせ給ひて、榊原康政を召して、如何あるべきと仰せあり。事急に候。後れては人に制せらるべしと申す處に、忠興國のたすけは人の與する事最一に候へば、淺野幸長を召され候へ。彼れは必ず德川家に心を寄すべしと申されければ、頓て使を走らせらるゝに、取りあへず參られたり。忠興出向ひて、事の仔

細を語らるゝに、人多き中にかゝる事を知らせらるゝ事、交りの甲斐あり。かゝる時は疑ひの生じ易き習ひに候ふとて、忠興幸長先づ誓紙を書きて奉りぬ。若し敵寄せば、幸長は宇治川を固め候ひなん。忠興は敵の中に打ち交り、不意に一軍仕り候ふべしとぞ相計られける。されども是れも始終勝を全うすべき道にもあらず。利家と和平あるに踰ゆる事候ふまじ。只兩人に任させ給ひ候へとて、其翌日忠興夙に利長の許に行き向ひて、昨日の密謀一々内府に告げたりとぞ語られける。利長色を變じて、こはそも戯に候ふや。實に候ふやと驚かれけり。忠興、されば愚者も千慮の一得に候。この事を思慮するに、石田謀つて兩雄を鬪はしめ、其弊に乘らんと料るものに候。兩雄相鬪ひて亡びなば安藝の輝元、備前の秀家などを大將として、吾等が如き者は手もなく、攻め平げなん所存見顯し候。寛仁の内府に與してこそ、家をも起すべけれ。三成と心を合せて、名を汚し身を失はんは必定にて候。かく申す詞を許容候ひなば、疾く内府と令親「利家」と和睦ありて、世穩かならん事こそ然るべう候へ。是れ全く前田家を佑くる所にて候ふと、詞を盡して規誨せられしかば、利長も深く思慮して、道理に當れる事どもにて候。さらば父に申さばやとて、利家に斯くと告げて、利害を詳らかに語られけるに、利家も諾せられけり。

又一説に五老御奉行の内、爭論不和の事あらば、生駒雅樂頭親正、中村式部少輔一氏、堀帶刀吉晴、三人和平を取り計らふべしと、兼て太閤の遺言に因りて、井伊直政に就き

て和平の事を計れりとも云へり。

◉東照宮細川家の難を救ひ給ひし事

關白秀次生害の後、細川忠興の家に、罪蒙るべき事起りけり。其仔細は、秀次常時の大名財用乏しき向へ、潛に金銀を貸し給ふ事あり。是れに人の心をとらんがため、且つは財を利せんが爲なりけり。忠興も黄金二百枚を借りてければ、彼の家金銀出納を司どれる人、急ぎ彼の金返し給ふべし。券契を破り捨て候ふべし。左なからんには、太閤の奉行に券契を出すべしとぞ申しける。忠興いかにも叶ふべからず。此事太閤に泄れ聞えなば、罪科に處せられん事疑ひなし。如何すべきと案じ煩らひ、長臣相集りて議しけるに、松井佐渡守申しけるは、某年頃徳川殿の御内なる本多佐渡守正信と親しく相語らひ候。彼に付きて徳川殿を頼み參らせん。徳川殿はさる頼母しき人にておはしませば、いかで是れ程の事にて、人の家亡びんとするを見捨て給ふ事は候ふまじと申す。忠興、我れ日比内府と親しくもなし。斯る時頼むに便なし。されども汝正信と親しからんには、試みに計り見よといふ。松井本多に云々の事ありといふ。徳川殿聞し召し、其儘松井を召され、人を退て尋ね問はせ給ひ、正信しして唐櫃二つ開かせらる。一つに黄金百枚づゝを入れられたり。其黄金の箱に題せし年月を見よと仰せあり正信是れを考ふるに、二十一年の前未だ三河に御座有りし時に候ふと申す。徳川殿松

井に向はせ給ひ。凡そ金銀は出納の司ある事にて、若し人知れず用ひんとする時は吾が心に任せ難し。されば此黄金を貯ふる事、斯る事を待つに年久し。今其の家の爲に、吾が年比の志達しけるこそ嬉しけれとて、自ら是れを松井に賜ふ。松井大に悦び、かゝる有難き御事こそ候はね。既に亡びんとする家の、斯く再び繼ぐべく候ふ事、偏に君の御恩なり。細川が家の候はん限りは、いかで此情を忘れ奉るべき、速に本國に申し下して、黄金めし上せ、償ひ奉るべきにて候ふと申す。東照宮聞し召し、いや〳〵此事世に泄れ聞えなんには、兩家の禍もとならん。夫れ故に斯く人知れず用ふべき料の物取り出したれ。努々償ん事然るべからずと仰せられしかば、松井殊更に悦び、急ぎ歸りて此由を申し候はんとて、御前を立ちて出にけり。遙經て、忠興其事となく御館に參り、御對面の序に正信を呼び出し、東照宮に向て申しけるは、年頃忠興が家人に仰せ下されし事、謹んで承り候。何事のおはしますべきには候はねども、若し御家に事あらん時は必ず君の御爲、國をも身をも捨てゝ、此度の御情に報じ奉らんずるにて候。さりながら、忠興常に伺公仕て候はんには、本意遂げん事叶ふべからず。是れより又素の如く疎々しくこそ候べけれとて、御暇申して出でぬ。されば年頃、忠興東照宮と親しからずして、利長を諫め爭はれし故に、利家も一向我が家の事思ふなりと心得て、忠興の申す旨に從はれしとなり。

◉七人の大將石田を討たれんとせし事

慶長四年大阪に在りたる諸將の中、福島正則、淺野幸長、黑田長政、已下七人、石田と不和なりし人々使を以て、朝鮮にありし時、各々力を盡し軍せしに、目付に定められし福原右馬助直高、垣見和泉守家純、熊谷内藏助直陳、太田飛驒守政信等私曲を構へ、太閤に達せざりし事どもを憤りて、罪科に處すべき由申しやられしより事起りて爭論甚しく、使度々に及べり。七人の諸將此事たゞに止むべきや。石田を討ち亡ぼしても、必ず所存を遂ぐべしとの趣を、石田聞きて、上杉景勝に如何すべきと問ふ。上杉も案じ煩ひしに、佐竹義宣一頃三成に親しかりけるが、是れを聞きて、伏見より大阪に赴き、三成が許に到りて、別に存ずる旨もなし。德川殿に告げて、和平の事を賴むべき外、謀あるべからずとて、三千ばかりの兵を以て三成を伴なひ、伏見に赴きければ、諸將事を延したる故、石田を逃しつるよとて、既に追駈けんとせられしに、早や伏見に着きたらんと聞えしかば、齒を切みてさて止みけり。東照宮聞し召し、太閤在世の時は、寵を賴みて、權威に誇り無禮にもありぬべし。今に當りて諸將の申さるゝ處、其理なきにあらざれども、罪の疑はしきは輕くすとかや聞きぬとて、强ひて宥め給ひけれども、尙止むべからざれば、さらば今、世治まりたるに、弓箭を起さんとや、力なき事どもなり。我れ石田と心を合せ、諸將と軍すべしと仰せられしにより、止む事を得ずして、怒を押へてさて止りぬ。其後今の世の亂れとなるべきも、又穩かならん事も、一己の所存にあるべし。暫く佐和山に退きて、公の萬事に相携る事なくて然るべからん。

子息隼人正の事は、我れよく家を全うせんゝを計るべしと三成に仰せられしかば、忝なき由謝して、佐和山に歸るべきや否や、景勝に相計りしかば、景勝我れ會津に歸りて上らずば、內府催促あらん。其時侮りたる體を顯して、罵るほどならば必ず軍を出さるべし。行懸りに容易く打ち破られんや。固く支へて戰はん。其間に大阪に討つて出で、素より心を合する諸將を集め、旗を揚げられよ。是れに過ぎたる謀あるべしとも覺えずと計られしかば三成佐和山に赴くにぞ定めける。三成が士大將島左近昌仲、三成に勸めけるは秀家秀詮も、兩端を持するにや覺束なく候。佐和山の軍兵を計るに、一戰を決するに不足候ふまじ。一千餘を留めて、佐和山を守らせ、蒲生備中、舞兵庫、高野越中と、某各二千の兵を率ゐて、風上より火をかけ、所々を焰となして攻めかゝる程ならば內府拒き兼ねて引き退かれん處を、追つ詰めく軍せば、爭か打ち洩らすべき。萬に一つも志を遂げざるならば、潔く御腹召され候へ。空しく佐和山に退きなば、後悔するとも益あらじ。居ながらあたら圖を外さん事、口惜しく候ふと云ひけれども、三成は景勝と相策りし故、昌仲が謀略を納れずして止みぬ。三成既に佐和山に赴くに及んで、七人の大將猶憤り深かりしかば、道に俟ちて討ち取るべしと言ひ觸らす。東照宮聞し召し、今は打捨て置かばや、如何すべきと、本多正信を召して仰せあり。正信熟々思慮して、今日本を取て德川家に献ずる者は、石田にてこそ候へ。其故は三成奸曲あるゆゑ人々惡みて候へども、又三成に與する者も多く、容易く打ち亡ぼし難し。故に言を

禮儀に託し、手を徳川家に借りて、亡ぼさばやと存ずる人々候へば、三成今亡びて後、悉く平均に歸せんや。諸將外には殿を敬すといへども、内には隙を伺ふ人も候はん。故太閤の恩を得たる豪雄、秀賴に背くに忍びず。三成を憎むの心を移して、殿に懷き申すべし。三成あらば、殿を敬し重んぜん事、愈厚かるべし。三成久しく人の下に屈むべき者に候はねば、頓て弓箭を取るべき事、掌の中にあり。三成敵とするに足らんや。其時三成に打ち勝ち給ひなば、殿自然に勢ひを得させ給ひて、誰れか靡き從ふ者候ふべき。日本三分の二は、殿に歸服すべく候。只三成に御心を付けられ、暫く彼れを立て置かれ候ふこそ、然るべからめと申しけるを聞し召し入れられて、三成が旅程心許なしとて、結城秀康卿をもて送らせ給ひけり。

常山紀談（後編）終

◀十錢文庫發行目錄▶

1 常山紀談
2 絵入評釋 當世娘節用
3 評釋 江戸繁昌記
4 神皇正統記
5 萬治版 伊曾保物語
6 絵入評釋 修紫田舍源氏
7 絵入評釋 夢想兵衛胡蝶物語
8 絵入評釋 東海道中膝栗毛
9 美濃舊衣 八丈奇談
10 大和俗訓
11 鳩翁道話
12 絵入評釋 金瓶梅
13 絵入評釋 西鶴文粹
14 新譯近古史談
15 近世畸人傳
16 旬殿實々記

明治四十年十一月廿日印刷
明治四十五年一月五日發行
（定價金十錢 郵稅金四錢）

東京市淺草區三好町七番地
編輯兼發行者　大川錠吉
同　市京橋區山下町二十二番地
印刷者　牛坂三郎
同　市芝區愛宕下町二丁目五番地
印刷所　邦文社

不許複製
十錢文庫第十七編
常山紀談

發行所　東京市淺草區三好町七番地　大川屋書店　電話下谷五七三　振替東京四〇八

大賣捌所　東京市神田區橋本町　朝野書店

賣捌店

東京
神田　東京堂　銀座　北隆館　神田　上田屋　淺草　岡村
尾張町　東海堂　日本橋　至誠堂　日本橋　文林堂　日本橋　林平

全國
大阪　同盛堂　杉本書店
同京都　同田村書店　文盛館　旭弘書店
名古屋　同百星　野中書店　秋田書店　新潟　森成田書店　今泉書店　前川書店
久留米　同竹架書店　仙台　金港堂書店　高崎　小林書店　上村書店
函館　小菊書店　水戸　川又書店　宇都宮書店　古賀書店　高橋書店　甲府
札幌　富盛堂　岡崎　焼乎堂　海老原書店　古賀書店　高橋書店　甲府
小樽　同長岡　目黒書店　萬石　松川書店　高澤書店　金水堂　前橋　同
同　上飯田　同　目黒書店　高岡　學友館　積善館　田中文友堂　金港堂書店　同
同　甲府　同　本　日高　新美書店　鹿兒島　熊本　久永書店　清水屋書店
同　柳川　正月堂　磐城平

便利　携帶

續々新刊

ポケツト入

日本之文庫

定價各冊金廿五錢　郵送料各冊金四錢

大川屋書店發行

東京市淺草區(厩橋畔)三好町七番地

電話下谷一五七三番・振替東京四〇〇九番

世界の讀書が日一日と多くなる。旅行又は電車、人力車上にも碌々として惰氣を催ほしながら目的地に達するを待つは愚人に等しかるべし。此時に當り『日本之文庫』を携帶せば倦怠の起る事なく愉快に速に目的地に達する事を得べし。是れ本書の出づる所以なり。其讀書法は乘車中は肱を體に付けて讀書せば奈如なる動搖も決して小學讀本を讀むに異ならず尙他の書籍目錄は往復はがきで申越せば送る。軍談と合戰、美談と奇談、探偵小說、勇士と仇討、騷動と名僧、怪談と人情、大岡政談等を講談又は平易文章に總振假名付なるが故に何人にも讀み得る也

製本　表紙最上總クロース、金文字、人頗美本。
口繪　アートペーパ、コロタイプ美術印刷。
本文　改正六號活字、新式平形總振假名付。
用紙　上等なる細來紙赤門八十斤を用ゐたり。
印刷　振假名などの鮮明は是に及ぶものなし。

内容の概略は次の廣告を讀むべし

十錢文庫に題す

十錢の銀貨、形小なれども、ある手よりもこぼれず、落ちたるなば拾はざる人無し。神功皇后も之を以て無二の忠臣とし、和氣清麿も之が補助に依りて使命を全くす。又足無くして天下を横行すべく、或は四輪車に乘じて盤瓏の下を往復して餘りあり。なほ其力は能く敵島を占領すべし。且其力をあつめては鐵道をも廣軌にすべく、水害の後をも復舊すべし。かの關稅問題も之が爲に紛々を生じ、かの兩班儒生も之を得て併合を祝すとかや。こゝに弊師は、其力を利用して、古今内外の著作を普く天下に及ぼさんとす。希くば之を以て家々の文庫に滿たしめ、之を以て人々の歡興を添へむ。もし又過ちて、かみくず籠に落ちたりとも、拾はれて再、明窓のもと淨机の上、乃至寢室列車自働車に乘せらるべし。

明治四十三年極月

百華書房主人しるす

曲亭馬琴講演

椿說弓張月

本編を全三冊に別ちに講述す、曲亭馬琴の名作で、德川文學の精華たり、鎮西八郎爲朝が、有爲轉變の一生涯、廣き大和の島原を忍びゆく世の危うさや、彼ちら此ちらの島渡り、持つて生れた強弓は、至る處に名を殘す、女護ケ島やら男島、扨ては荒くれ島男、群がりよつて引く弦の、月と張れども爲朝が、一寸動ぜぬ面魂しい、嘸ぞや讀んだら面白ろかろう。

邑井一講演

赤穗義士銘々傳

上中三冊に別ちて演述す、本編の悲壯痛快なる事は今更に喋々するまでもなけれ共從來發刊されたる數多の書中の尤たらん事を期したり苟しくも忠臣四十七士に關する事項は細大洩さず悉く之を收めたり、殊に以て武士道鼓吹の良材たるべきを信ず、家庭に一本を備へ置かば幾多の少年子弟をして忍耐の必要を感得せしめ又邪は滅び正は千歲の後まで美風を殘すと云ふは本書なり

邑井吉瓶講演

相馬大作

相馬大作は變名實は南部藩の忠臣、尾崎秀之助が君主に仇なす津輕藩に對し、怨恨悲愁の餘り、忠義の一念抑へ難く、慷慨其の身を犧牲に供し、飄然として脫藩し、名を改め布衣に伍し、種々樣々の流轉漂浪、千辛萬苦、幾度か死窮の運命に會し乍らも巧みに身を扮し、其の藩主三代まで暗殺し、遂にお家を斷絕せしめ首尾よく主家の禍根を絕ち、身は平然として刑場の露と消えたり。

松林伯知講演

川中島

此合戰の起りは個人の心情を憐みて戰ふは甲斐の勇將信玄と越後の猛將謙信が互に削る鈴の音、川中島に研して、人馬の譽勇し、龍嘯きて風起し、虎吼へて雲生ず、謙信が跋扈に發矢と下ろす太刀先を、金作りの軍配に、ドッと受けたる信玄が、近習の武士一度に切掛る、謙信堪らず退いて、再び寄する鯨波聲、アナ勇ましの合戰ぞ。

秋里籬島講演

源平盛衰記

本編は上下二冊に別る、榮枯盛衰世の習ひ、有爲轉變の有樣や、玆に源平盛衰記、白と赤との旗奪ひ、源氏と平家が浮沈をば、通俗體に振假名で、面白可笑しく讀みやすく、したり承久保元の戰や、平治の亂に、一度衰し源氏、賴朝卿の苦辛やら、石橋山の旗上や、義經公の名策に、平家は亡滅し、屋島、檀の浦の戰にはあれ果敢なく打沈さま、悉く詳記したり

無名氏講演

岩見武勇傳

重太郎は武技に長じ、家中の惡侍十數名を討つて諸國修行に出發する次第を始め、其の兄と妹が父の仇討を尋んとて悲慘極まる反討を受け、又は大蛇、大猪を退治する顚末より、太閤秀吉の免狀を得て、天の橋立、白砂青松裡の大活劇は素より、復讐美譚、大阪城に入るまでの壯快悲烈の物語り、其の他の痛快なる活劇は蓋し世の少年子弟の興奮劑たらずんばあるべからず

曲亭馬琴講演

南總里見八犬傳

曲亭馬琴の作にして、房州里見の城主が今や混亂する敗軍の場裡にあり、豫て飼養せる一狗に向ひ汝首尾よく敵將の首級を得ば我一人の娘を取らすべしといひしが事の起り、要するに犬の精が種々なる不思議を演ずるなり、其の八犬といふ所以は八個の犬精が各地にありて人間と產れ種々變化奇怪の業をなす、後悉く里見家に仕へ飽くまで忠勤を盡すといふにあり

柴田薰講演

柳川庄八

携帶の便を利り上中下に講演す。親の仇を討つたる事より入獄の身となるや庄八は其の非法を怒り破牢を遂げ夫れより自ら仙臺の破牢の罪人なりと呼號して天下を潤歩し他の爲め大いに義俠を振ひ、邪を排し、正を助くるに於ては假令王侯貴人たりとも敢えて恐れざる古の大豪傑柳川庄八が來歷奇談を記す一個硬骨男子が奇雄に富める勇壯活潑なる讀物なり

放牛舍桃林講演

大阪夏御陣

大阪慶元兩度の合戰を夏御陣、冬御陣の二冊に別ちたり夏御陣合戰たるや、家康が積年の志望を達したる大戰にして大いに見るべきものなり夫の秀吉が慧腦を搾りて築きたる、難攻不落の名城は、幸村が謀略も水泡に歸し後藤木村が忠勇も、淀君の寵ある大野が毒舌の爲めに消散し、あはれ果敢なくなる次第、讀者をして切齒扼腕の感あらしむ

放牛舍桃林講演

大阪冬御陣

本編は夏御陣の編と共に豐臣、德川天下別目の大混亂、なりとす大阪城の崩落する顚末を詳記す。關ヶ原以來互に睥睨して、怪雲彌々急なりしが、果然此の編に於て破裂し、天下騷擾を極め、眞田幸村を初め、數多名士の大阪入城の次第より、大阪方內江其の他勇壯なる戰場の模樣は蓋し讀者をして其の場裡に在るの感あらしむ、老年、青年、少年子弟の好讀物なり

三遊亭圓朝講演

鹽原多助

正直者の多助が律義一遍の光彩ある生涯を描きたるもの當時は天下の世態未だ一般に完備せず爲めに種々の迫害に遇ふと雖も屈する色なく飽くまで正義を以て拮据黽勉し苦辛慘澹の結果一度先代の失ひし財寶名譽を復興し一代の面目を施こし、町人にして後世に名を擧げたる所以のもの本書を讀むに依つて首肯すべし、其他多助が奮勵の狀以て龜鑑となすに足る

無名氏講演

關ヶ原軍記

上下二冊に別る、人も知る天下別目の大決戰の次第石田三成が陰謀發端より始め太閤秀吉の薨去に依つて生じたる根錯節を由來終局は素より其の間の複雜なる給斜及び戰場の模樣、數多名將の討死等石田小西の捕縛處刑より內府公の凱旋、諸將の論功行賞に至るまで細大洩さず悉く詳細を極めて記述したれば、大阪軍記と併讀せんか興最も深かるべし

放牛舍桃湖講演

塚原卜傳

卜傳が武術修練の爲め夙に日本六十餘州を回歷し千辛萬苦を嘗むる武勇談より或は深山に惡徒を退治せんとて其の術計に陷り溪谷に呻吟する身となるや一疋の老猿の爲め助けられ又山間に妙齡の一少女が賊の爲めに危ふきを救ふ等其の他父兄の仇たる强敵を倒すなど後山中に籠りて一流を案出するに至るまでの壯烈なる武勇談を記したるものなり

桃川燕林講演

柳生旅日記

劍士柳生十兵衛光義が、其の身病痾に事よせて、自ら狂變の體を見せ、津々浦々の旅日記、珍談奇談のさて面白き、夫れが中にも、各地の軍機悉く、探り明かして功を立つ、後に其身は世を厭ひ、後進輩士を取立つる、柳生が家門の譽れやら數多の武士が、大刀競ひ、太刀は折れても名は殘こる名譽の物語り朝日に匂櫻花、天晴武士のいさほしを語るは本書なりけり

無名氏講演

元和三勇士

戸田、田宮、石川の三勇士が、一生の素懷を全せんとするに當り、酸慘萬苦の狀又或る時は敵の重圍に入りては幽谷に身を以て遁れ、幽仙の土人が義に依つて僅かに生を全ふし、其の他武術を他邦に練るが爲め殆んど乞食となるも道義を重んじ、百難を排して萬患をなめ、拾得の大金を其主に戻す等常に大丈夫の志を完ふし、終に素望を達すと云、名譽と道義を說ける悲壯の譚なり

神田伯山講演

宮本武藏

武藏は既に、圓命二刀流の鼻祖として名あり、嚴父たり、先師たる人の仇敵、天下の剛勇佐々木岸柳を討たんが爲め、江戸を發足し、九州に至る三百里の道中奇談、其間の奇話に富める、他流に技を爭ひ或は敵の策の爲め、熱湯の裡に命を落さんとする等、後入山して薙髮するなど、一度繙かば當年の其人が武略の程、蓋しその快活なるに絕叫すべし

黒岩涙香著

人耶鬼耶

佛國に於ける古來類例なき大疑獄の顚末を演述す、本書は世の探偵に從事するものをして其識の難きを知らしめ又世の裁判官たる者をして判官の苟くもすべからざる事を悟らしむる者從來有觸れる探偵小說とは大に其撰を異にす、田舍の一軒家に於ける老婆の慘死體、青年判事の失戀、一貴族令子の殺人嫌疑、犯人の情死、波瀾萬丈、迷宮怨府、疑はしく、後に至り雲晴れ霧散ずるといふ

錦城齋貞玉講演

荒木又右衛門

有名なる伊賀越の仇討及び將軍御指南番にして武道の泰斗たる柳生家の消息は又本書に依つて盡されたり、一家老の妾腹の娘の私通より延いて大名旗本の一大決戰に及ばんとし今や國家の一大事を惹起さんとするに至るなどの事なく又右衛門は一個剛勇の武術者屢々生死の境に出入するも恬として恐れず飽くまで正と義と仁を標榜して武勇を振ふ次第を記すものなり

双龍齋貞鏡講演

田宮坊太郎

孝子坊太郎が少年の身を以て十八年の天津風艱難辛苦を積んで父の仇を討ち果すといふ筋、古來數多ある仇討の中にて如斯く人の情緒を動ずものは又とあるまじ其母たる人は是亦節操正しく坊太郎に首尾よく本望を遂げさせんが爲め夫に別して孤獨の身命を酸慘悲烈の裡に金毘羅大權現に奉獻し星霜を閲みして思ふ望みは達せしも終に仇の首級を携へて狂奔し憤死する等悲慘極なり

無名氏講演

佐倉義民傳

題字の如く、義民の頭目たる、佐倉宗五郎が信義の爲め、家や最愛なる妻子を顧みず命を惜まず、數多の人々の犧牲となりて、勇を振ひ、土地の領主に抗して、將軍に上書し、其の身のみならず、罪なき愛妻愛子と共に、慘鼻極まる處刑を受くる事より、其の他惡政の摸樣、上野介殿が亡魂の爲に困悶する狀、剩へお家斷絶の悲運など、幾多の事變を詳記したる義民傳有名なり、

實井琴凌講演

小栗判官

古來我國の忠臣孝子の君父の爲に仇を報せし者の內最も大なる仇討の一たり、今は遠き其昔、小栗判官滿重が父を奸臣の舌頭に滅され、宿怨、寢食の間も忘るゝ事なく、天晴義勇に富める、十勇士を從へ、艱難酸鼻の極十數星霜を閲みし、遂に素志を達するに至る迄の顚末は、榮枯盛衰、榮善衰惡の理を示し、君臣の情、親子の情を說き、戀愛の道を知らしむ快味の內に五常の道を悟る良書

放牛舍桃林講演

本能寺

本編は我國七名將の一人なる、織田信長が、尾張半國より身を起し、天下を風靡する次第より明智重兵衛光秀が喜怒哀樂の情骨や信長公と森蘭丸が、人もなげなる振舞に、堪え兼ねたる光秀が、曉近く本能寺、信長公を弑逆し、三日見ぬ間の旗印、空しく秀吉に奪はれて、怨みを晴らす戰ひは、山崎合戰として名に高し、其他光秀が因果を受くる討死に至まで、精しく述べて、恨みなし

田邊大龍講演

曾我物語

一富士二應三茄子、富士の裾野の語り草、孝子二人の傳記にて、先祖顯はす功績に、怨みの起る因緣事、由井ヶ濱邊の、お仕置をあやうく免れ、男子勝りの烈婦が苦辛五郎十郎の人と爲り、虎や少將の艶衣、長き月日の天津風、晴れて現はる富士嶺、行きかふ姿の軍人、中に恨みの祐經が、咽喉貫く太刀の樣かゝる名譽の功績が鏡に照すをそのまゝに寫す本書を讀めや人々

桃川如燕講演

越後傳吉

本編は又實田孝子傳ともいふ、律義者なる傳吉が面目ある一代記、榮枯盛衰世の習ひ、潰れし我家を後にして花のお江戸の吉原に、幾年かせぐ物語り、花の中なる男一疋、貯めたお金の光りにて、首尾よく我家の名を起す、天晴家の傳吉が、旅の衣の雄々しくも、其の往來の道連草、大岡樣のお裁や、操正しく美しき乙女が戀の道行も、實に讀んで面白しきは本書なり

268
722

桃川燕林講演

太閤記

本編は全十冊に別ちて演ずる長講談、太閤記出世壽語録なり。尾張の國中村の一野夫が賤女、日輪懐ろに入ると見えて生れた日吉丸、猿面冠者の種々なる逸傳諸所に丁稚奉公を爲すと雖も、其主が嬰兒を井上に倒懸し、以て機を爲す武拔に擬す等、彼武士たらん事を欲して止まず、遂に飄然として故郷を出奔し、今川義元が配下松下嘉兵衛に仕へ劍道軍學を研究する事十年、偶偶北條今川の合戰なり初陣の功名に敵將川向守を討取り、大功を立てしも、義元其の風采擧らざるを見て論功せざるを嘆き、織田信長公の草履取になりし藤吉、淸洲の城や、桶狹間其他諸所の合戰に功をなし信長公の知を得、中國の題目羽柴筑前守秀吉となりすまし、豪將毛利と合戰中、本能寺に於て信長公弑逆を受くるや、秘かに會心の笑を洩らしたる秀吉、茲に光秀を誅す、内は天下を統一し、兵を及ぼし、大權を掌握し、位人臣を極め、外は朝鮮迄于戈を亂す次第に至るまで、悉く詳記せり、少年子弟の教育話し、必ず家庭の備へ物、讀んで太閤の智識の程を知り給へ

桃川燕林講演

德川十五代記

從來此の種類の書、數多ある其中で、最も尙高に通俗に、面白く且つ笑可しく全五冊に別ちて説き盡す、家康が三河の野に屛息し、天下の風雲を窺ひて時鳥啼くまで待つた甲斐あつて、豐臣公の後を承け、覇業の基を立つるより、王政復古に至るまで、三百年の物語り、種々樣々に説きつくす、人情話しや及物騷ぎ人情風俗悉く、讀んで見聞廣くせよ

月の家秋里編述

三國誌

本編は古へ、異國の亂世を物語るものにして、勇壯活潑なる、趣味津々たる軍記なり、漢の高祖が劍を拔いて秦の大亂を平均し、大基業を開きしも靈帝の不德より四海の指彈を受け、終に三國鼎立の大亂世となる次第より司馬炎天下一統して、太平に至るまでの大混亂、天が下鼎の沸くが如く孔明の智略、玄德の武雄等、其他幾多勇士の言行を悉く詳記せしものなり